



報告書

日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム  
「芸術からビジネスまで：多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」

Public Symposium

Japanese American Leadership Delegation  
“ From Art to Business: Japanese Americans in the Professional Arena ”

主催：国際交流基金日米センター

共催：財団法人名古屋国際センター 全米日系人博物館

監修：青山学院大学国際政治経済学部助教授 武田興欣

Sponsored by: The Japan Foundation Center for Global Partnership

Co-sponsored by: Nagoya International Center,

The Japanese American National Museum

Editor: Okiyoshi Takeda, Associate Professor

Aoyama Gakuin University School of International Politics,  
Economics, and Communication

# CGP

The Japan Foundation  
Center for Global Partnership

---

報告書

日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム

「芸術からビジネスまで：多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」

## ごあいさつ

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）日米センターは、世界が直面している重要な課題に対し日米が協力してその解決に貢献すること、そして相互理解に基づく揺ぎない日米関係を構築することを目的に、1991年に設立されました。

日本とアメリカは、市場経済と民主主義という共通の価値を基盤に、双方の様々なセクター間の交流を積み重ね、現在、たいへん良好な二国間関係を築いております。しかしながら、このような望ましい関係も、両国市民による地道な相互理解のための努力や協働なくしては、その安定性、持続性が保証されるわけではありません。特に、グローバル化の進展と911以降の世界における安全保障環境の下、嫌米・反米感情の拡大が広く報じられる現在、情緒的議論に流されず、日本にとってのアメリカ、世界にとっての日米関係の意味を冷静に問い、揺ぎない二国間関係を一層緊密化するためには、様々な切り口からの両国市民の対話、そして交流の深化が必要です。そうした切り口の一つとして、私ども日米センターは、日系アメリカ人との交流、「日系」からの学びと対話を通じた日本のアメリカ理解の促進に着目しています。

アメリカは多数の人種により構成され、各エスニック・グループ間の相互作用がもたらす強固なダイナミズムが国家的パワーの源泉となっている国です。そのような原理で日常世界が動くアメリカにおいて、日系アメリカ人は社会建設の一角を担い、確かなコミュニティの基盤を築き上げ、また、各界において多大な貢献を成し遂げてきました。それは、一つのエスニック・グループ全体としての日系の成功物語であると言えます。しかしながら、歴史を振り返れば、日系アメリカ人と日本との関係はいみじくも深く、日本人が日本の国策のもとアメリカへ移住したときに始まり、日本を敵国とする戦争への参加、そして、1942年の米国大統領令9066号による強制収容という厳しい体験があり、そのような苦難を乗り越えて彼らの現在があるともいえるのです。

こうした歴史の事実を踏まえつつ、私たち日本人が日米関係の意味、未来を考える際に、祖先と同じくする日系アメリカ人の歴史と経験を学ぶ。同時に、現在を生きる日系アメリカ人の方々にも日本の歴史、社会を理解してもらおう。そうした思索と知の交わりは、日米交流の一つのあり方として、また、内省的な相互対話のプロセスとして深い意味を持つのではないかと。このような考えのもと、日米間の掛け橋となりうる日系人コミュニティの果たす役割にも期待しつつ、私たちはこれまで日系アメリカ人との交流事業を継続して企画、実施してきました。

2006年3月11日から3月18日にかけて、日米センターは外務省と連携し、全米各地の日系アメリカ人リーダー15名を日本にお招きしました。この招へい事業は外務省によって2000年より開始されており、当センターは2003年より共催しております。招へいグループの本邦滞在中、日米センターは全米日系人博物館と共に公開シンポジウムを実施することとしていますが、第4回目となる今回は、「芸術からビジネスまで：多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」をテーマに、財団法人名古屋国際センターのご協力を得て、3月13日に同センターのホールで開催いたしました。

南米出身の日系人が多数在住されている名古屋市では社会、文化の多様化が進んでおり、同セン

ターも多文化共生促進のための様々な事業を展開されています。そうした土地柄からか、本シンポジウムは多くの来場者に恵まれ、パネリストとして登壇した招へいグループメンバーの発表に引き続き、活発な質疑応答がなされました。本資料はこのシンポジウムの議論を記録した報告書にあたります。この報告書が日系アメリカ人の経験と貢献を伝え、その文脈から私たち日本人が重層的な日米関係をより深く考えるための一助となれば幸いです。

最後に、本シンポジウムにご参加いただいた皆様、そして、シンポジウムのコーディネーターとして本書の監修およびイントロダクション執筆をお引き受けくださった武田興欣青山学院大学助教授に改めて感謝申し上げます。

国際交流基金日米センター所長  
給田 英哉

## ごあいさつ

このたび、「日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム / 芸術からビジネスまで：多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」が名古屋市で開催され、多くの市民の皆様にご参加いただきましたことを大変嬉しく存じます。

名古屋市を中心とする当地域は、東京圏、大阪圏と並び三大都市圏を形成し、特に自動車製造を始めとする産業・技術面においては、中枢圏域として発展しております。経済のグローバル化にともない、“ヒト”や“文化”の往来も活発化しており、まさに私たちは「地球大交流時代」の真只中にいると申せましょう。

また、昨年は市民参加型の「2005年日本国際博覧会 / 愛・地球博」が当地域で開催されました。世界各国から実に多くの人々が当地を訪れ、会場内外で“市民”と“市民”の草の根交流が積極的に繰り広げられ、現在もなお当地域の市民の国際交流に対する機運と関心は大いに盛り上がっているところでございます。

1984年に名古屋市によって設立されました私ども名古屋国際センターは、市民レベルの国際交流を推進するために様々な事業を行ってまいりました。この間当地域に暮らす外国人数は増え続けておりましたが、特に1989年の「出入国管理及び難民認定法」の改正以来、日系南米人の方々の定住化が進んでおり、当センターは「地域における多文化共生の促進」を事業の柱の一つとして積極的に取り組んでいるところでございます。

おりしもそうした中、多民族国家アメリカで、芸術からビジネスまでの各分野において、「ガラスの天井」といわれる目に見えない人種の壁に対して、果敢に挑み活躍されている日系アメリカ人の皆様をお迎えしてのこのようなシンポジウムを開催できましたことは、大変有意義で且つ時機を得たものでございました。

一世の祖父母の艱難辛苦の人生を聞き見て成長され、各分野においてマイノリティであることをバネにご活躍されるにいたったパネリストの道のりや、異なる文化背景を持つ人々との関係におけるお話は、今後私どもが多文化共生社会を推進する上で、指針とさせていただくことができる誠に富んだものでございました。

また名古屋市は1959年にロサンゼルス市と姉妹友好都市を提携し、毎年市民親善使節団の派遣や高校生の派遣・受け入れ等の交流を進めてまいりました。今回のこのようなシンポジウムを、ロサンゼルス市にあります「全米日系人博物館」と共催できましたことは、両都市の友好・交流において新しい第一歩を踏み出した事業であると確信しております。

最後になりましたが、このシンポジウムを契機といたしまして、日米両国の相互理解と交流が益々深まりますことを心から祈念し、また当シンポジウムの開催にあたり、ご尽力いただきました国際交流基金日米センター及び全米日系人博物館の皆様、またコーディネーターとしてご活躍いただいた武田興欣青山学院大学助教授に改めて心から感謝申し上げます。

財団法人 名古屋国際センター理事長  
鈴木 勝久

## はじめに

この度、全米日系人博物館は、2006年3月のシンポジウムを国際交流基金日米センター（CGP）と共催できましたことを嬉しく思っております。2006年の日系アメリカ人リーダー招聘プログラムで招かれたメンバーのうち5名が、名古屋で開催されたシンポジウムでパネリストとして参加いたしました。今回のシンポジウムにおける「芸術からビジネスまで：多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」というテーマのもと、メンバーたちはメディア、ビジネス、法律、安全保障、学術といった多様な職業を通じて経験してきたことをお話することができました。

日系アメリカ人招聘事業は2006年で6回目を数えます。3世と4世から成る15人の今年度の招聘グループは外務省とCGPの招待で来日し、2006年3月10日から18日にかけて、京都、名古屋、東京を訪問いたしました。

シンポジウムのパネリストのうち、ドナ・フジモト・コール氏、カレン・スエモト氏、そしてクレイグ・ウチダ氏の3名にとっては今回が初めての訪日となりました。また、他のメンバーの多くも日本での滞在経験がほとんどありませんでした。このメンバーたちは、本年初参加となるマイアミとボストンからのメンバーを含めロサンゼルス、サンフランシスコ、サクラメント、ホノルル、デンバー、シアトル、シカゴ、ワシントンDC、ニューヨークなどアメリカ全土から集まってまいりました。

今回の招聘プログラムは、3世と4世のメンバーにとって、日本を知り、理解を深める機会となり、また行政、企業、政治やNPO、文化等の各分野の日本のリーダーと会い、情報を交換する機会にも恵まれました。一方日本側の各界のリーダーは、様々な日系アメリカ人の経験談を直接聞くことによって、多文化社会であるアメリカについて理解を深めることができました。

この招聘事業の目的は、日系アメリカ人の日本に対する理解を深め、両国の長期的な関係を強化し、さらには日米関係の進展における日系アメリカ人の役割を向上させることにあります。招聘グループのメンバーは日本から戻った後、日米関係をより強固なものにするため、他の日系アメリカ人や日本人のリーダーと連携して具体的な事業に携わります。また今回招聘グループのメンバーは、シンポジウムへの参加に加えて、ロサンゼルス姉妹都市である名古屋市の関係者を訪問する機会にも恵まれました。

今回の日系アメリカ人招聘事業ではいくつかの成果を得ることができました。例えば、日系アメリカ人コミュニティのリーダーらが日本の行政、政治、教育、企業などの分野の人々と会って情報を交換して、各界を牽引する役割を担っていくための様々な仕組みを作ることができましたし、日本のリーダーらと日系アメリカ人コミュニティの間に強固なネットワークを作り上げ、コミュニケーションを密にすることが可能となりました。また日本のリーダーらにとっても、多様性が変容する日系アメリカ人コミュニティを知る機会となりました。これまでの招聘グループのメンバーと会ってきた日本のリーダーらと対話を続けることで、さらに将来に渡った関係が作られてきています。また最も大きな成果の一つは、アメリカ全土に居住し、個別にまた時に共同して日米関係強化のために熱心に関わる日系アメリカ人同士のネットワークが拡大していることです。

外務省とCGPからは、招聘事業への継続的なご支援に加え、日系アメリカ人と日本の人々とがより強い関係を作るための活動にもご支援いただいております。これらの活動を活発化させる中で、全米日系人博物館は招聘事業やその他の関連事業のまとめ役と調整役をつとめてまいりました。

全米日系人博物館は1985年に設立され、1992年に一般公開されました。当初はロサンゼルスのリトルトーキョーにある歴史的に有名な建物、旧西本願寺ビルの中でしたが、1999年に博物館が増築され、7.9千平方メートルの新しい展示室が公開されました。一般公開から14年が経ち、日系人博物館は世界レベルの機関となり、国や世界中から文化組織や教育機関の中でこの分野のリーダーとして認められることとなりました。

日系人博物館で実施される展覧会、教育者の為のワークショップ、社会見学、公的事業などのために、また、ヒラサキ・ナショナル・リソースセンターの豊富な収藏品や資料を閲覧するために、博物館には1年に50万人以上の方々が訪れます。あわせて日系人博物館のウェブサイトには年に45万件のアクセスがあり、訪問者は収藏品や教育資料をデジタル上で閲覧しています。博物館には全米50州のすべてと16カ国に6万員のメンバーや支援者がいます。貴重な収藏品は5万点以上にのぼり、同様の博物館の中では世界最大規模であり、日系アメリカ人の100年以上に渡る歴史と文化を記録しています。

設立以来全米日系人博物館は、日系アメリカ人と日本の人々のより強いつながりを構築するべく努力してまいりました。また近年日系人博物館は、特に3世4世といった若い日系人が日本についての知識を深め、同様に日本の人々がアメリカにおける日系人の経験について関心や知識を深めてゆくよう他の諸機関と協力して、リーダーシップの役割を果たしてまいりました。

最近、日系人博物館は世界に向けて「ディスカバー・ニッケイ」という新しくグローバルなウェブサイトを開始しました。世界に向けたこのウェブサイト <[www.discovernikkei.org](http://www.discovernikkei.org)> は、日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語の四つの言語でアクセスが可能です。このウェブサイトは世界中に移住、定住した日系アメリカ人の遺産を保存、記録、研究そして共有することを主な目的とし、異文化間交流を促進することや世界中の日系人の多様な経験を共有することに役立っています。このサイトのコミュニティー・フォーラム、掲示板、コミュニティー・カレンダーといった機能は、訪問者と世界中の日系人とを瞬時につなげます。サイト上のツールや情報は、私たちの日々の生活に影響を与える歴史上、あるいは現代の問題や話題への訪問者の参加と交流を促進しています。

全米日系人博物館を代表して、日系アメリカ人リーダー招聘等の事業に対しご支援いただいた外務省に感謝申し上げます。そして、CGPはこれらの事業を実施する上での強力なパートナーであり、これらシンポジウムを始め教育・文化事業等、理解をさらに深めるための事業の実施にあたり、引き続きご支援をいただきました。

そして日系人博物館のスタッフ、特に副館長のキャロル・コマツカと、コミュニティー・リレーショ

ンズのディレクターであるナンシー・アラキ、ジャパン・マーケティング・パブリックリレーションズのマネージャーであるミツエ・ワタナベには、招聘プログラムの準備に尽力してくれたことに感謝いたします。招聘グループの旅程にご同行いただき、この重要な事業の全ての局面においてご支援いただいた在ロサンゼルス日本総領事館の海部優子領事にも厚く御礼申し上げます。

また、給田英哉氏、茶野純一氏、森藤桂子氏を始めとする国際交流基金日米センターのスタッフの方々に、このシンポジウム及び招聘事業に対し多大な貢献をいただいたことに感謝いたします。また、優れた研究者であり、日系アメリカ人についての深い知識を持たれた武田興欣助教授と、本シンポジウムで一緒にコーディネーターを務める榮譽に浴しました。彼のリーダーシップと尽力なしにシンポジウムの成功はありませんでした。

全米日系人博物館は、このようなプログラムを将来も共に開催してゆけることを楽しみにしております。このようなプログラムは日米関係における日系アメリカ人の役割を高めるとともに、日本と米国の人々に大切な情報をもたらしてくれると考えております。

全米日系人博物館  
館長・CEO アイリーン・ヒラノ





## 目 次

### 日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム

「芸術からビジネスまで：

多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」

1. ごあいさつ	1
給田 英哉 国際交流基金日米センター 所長	
2. ごあいさつ	3
鈴木 勝久 財団法人名古屋国際センター 理事長	
3. はじめに	4
アイリーン・ヒラノ 全米日系人博物館 館長	
4. イントロダクション	8
武田 興欣 青山学院大学 国際政治経済学部 助教授	
5. コーディネーター/パネリスト一覧	15
6. シンポジウム議事録	16

---

#### 付録

コーディネーター/パネリスト略歴	50
日系アメリカ人リーダー訪日招へいプログラム	52

## イントロダクション

今年2006年で4回目となる日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウムが、初めて名古屋で行われましたことをコーディネーターの一人として、大変うれしく思います。当日は平日の午後という時間にもかかわらず、多くの人がお集まり下さり、とても勇気づけられました。中には首都圏や関西地区からこのシンポジウムだけのために名古屋にいらっしゃった方もいらっしゃいました。質疑応答の時間にも、とても紹介しきれないほどの質問が集まり、今回の会議に対する聴衆の皆様の関心の高さを伺い知ることができました。

名古屋と日系アメリカ人との間には、実はいろいろな結びつきがあります。このシンポジウムを共催した全米日系人博物館は、名古屋と姉妹都市であるロスアンゼルス市の中心街に位置しています。また全米日系人博物館は、日本との関係を強化するために、昨2005年の5月に理事会を初めて東京で開催し、「日系アメリカ人と日米関係の将来」というシンポジウムを行いました（そのシンポジウムの詳細は、国際交流基金日米センターのホームページ <[http://www.jpfa.go.jp/j/cgp\\_j/global/event/050725.html](http://www.jpfa.go.jp/j/cgp_j/global/event/050725.html)> からお覧になれます）。シンポジウムの後、ダニエル・イノウエ連邦議会上院議員をはじめとする日系アメリカ人の一行は、愛知万博を訪問しております。

また、古く日系アメリカ人の歴史を遡っても、愛知県は日系移民にとって縁遠い地域ではありません。アメリカへ多くの日系移民を送り出した地域としては、和歌山・広島・山口・福岡・熊本県などが知られていますが、愛知県からも数多くの北米移民があったことが最近の研究によって明らかになりました。筒井正さんという方が、愛知県の高校で教鞭をとられるかたわら、名古屋大学大学院で研究を重ねられ、その成果を『一攫千金の夢 北米移民の歩み』（三重大学出版会、2003年）という著書にまとめていらっしゃいます。筒井さんの詳細な歴史史料の分析によると、1868年（明治元年）から1925年（大正14年）までの間に約3,300人の人が愛知県からアメリカに渡っています。特に海部・津島地域からは多くの人アメリカでの成功を夢見て海を渡り、カリフォルニア州中部の州都があるサクラメントや、その周辺、特にウォーナツ・グローブ（Walnut Grove）で農業に従事しました。日系移民は移民先で県人会を作ることで知られていますが、愛知県出身の移民も1897年に愛知倶楽部（1912年北米愛知県人会と改称）を設立しているそうです。また、私たちは「移民」というと、一度アメリカに渡ったきり帰って来ないというイメージを抱きがちですが、実際には「移民」たちは何度も太平洋を往復し、最終的に日本に戻ってきた人も多くいます。筒井さんの著書には、アメリカ帰りの人たちが現地で学んだアスパラガスの栽培を佐織町や八開村（現在の愛西市）で始め、その結果、戦前の佐織町にアスパラガスの缶詰工場があったことなども記されています。

### 多様な職業で活躍する日系アメリカ人

このイントロダクションでは、今回の日系アメリカ人リーダーシップ・プログラムを「芸術からビジネスまで：多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」というテーマで行った背景について、説明したいと思います。このテーマで取り上げたかった第一の点は、日系アメリカ人の職業の多様性です。シンポジウムの冒頭でも少し申し上げましたが、私たちは「日系アメリカ人」と聞くと、漠然とそのイメージを浮かべることはできるかもしれませんが、しかし私たちは彼ら彼女たちを、具体的な職業についている人間として、どれだけ思い浮かべることができるでしょうか。

過去3回のシンポジウムに登場して下さった日系アメリカ人のリーダーたちの中には、実に様々な職業の方がいらっしゃいました。弁護士・裁判官・公務員・学者はもとより、連邦議会議員のスタッ

フヤ州議会議員、通信会社の社長、テレビ局のアンカー・レポーター、NPO（非営利団体）のソーシャルワーカーなど、その職業は実に多岐に渡っています。また、私たちが通常、日系アメリカ人が活躍しているとはあまり想像しない分野からもパネリストが参加しています。そのような分野の一つに警察・治安の分野があります。私たちはニューヨーク市警察(NYPD)やロスアンゼルス市警察(LAPD)についての報道をしばしばテレビで見ますが、ロスアンゼルス市警察の幹部の中に、2005年のパネリストだったテリー・ハラ氏のような日系アメリカ人がいるということを知らないのではないかと思います。テリー・ハラ氏は来日当時、警視(captain)でしたが、その後、日系アメリカ人として初の警視正(commander)に昇進し、市警全体の警察官を訓練するポストについていらっしゃいます。今年のパネリストの中にも、クレイグ・ウチダさんのように、刑事司法(criminal justice)のコンサルタントという分野で活躍していらっしゃる方がいました。刑事政策のコンサルタントという職業の人が普段どんなことをしているのかは、日本のみならずアメリカでもあまり知られていないようです。その点について、ウチダさん自身が発言の最初で説明して下さっていますので、ご参照下さい。

ウチダさんの他に今年のシンポジウムのパネリストは、化学製品流通会社の社長、劇作家、ロスアンゼルス市のテレビ局のアンカー、アジア系アメリカ人研究の心理学者から成り、例年にもまして多様な職業構成を反映したものとなりました。この5人のパネリストは、「日系アメリカ人リーダー訪日招聘プログラム」で来日した代表団の中から、職業的なバランスなどを考慮して選ばれました。彼ら彼女たちの持つ多彩な人生や経歴のバックグラウンドは、とても一人10分の発言枠に収まりきるものではありませんが、各自の職業体験について語っていただくことで、日系アメリカ人の職業的な広がりや理解しようというのが、このシンポジウムの目的の一つでした。

## 日系アメリカ人のアメリカ社会への貢献

シンポジウムのテーマの二つ目の目的としては、「多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」という副題にあるように、日系アメリカ人が自ら選んだ職業を通じて、アメリカ社会に貢献していることを理解することです。日本では日系アメリカ人を、日本に住む日本人の延長として捉えがちですが、日系アメリカ人の多くは、基本的にはアメリカを自らの活動の拠点とし、アメリカでのキャリアの構築や社会への貢献を目指しています。例えば今回のパネリストではありませんでしたが、シンポジウムの最後に紹介されたシャロン・トミコ・サントスさんは、アメリカ西海岸にあるワシントン州の州議会の下院議員として、シアトルの自分の選挙区とワシントン州のために働いています。

もちろん、政治・経済・文化のグローバル化が指摘される今日、日系アメリカ人の活動もアメリカ国内に限定されるわけではありません。クレイグ・ウチダさんは、発言の中でおっしゃっていますように、カリブ海の国トリニダード・トバゴの刑事政策のコンサルタントをされています。またフィリップ・カン・ゴタンダさんの劇はアメリカ・日本のみならず、ヨーロッパでも上演されています。そして、今年も日系アメリカ人の代表団を率い、このシンポジウムのコーディネーターを務められたアイリーン・ヒラノさんのように、日米関係の強化のために精力的に活動している方もいます。このような国際的な活躍を目にすると、日本に住む私たちの多くは、彼ら彼女たちのアメリカ社会に対する貢献という、基本的な部分を意外と見逃しがちです。日系アメリカ人が、アメリカ社会を構成する重要な一員として、どのように社会の問題点を見つけ、改善しようとしているか、その姿に迫ろうというのが今回のシンポジウムのもう一つの狙いでした。

その点で非常に興味深い事例が、フランク・バックレーさんが取材した、アメリカに住む原爆被爆者の報道です。バックレーさんがシンポジウムで紹介していらっしゃるように、日系アメリカ人や日本に関する重要な話題が、メディアによって報道されないが故に、アメリカの一般の人に知られていないということは数多くあります。またシンポジウム中ゴタンダさんへのフロアからの質問でも取り上げられましたが、ハリウッド映画やテレビのドラマ番組などアメリカの主流社会のメディアは、日本人や日系アメリカ人、それにアジア系アメリカ人を、旧態依然としたイメージや固定的な価値観（ステレオタイプ）で描写することが後を絶ちません。バックレーさんがテレビ局のニュース・アンカーとして、日系アメリカ人や日本がテレビ番組で無視されたり、ゆがんだイメージで放映されたりすることがないように目配りをしていると言われたのは、アメリカ社会を多民族・多民族にとって生きやすい場所にしていくための貢献と捉えることができると思われます。同様に、アジア系アメリカ人の若者の心理を、白人をベースにした分析枠組みではなく、現存する人種差別の文脈において理解しようとするカレン・スエモトさんの研究活動も、アジア系アメリカ人への理解を広げることによって、アメリカ社会をより良いものにしていくという努力の一環として捉えることができるでしょう。

## 日系アメリカ人に対する差別や偏見

今回のシンポジウムの三つ目の狙いは、アメリカのそのような多民族・多民族社会という側面に関係しています。それは、パネリストの職場や職業での経験を通じて、今日のアメリカ社会において日系アメリカ人として生きるとはどのようなことを考えることです。一般にアメリカ社会について考える時、人種・民族という点について触れないわけにはいかないのですが、今回のパネリストの発言の端々にも、有形無形の差別や偏見、それに日系アメリカ人に対する理解不足から来る諸問題についての言及が見られました。

まず、日系アメリカ人を日本人と同一視するステレオタイプが根強く残っているという問題があります。これは、ドナ・フジモト・コールさんが語った経験のように、時として日本のよいイメージと結びつけられることもありますが、多くは日系アメリカ人を英語の話せるアメリカ社会の一員として認めないという、否定的な方向に働きます。クレイグ・ウチダさんが学生の時、また教壇に立った時に「英語がうまい」ことをほめられたという経験が示すように、アジア系アメリカ人は何世になっても永久に外国人扱いされるという問題があります。

次に、日系アメリカ人、さらにはより広くアジア系アメリカ人が独自の文化や価値観を持つことについて、白人を中心とするアメリカの主流社会の人々が十分理解していないという問題があります。フィリップ・カン・ゴタンダさんが日系アメリカ人の家族内のやりとりを劇で描いたところ、登場人物がもっと直接お互いに語りかける形にしたらどうか、との批判を受けたという、質疑応答の中で言及された事例はその一つの例と言えるでしょう。また、カレン・スエモトさんが紹介されたように、アジア系のある学生が大学のカウンセリング・サービスを一回か二回受けた後、来なくなってしまうという「事実」をどう解釈するかも、その学生のアジア系としての背景を理解するかどうかによって、大きく異なってきます。

さらに、日系アメリカ人を始めとするアジア系アメリカ人が、いまだに多くの職業で人口に比べて少ない割合しか含まれていないという問題があります。もし社会的な差別というものが全くなければ、日系アメリカ人やアジア系アメリカ人は、おおむね人口比に応じてそれぞれの職業に存在してもよい

はずです。しかし、複数のパネリストが具体的な数字を挙げて言及しているように、現実はまだそれとはほど遠い段階にあります。確かに人種・民族マイノリティの少なかった職業で、マイノリティの努力によって過少代表の問題が改善されつつある分野もあります。しかしバックレーさんが述べていらっしゃるように、例えばテレビ業界で働くアジア系アメリカ人ジャーナリストは、過少代表である上に数が減少傾向にあります。これは何らかの理由でアジア系アメリカ人がこの職業から去ってしまう、ないしは新しい人の補充がなされないことを意味しており、深刻な問題を提示しています。

この点を考える上で重要なのが「ガラスの天井」という言葉です。この言葉は職場や組織での昇進や業績評価に関する「目に見えない差別」を表すもので、具体的には女性やマイノリティがどんなにがんばって仕事をして、ある一定以上の地位にはつけないことを指しています。その原因としては、白人男性のように既に高い地位を占めている人たちが、「自分たちと同じような」人たちを昇進させることを好み、その好みを微妙に昇進の評価基準に反映させたり、あらかじめ示された基準以外の要素を持ち込んで昇進を決めたりすることにあります。「ガラスの天井」は、露骨な言動に表れた差別とは違い、実証することが必ずしも容易ではないのですが、大企業の社長や管理職にアジア系アメリカ人が少ない理由の一つとして多くの研究者によって指摘されています。

### 日系アメリカ人が「リーダーシップ」を語る意義

今回パネリストとして登場して下さった5人の日系アメリカ人は、そのような問題を抱えるアメリカ社会の中で努力を重ね、各々の職業でリーダー的な存在になった人たちです。彼らが自分たちのキャリアを開始した時、同じ職業にいる日系アメリカ人の数は、今よりずっと少なかったことでしょう。その中で自らのキャリアを切り開いてきたことの大変さは、日本社会で圧倒的なマジョリティである日本人には、必ずしも容易に理解できるものではないかもしれません。

5人のパネリストたちは職業的に成功した人たちですが、そのことは彼らが最初から成功するようにレールがしかれていたことを意味するものではありません。ドナ・フジモト・コールさんの起業のきっかけが離婚にあったように、彼らは決して「成功を約束された恵まれた人たち」ではなかったのです。彼らの人生の歩みがどこかで少し違っていれば、今のようなキャリアを築けなかった可能性は十分あるでしょう。また彼らの成功は、今後も自動的に続くよう保障されているわけでは決してありません。彼らのリーダー的な地位は、彼ら自身の日々の努力によって維持されていると言えるでしょう。

日本では、英語の「リーダーシップ」に完全に相当する言葉が存在しないことから伺えるように、リーダーシップを発揮するということが社会で必ずしも尊重されるわけではありません。そのため、日本社会に住む私たちは、日系アメリカ人の「リーダーたち」が自らの経験を語るというシンポジウムのスタイルに、一見違和感を見出すかもしれません。この点についてはまず、アメリカ社会がリーダーシップを一般的にポジティブなものとみなし、それを発揮することが個人にとっても集団全体にとっても好ましいと位置づけていることをふまえておく必要があるでしょう。

しかし「リーダーシップ」の地位にある日系アメリカ人が自らの経験について話すことの意義は、単にアメリカでリーダーシップが尊重されているからに留まりません。それは、先に述べた日系アメリカ人の過少代表という問題を改善するためにも重要なのです。人種・民族的マイノリティの若者は、自分の進もうと考えた分野に同じ人種や民族で成功した人が少ないという印象を持つと、その分野で

キャリアを築くことをあきらめる、ないしは消極的に考えてしまうと言われています（同じことは、男性が多い職業の女性にも言えます）。そこで、このような分野にもこのようなマイノリティの先駆者がいて、どんな活動をしている、といったことを広く社会に知らせる必要が出てくるのです。そのような次世代の社会進出を促す役割を果たすことが期待される人物のことを「ロール・モデル」と言います。アメリカのマイノリティの間では、ロール・モデルの必要性は非常に強く認識されています。ロール・モデルは一人か二人いれば十分というわけではなく、自らがロール・モデルになることでその数を増やそうということが奨励されます。質疑応答の最後の箇所ではシャロン・トミコ・サントスさんが、日系アメリカ人女性議員としてのロール・モデルの役割を強く意識して語っていらっしゃる背景には、そのようなことがあります。

さらに、これは必ずしもマイノリティに限りませんが、アメリカ社会では自らが育った「コミュニティに恩返しをする（give back to community）」という考えがあります。ここでいうコミュニティとは、必ずしも地理的に線引きされた地域社会に限らず、自らの属する人種や民族全体を指すこともあります。従って日系アメリカ人にとって、全米各地に存在する日系アメリカ人社会の全体もまた、一つのコミュニティとなりうるのです。そのようなコミュニティへの恩返しの方法には様々なものがありますが、会議やシンポジウムなどに出席し、自らの体験を多くの聴衆に語ることもまた恩返し（giving back）の一つと考えられます。なぜなら、聴衆の中でその話を聞いて日系アメリカ人や他のマイノリティのために新たに行動を起こしたり、考えを変化させたりする人が出てくるかもしれないからです。その意味で、このリーダーシップ・シンポジウムのような催しに出席することは、パネリストの日系アメリカ人にとって、ロール・モデルとしての役割を果たしたことにもなると考えられます。今回の聴衆の多くは日本に住む人たちでしたが、パネリストの多くがアメリカで学生や若い聴衆を相手に講演した経験を持っています。

## 新たに書かれる物語

今回のシンポジウムはわずか半日のものであり、質疑応答を含めても十分扱えなかった問題が多々あります。その一つが日系アメリカ人と他のマイノリティの間との関係です。日系アメリカ人は他のアジア系アメリカ人の民族と連帯していいのか、またこれらの民族を一くくりにしてアジア系アメリカ人と呼ぶことがどの程度実態を反映しているのか、といった疑問は、今回時間の関係で取り上げることができなかった聴衆からの質問の一つであり、過去の日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウムのテーマとなった点でもあります。また、アフリカ系アメリカ人やラティーノ（ヒスパニック、中南米系）の人たちとの関係も重要です。質疑応答での最後の質問がその点について触れていますが、人種間関係を良好と見るかどうかについて、答えた3人のパネリストの答えが、三者三様なのがコーディネーターとしては印象に残りました。それぞれの意見はアメリカ社会の違った側面を違った視点から捉えたものであり、この中でどの意見が正しいということを決めることはできないと思われます。

その関連で注目すべきことは、日系アメリカ人社会自体が多人種・多民族化していることです。私自身が最初の発言で少し触れましたが、日系アメリカ人と他の人種・民族の間の結婚が進んだ結果、日系アメリカ人でもあり、白人でもある、あるいはアフリカ系アメリカ人でもあるという人が増えています。今回の5人のパネリストのうち、フランク・バックレーさんとカレン・スエモトさんの2人

がそのような複数人種の背景を持った日系アメリカ人であることは決して偶然ではありません。さらには、パネリストではありませんでしたが、代表団の一人のホセ・ケイイチ・フェンテスさんは、日系アメリカ人でもあり、キューバ系アメリカ人でもあります。そのような人たちを含め、日系アメリカ人が全体としてどのような共通のアイデンティティを持ちうるかについては、日系アメリカ人自身によって盛んに議論されているテーマです。

さらにはシンポジウムではほとんど取り上げることができませんでしたが、日系アメリカ人の男性と女性との間の経験の違いも、職業と社会という今回のテーマに照らせば重要になるでしょう。今年の日系アメリカ人代表団は男性9人、女性6人でしたが、毎年の代表団やパネリストの構成には男女のバランスがうまく取り入れられています。日本でシンポジウムを開催すると、壇上に上った人の全員あるいは大半が男性ということがしばしばありますが、アメリカの会議ではそのような点についての配慮がなされることも決して珍しくありません。今年も昨年と同様、代表団のほぼ半数に女性が選ばれたのは、それだけ活躍している日系アメリカ人の女性が現実にいる一方、そのような女性を積極的に見つけて招聘しようという関係者の努力を反映したものであると考えられます。他方、女性としての彼女たちの声に焦点を当てれば、今回のシンポジウムとはまた違ったストーリーが聞けたかもしれません。

日系アメリカ人社会は以上のような多様性と挑戦に直面していますが、その中で今後日系アメリカ人たちが職場や地域社会、そしてアメリカや世界でどのような活躍をしていくか、私たちは注目していきたいと思います。今回のシンポジウムは、私たちにとって刺激的なものであったとともに、パネリストや代表団の方たちにとってもまた、今後への変化を秘めた経験だったに違いありません。フィリップ・カン・ゴタンダさんが、自らの発言の最後を「私たちの物語を作っていきましょう」と締めくくったように、物語は語られるだけでなく、新たに書かれていくものでもあります。

最後になりますが、会議の準備にあたって実に効果的なリーダーシップを発揮されたアイリーン・ヒラノさん、多忙な職業生活の中、発言内容を準備して下さった5人のパネリストの方々、会議の準備及び本報告書の編集段階で様々なアドバイスを下さったグレン・フクシマ、高木(北山)真理子、竹沢泰子、筒井正、ジェーン・ヤマシロの各氏に感謝申し上げます。

青山学院大学国際政治経済学部  
助教授 武田 興欣



日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム  
「芸術からビジネスまで：多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」

**CGP**  
The Japan Foundation  
Center for Global Partnership

コーディネーター

アイリーン・ヒラノ：全米日系人博物館 館長

武田 興欣：青山学院大学 助教授

パネリスト

ドナ・フジモト・コール：

コール・ケミカル・ディストリビューティング社 CEO / 社長

フィリップ・カン・ゴタンダ：劇作家・映画監督

クレイグ・ウチダ：ジャスティス&セキュリティ・ストラテジー社 社長

フランク・バックレー：KTLA テレビ所属 ジャーナリスト

カレン・スエモト：マサチューセッツ大学ボストン校 助教授



日時：2006年3月13日 14:00 - 17:30

場所：名古屋国際センターホール



## シンポジウム議事録

### アイリーン・ヒラノ（全米日系人博物館 館長）

本日この場に参加できることを嬉しく存じます。また皆さんにもお集まりいただき、有難うございます。私たちは外務省と国際交流基金日米センターのご協力により、第6回日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウムの代表団として来日しました。全米日系人博物館はこのプログラムのコーディネーターを務めておりまして、私は2000年にプログラムが始まってから毎年、代表団の方々と共に日本へ来させていただいておりますことを、嬉しくまた光栄に思っております。このプログラムの目的は、全米から優れた日系アメリカ人リーダーをお連れし、日本や日本のリーダーの方々にご紹介して、日系アメリカ人と日本の皆さんとの関係をいっそうゆるぎないものにすることです。

今年の代表団は、米国の10の地域からお集まりいただいた様々な15名のリーダーから構成されています。そのうち3名の方々は今回が初めての来日です。他の12名の方々は多かれ少なかれ日本を体験されてはいますが、いずれも日本については限られた知識しかありません。これは今日、米国のほとんどの三世や四世の方々にいえることです。様々な歴史的な理由により、今日の若い日系アメリカ人は、祖先の国である日本にあまり結びつきを感じておりません。

しかし私どもは、日系アメリカ人は日米間の強力な関係を維持する上で重要な役割を果たすことができるし、またそうすべきだと考えています。今日アメリカでは多くの日系アメリカ人が非常に重要な地位についており、日本で同じような地位にある方々とその専門技術や知識を共有することができます。このプログラムにより同僚としての関係が生まれ、それが維持され、順調なときも苦しいときも互いに訪ねあえるようにしたいと考えております。

今年はこちら名古屋に来ることができまして、特に嬉しく思っております。私たちをお招き下さった名古屋の共催者の皆さんにお礼申し上げます。今朝ここに来る前に、代表団は名古屋市の助役をはじめ市役所の皆さんの温かい歓迎を受けました。ご存知のように、名古屋は日系人博物館の本部のあるロサンゼルス市の姉妹都市なのです。ロサンゼルス市で開催されるリトルトーキョー二世ウィーク祭には、毎年名古屋から参加されるリーダーの方々をお迎えしています。昨年開催された愛知世界博覧会で大きな成功を収められたことを、名古屋市ならびに愛知県の皆さんにお喜び申し上げます。全米日系人博物館からは約90名の理事会メンバーが愛知万博を訪れました。それは素晴らしい旅行で、本当に思い出に残る博覧会でした。

皆さんご存知のように、異なる文化の良さを知るのに最も大切な方法はその国を訪れることです。日系人が日本を訪問できる、日系アメリカ人シンポジウムのようなプログラムを拡大し、もっと多くの日系人が日本の豊かな歴史や文化を経験できるようにする必要があります。また同じように、日系アメリカ人が米国の日系社会でどんな体験をし、どんな貢献をしたかをもっと多くの日本人の方々に知っていただきたいと願っております。皆さんも、米国にある私どものそれぞれの日系コミュニティにぜひお出でいただきたいと思っております。

全米日系人博物館を代表して、私はここ日本で多くの優れた方々と協力して仕事をする機会に恵ま

れました。私どもの使命は日系アメリカ人の体験を保存し、それを様々な背景を持つアメリカ人、さらには南米やラテンアメリカも含めた世界中の方々に伝えることなのです。

全米日系人博物館は過去6年にわたって、国際日系研究プロジェクトを実施してまいりました。このプロジェクトを通じて、日系人博物館は英語と日本語で2つの出版物を作成しています。ひとつは北米と南米における日系人についての情報を掲載した百科事典、もうひとつは北米や南米における日系人の体験を調べた、多くの優れた学者の調査をまとめた選集です。この出版物は *New Worlds and New Lives* というタイトルです（邦訳は移民研究会訳、『日系人とグローバリゼーション』と題して人文書院から刊行）。これらの出版物には日本の優れた学者も数多く寄稿しておられます。昨年、日系人博物館は新しいグローバル・ウェブサイト「ディスカバー・ニッケイ」を立ち上げました。ここでは北米や南米における日系人の体験について、豊富な情報を提供しており、日系人についての情報について、インターネットで、日系人博物館ならびに17の関係する機関や組織にアクセスすることができます。このウェブサイトは日本語、英語、ポルトガル語、スペイン語の4ヶ国語で提供しています。ロビーにパンフレットがありますので、このシンポジウムの後、ぜひお手にとってごらんください。

さて、後ほど私どもの5名の素晴らしいパネリストをご紹介したいと思います。パネリストはそれぞれ日本人の先祖を持つアメリカ人として、個人的、職業的な体験について話すことになっています。代表団の、残りの10名のご紹介もできればよかったです。時間の都合でそれはかないませんでした。プログラムに簡単な略歴が載っていますので、それをご覧いただければ、この方々がアメリカですぐれたキャリアをお持ちの重要なリーダーであることがお分かりいただけると思います。休憩の後、これらの方々を簡単にご紹介させていただこうと思っています。

この今日の午後のプログラムは、私たちが互いに学びあう大切な機会となっています。全米日系人博物館は国際交流基金日米センターと共にこのシンポジウムを開催できますことを大変嬉しく思っております。このシンポジウムがきっかけとなって、ここ名古屋でも重要な協力関係が生まれることを心から望んでおります。将来日米関係を見直すにあたって、私たちは数多くの衝突や課題に直面することになるでしょう。未来の世代のために、私たちは個人として、リーダーとして、また世界市民として、この世界を今よりはるかによい平和な世界にするには、どんな貢献ができるかを考えていきたいと思っています。

ここで私どもの共同司会者であり、非常にすぐれた学者であり、よき友でもある武田興欣先生に、プログラムの司会をバトンタッチしたいと思います。

#### 武田 興欣（青山学院大学 助教授）

アイリーンさん、どうも有難うございます。青山学院大学の武田と申します。

私から、今日のシンポジウムのテーマの趣旨と、日系アメリカ人のアメリカ社会に占める位置につ

いて、簡単にお話しさせていただきたいと思います。

皆さんは、「日系アメリカ人」と聞くと、どんな職業の人を思い浮かべるでしょうか。

フィギュア・スケーターのクリスティ・ヤマグチさん、連邦議会上院議員のダニエル・イノウエさん、あるいは「スタートレック」に登場した俳優のジョージ・タケイさんといった方々が日本では有名かもしれませんが。しかし、日系アメリカ人は、我々が想像する以上に、実にさまざまな職業に進出しています。

過去3回の日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウムの報告書がありまして、昨年のは入り口に置いてありますが、それを私が拝見したとき、心を打たれたことのひとつが、これだけ多様な職業で日系アメリカ人が頑張っておられるということでした。例えば、弁護士や裁判官といった法曹界、法律界で活躍している日系アメリカ人の方々が多数いらっしゃるということは皆さんもご存じかもしれませんが。しかし、同じ法律にかかわる分野でも、昨年のパネリストで実際にいらしたのですが、ロサンゼルス市警察、LAPD (Los Angeles Police Department) の幹部で働く日系アメリカ人の方がおられたり、あるいは、今日お話をいただくクレイグ・ウチダさんのように、刑事政策の分野でキャリアを切り開いてきた方がおられるということ、我々のどれだけ多くが知っているでしょうか。また、日系アメリカ人がさまざまな企業で働いているということは何となく想像できるかもしれませんが。しかし、今日最初にお話しいただくドナ・フジモト・コールさんのように、みずから化学製品の会社を興して、その社長を務めておられる日系アメリカ人の女性がいらっしゃるということ、どれだけ多くの方が知っているでしょうか。

今日のシンポジウムのテーマ「芸術からビジネスまで:多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」の第一の目的は、このように日系アメリカ人が多種多様な職業に進出し、アメリカ社会に貢献しているという事実を確認することです。このことは一見、当たり前聞こえるかもしれませんが、今日の日系アメリカ人社会の広がりをとらえる上で、決して忘れてはならないことだと思います。

しかし、多くの職業に進出しているということは、イコール問題がないということでは決してありません。日系アメリカ人の人口データに関しては、私が少し後で申し上げますが、今日のパネリストの方々の多くが、ご自分の分野、職業で日系アメリカ人やアジア系アメリカ人が、総人口に占める割合と比べて非常に少ないと感じておられるようです。人によっては、数が少ないどころか、ご自分がその分野でほとんど最初の日系アメリカ人として、道を切り開かなければならなかった方もいらっしゃると思います。

今日のアメリカ社会では、以前と比べて人種問題が大分改善されてきたと言われることもあります。が、日系アメリカ人を含むアジア系アメリカ人に対しては、まだまだ誤解や偏見が多く残っているのが実情です。日系アメリカ人の多くはアメリカ生まれであるのに、日本人と間違えられて「英語が上手ですね」と言われることがあります。また、会社などの組織では、仕事の評価基準が白人男性の

価値観や行動パターンを反映しているために、アジア系アメリカ人を初めとするマイノリティや女性が昇進の上で不利になっているということが、しばしば指摘されます。そのような障壁はあからさまな形をとってあらわれないのに、一生懸命働いてもなかなか取り除くことができないので、見えない差別という意味で「ガラスの天井」と呼ばれています。

今日のパネリストの中にも、職場において様々な苦勞をされてきた方が多くいらっしゃると思います。しかし、実際に事前にお話を伺ったところ、日系アメリカ人であることが仕事の上でプラスになったという方もいらっしゃいます。いずれにしろ、今日のパネリストの皆さんは、日系アメリカ人であることに誇りを持ち、自らの職業に生きる価値を見出していると思います。今日のシンポジウムの第二の目的は、パネリストの方々の職場での経験に耳を傾けることによって、現代アメリカにおいて日系アメリカ人として生きるとはどのようなことかを我々が理解することだと思っています。

さて、これからパネリストの皆さんのお話を伺う前に、日系アメリカ人の人口に関するデータについて簡単に振り返っておきたいと思います。日本でも昨年10月に国勢調査が行われましたが、アメリカでは10年ごとに国勢調査が行われ、現在入手可能な包括的なデータとしては西暦2000年の国勢調査のデータがあります。日系アメリカ人は、アジア系アメリカ人という、中国系・韓国系からフィリピン系・ベトナム系・インド系など、実にさまざまな多様な人々が含まれる人種カテゴリーの一部に区分されています。2000年にはアジア系アメリカ人は1,000万人を超え、数え方にもよりますが、全米人口の大体4%ぐらいを占めています。

そのうち日系アメリカ人はどれぐらいいるかといいますと、実はこれが意外と簡単に言うことができません。というのは、2000年の国勢調査では、複数の人種を親や祖先に持つ人は、必ずしも一つの人種だけを選ばなくても、自分が該当すると思う複数の人種のすべてに当てはまると回答することができるようになったためです。そのため、日系アメリカ人の人口も、日系というカテゴリーだけを選んだ人数という数え方と、それから、他の人種や民族を同時に選んだ人も含めた全体の数という、どちらで数えるかで変わってきます。日系のカテゴリーだけを選んだ人数は約80万人、全米人口の0.3%に少し満たないくらいです。しかし、他の人種や民族と一緒に選んだ人も含んだ日系アメリカ人の人数は、それよりずっと多く、約115万人、全米人口のちょうど0.4%です。

このように日系アメリカ人は、他の人種や民族との間の結婚が進んだ結果、複数の人種や民族の親や祖先を持つ人の割合がアジア系の中でも比較的多い集団となっています。その人たちの割合は、115万人の中で約35万人ですから、他の人種や民族と一緒に選んだ人も含めた日系アメリカ人全体の数という、広い意味での日系アメリカの中で約3割となっています。今日のパネリストの一人、カレン・スエモトさんは、そのような複数の人種を背景に持つ日系アメリカ人の心理を研究テーマにしています。

今日のパネリストの中には、そのような複数の人種を背景に持つ日系アメリカ人の方がいらっしゃいます。フランク・バックレーさんがその一人なのですが、その点については後にご本人からお話が

あると思います。また、フランクさんのようなケースとは違うのですが、日系以外の方と結婚されて名字を変えた人の場合、名字からは日系アメリカ人であるということが分からないこともあります。それゆえ今日のアメリカでは、日系アメリカ人であるということと、日本的な名字を持つことというのは一致しません。しかし、そのこと自体、日系アメリカ人がアメリカ社会に浸透し、人口統計の上でも多様性を見せていることの一つのあかしとなっているのです。

日系アメリカ人の多様性は、他の側面にも見てとれます。アイリーンさんが少しおっしゃいましたが、3世、4世が中心の日系アメリカ人は、日本との間にも必ずしも強い心理的なつながりを持っているわけではありません。日本語を全く話せない日系アメリカ人の方もたくさん、数多くいらっしゃいます。比較的、出張などの機会が多いリーダー的な職業についていらっしゃる今回の代表団の中にも、今回が初めての来日という方もいらっしゃいます。一方で、フィリップ・カン・ゴタンダさんのように、1970年代の初めに交換留学生として日本にやってきて、比較的長い間、日本に住んだことのある方もいらっしゃいます。

今回のシンポジウムでは時間の関係で正面から取り上げられないのですが、日系アメリカ人の中でも男女によって、また違った経験があると思います。5人のパネリストとしてアメリカの中でも異なる出身地域や職業の人を選び、そして男女のバランスをとるとというのは、実は大変な苦勞が要るのですが、その作業をしてくださったアイリーン・ヒラノさんに感謝したいと思います。

では、これからパネリストの方々に10分間ずつお話をいただこうと思います。それぞれの方がお話になる前に、アイリーンさんのほうから簡単なお紹介をさせていただこうと思います。では、アイリーンさん、ドナ・フジモト・コールさんのお紹介からお願いします。

## ヒラノ

武田先生がおっしゃったように、本日最初にお話するのはドナ・フジモト・コールさんです。ドナさんにとっては今回が初来日になります。ドナさんはテキサス州ヒューストン出身で、女性が経営する最大のアジア系アメリカ企業のひとつ、コール・ケミカルズ社の社長兼最高経営責任者でいらっしゃいます。ではドナさん、よろしくをお願いします。

## ドナ・フジモト・コール(コール・ケミカル・ディストリビューティング社 CEO / 社長)

アイリーンさん、どうもありがとうございます。本日ここで皆さんにお話できることを大変嬉しく、また名誉に思っております。私は今回初めて日本に参りましたが、この美しい国そして人々を訪ねることができて幸運に存じます。私は日本の景気向上という目的も兼ねて10月に再度来日いたしますが、そのときには娘を連れてきて、私たちのルーツを探したいと思います。日本の外務省、国際交流基金日米センター、全米日系人博物館、ならびにロサンゼルスとヒューストンの領事館とそのスタッフの皆さんに厚くお礼申し上げます。

私は、日系アメリカ人女性としての私自身の挑戦、アメリカにおけるビジネスや人口の趨勢につい

ての私の見方をお話しようと思います。

アメリカで化学会社を営んでいる女性はほんのわずかです。さらにアメリカで化学製品流通会社を営んでいる日系アメリカ人女性は私の他にいらっしゃらないのではないのでしょうか。私の会社は、CPI パーチャシング・マガジンによると、国内のトップ100化学製品流通会社の中で44位にランキングされています。

私は27歳のとき5,000ドルの資本金で会社を始めました。私は離婚しており、4歳の娘を抱え、大学の学士号も持っていませんでした。それ以来26年間、私は多くの企業を設立したり他社を買収したりしてきました。私の住んでいるテキサス州ヒューストンの場所を把握していただくため、アメリカの地図をお見せします。テキサス州はアメリカの下の方の中央部にあります。面積ではアラスカ州についてアメリカで2番目に大きな州です。国内最大の10都市のうち3つがテキサス州にあり、そのうち最も大きい都市はヒューストンで、他の2つはダラスとサン・アントニオです。ヒューストン大都市圏の人口は約400万です。ごらんのように、アジア系は7%、白人は31%、アフリカ系は25%、そして最大のグループはヒスパニック系で37%です。ヒューストン港は米国第3の港です。2004年のアメリカの対アジア貿易高は71億ドル、ヒューストンの輸出入を合わせた貿易高は7億6,000万ドルでした。ヒューストンは化学とエネルギーの企業、ならびにNASAの宇宙センターがあるため宇宙テクノロジーでも有名で、バイオ医学研究と炭素ナノテクノロジーの中心地でもあります。

アメリカには女性の経営する会社が650万社あり、その平均売上高は100万ドルです。そのうちアジア系アメリカ人女性が経営する企業は41万9,000社、従業員数は54万4,000人、売上高は697億ドルです。つまり、アメリカのアジア系およびアジア太平洋系の女性の12人に1人が企業経営者だということになります。アジア系およびアジア太平洋系の女性経営者が最も多いのはサービス部門で56%を占め、過去5年間に66%の成長を遂げています。小売業の経営者は18%です。産業別では、これまで圧倒的に男性の経営者が多かった産業で過去5年間に最大の成長を遂げたのは農業で13%を占め、80%の成長を遂げています。また輸送、通信、公共事業なども75%の伸びを示し、全体の13%を占めています。テキサス州は全国で、アジア太平洋系の女性の企業家が多い上位10州のうち、カリフォルニア州、ニューヨーク州に次いで全国3番目にランクされています。

最初、私はゴールドキング・ケミカルズ社に就職したのですが、そこでビジネスについて学ぶまたとない機会が与えられました。化学薬品の売買について学び、請求書を送り、取立てを行い、会社のタンク車両を管理し、支払勘定を処理し、銀行取引明細書の調整を行い、あらゆる出荷の実務業務を行いました。そして1980年に私は、エクソン、シェル、モンサント、デュポンといった顧客企業に、独立して起業する気はないかと尋ねられるようになりました。私にとって顧客の要望どおり起業することは、私の持てるものをしっかりと使い、自分の事業の育成を確約すること、コミュニティーにお返しをすること、そして他のマイノリティ民族の人々を雇い、彼らの経営する企業と取引をすることにほかなりませんでした。

女性が男性優位の業界で成功しようとするのと同じく、日系アメリカ人であることは、時として困難を伴うものでした。これは諸刃の剣でした。日系アメリカ人であることが有利なときもあれば、不利なときもありました。女性であることが有利なこともありました。若いころはそれで面会の予約を取ることができました。化学業界にはあまり女性がいませんので、バイヤーはどんな女性が来たのか見たかったのでしょうか。後に起きた「品質管理運動」では、私の会社が日本の品質本位の企業を連想させ、バイヤーは私が日系アメリカ人で企業のオーナーであるなら品質本位の企業に違いない、だから取引すべきだと考えたようでした。しかし1980年に自分の会社を立ち上げたとき、私は会社をフジモト・ケミカルという名前にしないことにしました。というのは、当時日本たたきがさかんに行われていたからでもあります。また離婚していましたが、名前をフジモトに戻したくなかったからでもあります。離婚だけでも相当な痛手だというのに、さらに名前を変えると4歳の娘と違う苗字になってしまうからでした。1979年に、日本企業との合併事業を計画したことがありました。私は会社の24%を保有しており、合併事業を計画していたのですが、何と相手が私の名前を株式配布リストから外してしまったのです。理由を尋ねると相手はこういいました。「あなたは女性で、なお悪いことには日系アメリカ人女性だ。あなたに株主になってもらうわけにはいかない」。それは1979年のことで、もちろん今はこんなことはないと思います。しかし化学の学士号もなく、化学エンジニアでもないことが、取引先の一部のバイヤーやエンジニアにはひっかかったのでしょうか。私は化学辞典を引き、ありとあらゆる資料を使い、石油のフローチャートやメーカー要覧を利用しました。専門知識を持っている人には教えを請いました。そのおかげで知識が増え、さまざまな企業と化学製品の売買ができるようになりました。

最初に突き当たった壁のひとつは資本の調達でした。新興企業なので銀行に融資枠がありません。個人名での融資枠は2ヶ月で使い切ってしまう、キャッシュフローに事欠くようになったため、提携先を見つけなければなりません。銀行は私を信用していませんでしたので、仕事上の提携相手を持つよう勧めたのです。そのおかげで4ヵ月後には12万5,000ドルの融資枠を手にすることができました。1年後には結局私が提携先を買収し、それ以来独自でやっています。最初に資金の問題を克服し、銀行の融資枠を手に入れて事業を成長させるのに10年かかりました。またアメリカには、トヨタのような企業と融資契約を結び、それによって資金を貸してくれる非営利団体もありました。また債権を使って買収資金を調達したこともあります。さらに、両親から借金をしたことも覚えています。以前、母はよく私に20ドルを送ってきてくれたものでした。私は社員の給与をまず支払いましたので、自分の家賃を払うためもっとお金を送ってほしいと頼んだこともあります。

ともあれ、私たちは当社に合った多種多様な顧客や業界を見つけようと常に努力してまいりました。そうすればひとつの顧客や業界に依存しすぎることがないからです。ご存知のように、たったひとつの大手顧客や大手業界だけを相手に取引することの弱点は、状況が変わると、会社が生き残るために規模を縮小しなければならなくなることです。そして、事業を売却したり、社員を解雇したり、できる限り予算を削減したりするのは、どんなときでも痛みを伴うものです。

わが社はアメリカ政府からも支援を受けています。アメリカ政府は様々な製品やサービスの最大の

バイヤーのひとつですが、50万ドル以上の契約を持つ大企業は、マイノリティの経営する中小企業に下請け契約を与えるプランを義務付けています。このプランでは入札プロセスと競争受注した事業の下請けに、中小企業、マイノリティ民族、女性、身障者、退役軍人の経営する会社を必ず含め、目標値を達成しなければなりません。目標値はたいてい契約の5 - 10%です。多くの地方自治体でも、変動する景気の中で中小企業を支援し、生活の質を高めるため、中小企業や下請けプログラムを設けています。

P & G、コカコーラ、トヨタなどの消費者をターゲットとする企業はマイノリティ民族や女性の経営する企業を供給元にしています。これらの企業は人種構成の多様性の価値を理解し、供給基盤は顧客基盤を反映していなければならないということが分かっているからです。世界市場で成功したければ、必ず多種多様な供給業者と取引をすることです。マイノリティ民族の経営する多くの企業は非常に忠実な顧客であることが明らかになっています。

過去26年間、実際にわが社が成功する上で役に立ったのは24時間の顧客サービスでした。わが社には電話に答える受付係がいません。顧客サービス部が電話に対応しますので、注文する場合も部門をたらいまわしにされたり、ボイスメールの操作にてこずったりすることなく注文ができます。

わが社が今直面している新しい課題は、グローバルな購買、支払い条件の拡大、コスト削減の圧力増大、社員の転職、それに逆オークションです。逆オークションでは、わが社の付加価値のついたサービスの強みを活かすことができません。

わが社が販売している製品は化学薬品、合成潤滑油、樹脂製品、燃料、特殊化学製品です。これらを20の業界に販売しています。その最大のものは自動車産業で、その他化学、防衛、掘削、電力、医療介護、精油などの産業があります。昨年の売上は5,600万ドルでした。これを10人の社員でこなしています。私たちは従業員数を抑えようとするとともに、各人の力をより多く引き出し、技術効率を高めて売上を伸ばしていることを誇りに思っています。

日本企業の取引先としては、東京のカーギル、ここ名古屋のCCIケミカル、それにトヨタがあります。CCIについては、わが社はむしろ不凍エンジンクーラントを購入する側です。トヨタはわが社で十指に入る大手顧客企業で、アメリカのトヨタ工場の4ヶ所に製品を供給しています。またエクソンモービル、P & G、ロッキードなどもわが社の顧客企業です。

わが社はまた、世界経済に立ち向かうことも楽しみにしています。わが社は今後、グローバルな成長を目指す顧客企業に、物流、金融、ITサービスのソリューションとなる製品を提供するサービスが必要となってくるでしょう。ここで必ず問題となるのは、従業員の教育、維持、雇用といったことです。長くビジネスを続けていれば、製品やサービスを拡大するチャンスがそれだけ多くめぐってくるわけですが、そこで危機管理を怠ってはならないということ、今日の重要課題として考えています。



ご清聴有難うございました。ご質問があればお受けしたいと思います。

## ヒラノ

次にお話していただくのは、フィリップ・カン・ゴタンダさんです。ゴタンダさんは脚本家であり、映画制作者であり、また大学でも教えていらっしゃいます。カリフォルニア州北部のバークレーのご出身で、ごく最近ゴタンダさんの戯曲、「マツモト・シスターズ」が東京で上演されました。それではフィリップ・カン・ゴタンダさんにマイクをお渡ししましょう。

## フィリップ・カン・ゴタンダ（劇作家・映画監督）

話を始める前に、国際交流基金日米センター、日本の外務省、全米日系人博物館、名古屋国際センター、在ロサンゼルス日本国総領事館、在サンフランシスコ日本国総領事館に対し、私たちが皆さんにお話する機会を与えて下さったことを感謝申し上げます。

私はカリフォルニアで生まれた、日系三世です。私の祖父母は広島出身で、母方の祖父は村の若者たちとくじ引きをし、一番短いくじを引き当てたため、日露戦争に行かずにすんだそうです。祖父はアメリカで運試しをすることにしました。渡米し中西部の鉄道で働いていましたが、そこは「ものすごく寒かった」という説明しかしてくれませんでした。最終的に祖父はカリフォルニア州セントラル・バレーのストックトンという町に落ち着きました。

父方の祖父は、ハワイ諸島のカウアイ島の「イナカ」の方に移住しました。しかし1900年代初頭のカウアイ島を想像できる方は、それがどんな「イナカ」かお分かりいただけだと思います。私の父は13人の兄弟姉妹の一人で、網漁をしたり、野生の羊やイノシシを捕えたりしながら大きくなりました。兄弟姉妹からの支援を得、父は本土で勉強して医師になりました。

父は医学部卒業後、西海岸へやってきて、カリフォルニア州のストックトンで開業することにしました。そこには多くの日本人がいましたが、日本人の医師は少なかったのです。父はそこで、当時裕福な一世の実業家の娘だった母と出会い、結婚しました。しかし新生活を始めたばかりのとき、戦争が勃発し、ストックトンの日系アメリカ人全員とともに、アーカンソー州のローワーへ送られ収容されました。その生活は3年間続き、父は収容所の医師として仕事をしました。

両親は戦争が終わって収容を解かれ、西海岸へ戻りました。戦後、両親が収容所から戻ってから、私はカリフォルニア州ストックトンで生まれ、2人の兄弟とともにそこで育ったのです。50年代から60年代にかけて、私は圧倒的に白人の多い地域で育ち、圧倒的に白人の多い学校に通っていました。

皆さんにそのころの政治的、社会的感覚を分かっていたくために申し上げますと、アジア系アメリカ人という言葉は当時まだ考案されていませんでした。日系アメリカ人の家庭で、強制収容所についての話はタブーでした。歴史の教科書の中で、強制収容所の記述はわずか1行か、あるいは皆無で、日系アメリカ人の視点から見た記述をするなどということは、当時は考えられないことでした。日系

三世の作家として家族について書く場合は、白人の登場人物の出てくる話を書くのがごく普通のことでした。

1960年代後半はアメリカが激変した時代でした。国内でも大学のキャンパスでも社会不安があり、反戦運動があり、公民権運動が起こりました。大学のキャンパスでアジア系の若者が、黒人の運動に触発されて、自分たちの本当の歴史を主張し、アメリカにおける自分たちのアイデンティティとは何かを主張し始めたのもこの頃でした。アジア系アメリカ人という言葉が、若い日系アメリカ人の大学教授、ユウジ・イチオカによって作られました。若い日系アメリカ人たちは強制収容所について問い始め、彼らを差別した法律や制度について疑問を持ち始めました。私が大学に入ったのは、まさにそういう激動の時代でした。

最初、私はこのアジア系アメリカ人というイデオロギーがよく分かりませんでした。イエローパワーだの人種差別主義だのといって、非常に急進的に感じられたのです。またそのせいで皆がストライキをし、授業に出ることができなくなりました。ですから、日本への交換留学プログラムの話が持ち上がったとき、私は手を上げたのです。

私は1970年に初めて日本へやってきました。おそらく「母国」へ戻ることで、アメリカの混乱の時代に答えを見つけることができると考えたのです。自分は日本人なのか？自分は日系アメリカ人なのか？そしてこの新しい「アジア系アメリカ人」というのは何なのだ？それは私にとって「ルーツ」を探す旅でした。

国際基督教大学に行くため東京にやってきました。数多くの文化的な失敗をしでかした私はすぐ、自分はちっとも日本人ではないこと、また日本には絶対になじまないことが分かりました。しかし時間が経つにつれ、私は日本文化、特に陶器に興味を持つようになりました。私は栃木県にある窯元の村、益子へ行き、そこに住んで仕事を始めました。私の家の隣には人間国宝の濱田庄司さんが住んでおられました。濱田さんの家は伝統的な農家を改造した素晴らしいものでした。私の家は、障子の破れを紙袋とセロテープでふさいだ小さな掘立小屋でした。

そこに住み始めてまもなく、私の先生である瀬戸浩さんがある日、笑いながら近づいて来られました。ここで、当時日系アメリカ人は日本にはまだわずかしかなかったことを申し上げておきましょう。先生は、この村へ来ると皆に私のことを尋ねられたとおっしゃいました。外見は日本人のようだが、身振りはぎこちないし、話をするととてもおかしい日本語をしゃべるといいます。皆は私を知적障害だと思っていたのです。

益子に1年ほど住むと、居心地もよくなりました。日本語もうまくなり、何をしても人目を引くようなことはなくなりました。身振り手振りは控えめでその場にふさわしく、夢さえ日本語で見るようになりました。私はそこの暮らしになじんできたのです。私の一生を変える経験をしたのはそのころでした。

私は仕事で東京へいかねばなりませんでした。電車に乗って東京へ来て、駅から出ようとしたとき、おびただしい数の顔がこっちへむかってやってきました。みんな私とよく似た顔ばかりです。私は圧倒され何が何だかわからなくなりました。左に目をやると、ソニーのテレビがずらりと並んでいて、野球の試合を放送していました。どの選手も私によく似た顔をしています。上を見ると大きな広告板に映画スターがたばこを吸っているところが描かれていました。これも私によく似ています。交通整理の巡査も路上作業員も店員も、皆私によく似た顔をしていました。

こうして数え切れないほどの日本人の群集の中に飲み込まれた私は、気持ちがだんだん軽くなっていきました。両肩ののしかかっていた大きな重しがなくなっていくのが感じられました。私は人ごみの中を楽々と動き始めました。この世界のあらゆる人間、あらゆるものが、私の存在を映し、肯定し、認めてくれている、そのことが私に元気を与えてくれたのです。

「なぜ自分は皆のように金髪でもなく、青い目でもないのだろう。なぜ『普通の』世界の人のように白人じゃないのだろう」と、絶えず自分を貶めてきた内心のつぶやきはもうなくなりました。

ここで初めて私は、周りの世界が自分のすべてを裏付けてくれる世界に住むという素晴らしい自由を体験したのでした。髪の色、目の形、英雄、映画スター 私はほかと違う存在ではなくごく普通の人でした。私はれっきとした自分をとりまく集団の一員でした。それはこの上なく幸せな、なんの努力もいらぬ、素晴らしい匿名性でした。私はその世界の一部でした。

私は自分の中から消え去ったあの重苦しさは何だったのかが分かりました。それは毎日の生活を人種差別主義と暮らすことの心理的な負担でした。そこではどんな出会いにも、やり取りにも、憧れにも、希望にも、人種という一面が影響を及ぼすのです。しかし今、私はこの日本で、多数派の一員であり支配的な文化の一員であること、周辺ではなく中心で暮らすことがどういうことかを垣間見ることができたのでした。

もちろん、まもなく私は自分が本当の日本人ではないことに気づきました。また、私は日本に住む外国人として快適に暮らすこともできるけれども、私に与えられた仕事はアメリカにあるということも。私はアメリカの生活に戻り、日系アメリカ人の本当の物語を調べました。やがて、私はアジア系アメリカ人・日系アメリカ人運動で活動するようになりました。また、日系アメリカ人の歴史の語り部として、戯曲を書くようになり、後には映画を作る仕事をするようになりました。

私は最初、自分の書いた日系アメリカ人の物語を歓迎してくれる、できたばかりのアジア系アメリカ人の劇団と仕事をしていました。やがてそれが拡大し、国内だけでなくロンドン、東京、カナダの主だった劇団とも仕事をするようになりました。私は日系アメリカ人として、個人的な体験に基づいて書くこともできますし、日系アメリカ人について日系アメリカ人の目を通して書くこともできます。またそれをさらに幅広く包括的に、すべてのアジア系アメリカ人に広げて書くこともできます。そこでは、中国系、フィリピン系、コリア系、東南アジア系、南アジア系など、多人種、多文化のアジア

系アメリカ人全員が、平等な発言権と真正性を持ってアメリカの物語に参加できるのです。

5年ほど前、私は30余年ぶりに日本を再訪しました。今回はすでに自分が何者か知っていましたから、自分発見の旅ではありませんでした。そのような疑問はすでに明らかにされていたので、日本から答えをもらおうとは思っていませんでした。そうではなく、自分は今なお外国人だけれども、特別なつながりを感じている国を訪れる旅でした。ここは祖父母の出身地であり祖先の生まれた場所、母がいつも非常に大きな誇りを持って指し示す場所でした。私自身の一番奥底にある心の根幹のほとんどはそこから生まれ、今もそこに属しています。

今回、私はある程度の定評を得た日系アメリカ人のアーティストとして、日本と自分との関係をもっと知りたいと思っています。また、非常に人種を区分する意識が強く、多様な人々が集まっている社会で日系三世として学んだことを、日本の皆さんにもお伝えしたいと思っています。さらに、これが最も重要な点ですが、皆さんとご一緒に、私たちについての新たな物語、血を分けた特別な関係にある2つの国の人々がどうすれば協力し合うことができるかを描いた物語を作りたいと思っています。私たちの力を合わせて新しい物語を作ってまいりましょう。

ご清聴有難うございました。

## ヒラノ

次にお話していただく方は、ワシントン DC からお見えになりました。日本は今回が初めてです。クレイグ・ウチダ氏は、刑事司法と国土安全保障の専門家で、会社経営もされています。今日はご自分の体験について語っていただきましょう。クレイグさん、お願いします。

## クレイグ・ウチダ (ジャスティス & セキュリティ・ストラテジー社 社長)

アイリーンさん、有難うございます。また武田先生、有難うございます。本日ここに出席できますことを大変嬉しく思っています。またここにお集まりいただき、私たちの話をお聞き下さる皆さんにもお礼申し上げます。また、本日私たちをお招き下さった、国際交流基金日米センター、日本の外務省、全米日系人博物館、および在ロサンゼルス日本国総領事館にも感謝申し上げます。また、私たちの話に耳を傾けて下さるご臨席のご同輩の皆さんにもお礼申し上げます。

本日私は、自分の職業人としてのキャリアについてお話し、そのキャリアを積み重ね、確立する上で直面した色々な問題について、また法の執行と国土安全保障の両面における人種と民族性についての私の考えについてお話しするよう言われました。これを8分間ですべて網羅できればと思います。最初に、私はジャスティス & セキュリティ・ストラテジー社の社長兼創立者であることを申し上げておきましょう。これは法の執行機関、刑事司法機関、国土安全保障機関、公共政策決定者らと一緒に仕事をするコンサルティング会社です。私は犯罪学者としての教育と訓練を受けておりますが、一番の問題は「それはいったいどういう意味なのか、犯罪学者とは何なのか、刑事司法機関と協力するとはどういう意味なのか」ということでしょう。そうそう、それに私はどこの出身なのでしょう。

アメリカでは、その人の職業や外見でその人を定義することがよくあります。なぜなら白人のアメリカ人はそういうことを知りたがるからで、そのような質問に対してはステレオタイプがたくさんあります。私の話の中では、これらのステレオタイプをご紹介します、また私が何をしているのか、私は何者なのかをお答えしたいと思います。

「刑事司法のコンサルタントとは何をするのか」という最初の質問にお答えするのは、そう簡単にはいきません。今日通訳者と話していたとき、彼女は「刑事司法とはアメリカではどういう意味を持つのですか」と言いました。そして、刑事司法は日本よりアメリカのほうが広い意味を持つようだと言いましたが、私もそう思います。日本では刑事司法とは、単に法律や警察や裁判所に関連したことにすぎませんが、アメリカでは刑事司法とははるかに広い意味を持ち、警察や検察、裁判所、さらには刑務所、拘留所、監禁されている人、犯罪の被害者も含まれます。また私の職業から見ると、なぜ犯罪をするのか、誰が犯すのかということもそれに含まれます。ですから、刑事司法と犯罪学について話す場合、日本よりはるかに広い範囲で捉えていただかなくてはなりません。

しかし、「私は何をしているか?」。まだその質問にはお答えしていませんでした。私が何をしているかを具体的に申し上げますと、アメリカや海外の警察機関と共同で仕事をしています。たとえば現在は、カリブ海の小さな島国であるトリニダード・トバゴ共和国と協力してこの国の警察庁の訓練カリキュラムを改定しています。今は殺人の調査方法の改善をはかっています。この国では殺人事件が非常に多いのですが、その犯人の実際の逮捕率は非常に低いのです。またアメリカでも、多くの機関の仕事をしています。実のところ、私はこの8年間で35の警察機関で、効率よく仕事が管理できるようにお手伝いしたり、何が効果的で、何が効果的でないかという回答を提供したりしてきました。

先に挙げた第2の質問は、いつも尋ねられることなのですが、「どちらのご出身ですか」というものです。これは、日系やアジア系のアメリカ人にはおなじみの質問だと思います。なぜなら、私たちは外国出身だろうという仮定がその根底にあるからです。私たちは誰でも「どちらのご出身ですか」という質問をされたことがあると思います。私はたいていワシントン DC 出身ですとか、生まれ育った南カリフォルニア出身ですとか答えるのですが、そうすると相手はちょっと訝しげに私を見て「ああ、そういう意味じゃないんです」と言います。もちろん分かっていますが、こちらもしばかり意地悪に答えているわけです。相手は明らかに私がアジアの国の出身だ、というのを聞きたいのです。さらに、本当に知りたいのは、どこから来たのか、いったい何者なのか、ということです。そうして結局、最後には、私は日系アメリカ人三世ですと教える羽目になるわけです。

全体的に見て、刑事司法や犯罪法の分野に従事している日系アメリカ人はほとんどいません。私は米国犯罪学会の会員なのですが、これは国内最大の会員数を持つ学会で、あらゆる刑事司法のタイプや専門家などの動向を把握しています。この学会は全国に約3,800人の会員を持ち、そのうち1,400人は学生です。私は先週その名簿を見て、日系の苗字を持つ会員は何人いるかを調べてみました。先ほど武田先生がおっしゃったように、苗字だけで必ずしも日系アメリカ人だと決めつけることはできませんが、これもひとつの手段ではあります。しかし名簿の名前をひとつひとつ見ていったのですが、

やはり日系の苗字はほんの一握りしかありませんでした。刑事司法と犯罪学の博士号を持つ日系アメリカ人は7人、また日系の苗字を持つ大学院生は29人でした。そのうち13人は実際には日本の人でしたから、犯罪学を学ぶ日系アメリカ人はさらに少ないことになります。ですから、私は自分がアメリカ全土の大小の機関で警察活動について学んだ唯一の日系アメリカ人だといってよいと思います。私が唯一だということ、自分はマイノリティ中のマイノリティだということに本当に驚いてしまいます。しかしマイノリティであることは、私のキャリアの中で特に大きな障害とはなりませんでした。私はさまざまな機関や組織で仕事をしてきました。メリーランド大学で犯罪学の教鞭も取ってきました。ワシントン DC の研究機関(「シンクタンク」)のプロジェクト・ディレクターも務めました。そして、米国連邦司法省の2つの機関の調査部長を務め、上級幹部でもありました。現在は個人事業のほかに、バージニア州のジョージメーソン大学で警察活動のコースを教えるとともに、カリフォルニア州モンレーの米国海軍大学院でも国土安全保障について教えています。過去25年間のキャリアの中で、いくつもの補助金や契約を獲得してきました。雑誌にも数多くの記事を書き、2冊の本を編集し、小さいながら一応会社も経営しています。

これらの過程で何か障害があったでしょうか。あったと思いますが、率直に言うと、少なくとも私に関しては、それが人種に関するものや民族に関するものだったどうかよく分かりません。そうであったとしても、私は勤勉と忍耐という伝統的な日本的価値によってその障害を乗り越えてきたと言えると思います。事実、忍耐について私の両親が与えてくれた特質は、私のしているような仕事には非常に役立つものだと思います。ステレオタイプや人種差別と思われることがらについてひとつふたつ例を挙げてみたいと思います。それらは捉えにくく見過ごされる場合もありますが、フィリップさんが言ったように厳然として存在するものです。ひとつは、私が大学院生でニューヨーク州のロングアイランドのセミナーに出席していたときのことです。私は米国史を勉強していました。私の専攻科目のひとつが米国史だったからですが、教授の一人がいうことに私は驚いてしまいました。彼は私の英語がとても上手いのにびっくりし、また私が大変「西洋風」の身なりをしていると言いました。実は教授が言っていることが私にはよく分からなかったのですが、やがて、それは自分がジーンズと格子縞のシャツを着てたばこを吸っていることだというのがようやく分かってきました。メリーランド大学で教えているときにも同じようなことがありました。学生は私の英語が上手いことについてとても有難がっていました。

もうひとつ、私が人種的な「不快感」を感じた、もっと露骨な例を挙げましょう。それは私がアラバマ州のレストランに入ったときのことです。アラバマ州は保守的な南部にあり、アフリカ系アメリカ人に対する隔離政策で知られていました。その時私は、二人の白人の警察官と一緒にいました。レストランに入ると、すぐ百人くらいの目がさっと私に向けられました。それは明らかに、私とその部屋でただ1人、白人ではなかったからでした。疑いの余地はありません。そして、私はテーブルまで歩いていくのに、非常に居心地の悪い思いをしたことを覚えています。しかもついでに言いますと、私たちのテーブルはたまたまレストランの一番奥にあったのです。しかし同時に、私は友人と一緒にいたので、騒ぎを起こしたくありませんでした。ですから何も聞かず、何を見ているんだとも言いませんでしたし、お客のほうも私が何者で、そこで何をしているんだとも尋ねませんでした。私はその

レストランに座って、友人と昼食を食べ、別に何もありませんでした。私が制服を着た2人の警察官と一緒にいたことも幸運だったと思います。

ここで手短かに、法の執行と国土安全保障における人種差別と民族性について少しお話ししましょう。法を執行するにあたって、警察はしばしば人種主義的だとか差別的な方針を採っていると非難されています。ロサンゼルスやニューヨークなどの警察機関では、警察は人種を見て逮捕したり職務質問したりしていると非難されます。そういうこともあるでしょう。しかし私や同僚が行った調査では、警察が人種によっていろいろな判断を下しているかどうかは、はっきり分かりませんでした。それは非常に見分けにくく、非常に捉えにくく、調査をしてもそういうことが実際に起きているかどうか分からないのです。しかし人種による取締りの差別は確かにあることがわかっています。皆さんがこの言葉をご存知かどうか分かりませんが、それは「黒人が運転するからつかまる」「ヒスパニックが運転するからつかまる」ともいわれています。「アジア人が運転するからつかまる」というのが必ずしもあるかどうか分かりません。しかし、ニュージャージー州やその他の州の警察には人種にもとづく差別があったことがわかっています。すなわち、警察は、黒人だから、ヒスパニック系だから、アジア系だからというだけの理由で取り締まるのです。このようなやり方は今ではほとんどなくなりました。米国司法省がやり方を改めるように命令を出し、警察がそれに従ったのです。ロサンゼルス警察はそのやり方にいわゆる「同意判決」が下されたため、連邦政府はこれらの機関に対し遵守しなければならない一定の基準を適用しています。

最後に、国土安全保障の分野について言いますと、9月11日の同時多発テロ事件の後、日系アメリカ人社会の多くの人が懸念したことのひとつは、アラブ系アメリカ人、イスラム教徒、シーク教徒がテロリストとして槍玉に挙げられることでした。多くの日系アメリカ人は、強制収容所の体験や、1940年代に経験したさまざまな慣習や問題を思い出し、そのことを心配したのでした。ですから嬉しいことに、アラブ系アメリカ人やイスラム教徒やシーク教徒の側に立って、このグループに対する差別的考えと戦った日系アメリカ人がたくさんいました。またノーマン・ミネタ運輸省長官のような人々が立ち上がり、「こんなことは許されない」と言ったことも力になったと思います。日系アメリカ人に対する強制収容所のようなひどい仕打ちではありませんが、これらのグループに対する人種差別はまだ残っています。私が申し上げたいことのひとつは、人種と民族性は自分が何者であるかを定義する上で確かに大きな役割を果たしていますが、それは、私たちが成功をおさめ、幸福な生活を送る上で妨げにはならないということです。人種差別は私たちを不安にし、不快にさせることもありますが、私たちはこのような問題の多くを克服し、アメリカ社会にはびこっているこれらの卑小な不正を相手にせず、前進してきたのだと思っています。

皆様のご清聴を感謝します。後ほどご質問をお受けいたします。

## ヒラノ

次にお話していただくのはフランク・バックレーさんです。バックレーさんは地元のテレビ局のひとつで共同アンカーを務めておられ、ロサンゼルスではおなじみの顔です。以前はCNNにお勤めで

したので、全国の視聴者にも知られています。では次にフランク・バックレーさん、お願いいたします。

### フランク・バックレー（KTLA テレビ所属 ジャーナリスト）

アイリーンさん、有難うございます。私の名前がフランク・バックレーというのをお聞きになって、ご存知ない方もいらっしゃるかもしれませんが、これは必ずしも伝統的な日本の名前ではありません。私も日本人には見えないかもしれませんが、私はハーフ・ジャパニーズとして誇りを持っています。

私の母は「あなたの体には日本人の血が流れててるのよ。忘れないでね!」と言って、いつもそのことを思い出させてくれました。しかし、ほとんどの人は私の母に会ったことがありませんし、仕事仲間もテレビの視聴者も、私がハーフ・ジャパニーズだということを知ると非常に驚きます。

しかし私はむしろ2、3歳のときに自分が半分しか日本人でないことを知って驚いたのです。私たちは当時日本に住んでおり、今も子供たちがこんなことをするかどうかわかりませんが、私が少年のころは、子供がアメリカ人や西洋人を見ると「外人だ」「外人だ」といって指さしたものでした。ですから私も外国人を見ると「外人だ」「外人だ」と言っていました。そのとき両親に「お前だって外人なのだよ」といわれたのです。ですからそれ以来、私には非常に日本的なところと、非常にアメリカ人的なところがつねに同居しているのです。

アイリーンさんがおっしゃったように、私は現在ロサンゼルスでは5チャンネルのKTLA-TV局で、ニュース番組のアンカーとレポーターをしています。昨年の6月まではCNNの記者をしていました。それ以前はロサンゼルス以外のテレビ局でレポーターとして働き、またノースカロライナ州やパームスプリングスでも仕事をしていました。

ロサンゼルスのテレビ視聴者の多くは、私が地震を取材するため神戸へ行き、日本語を話し出すまで、私がハーフ・ジャパニーズだということを全く知りませんでした。私は2歳のころ横浜に住んでいて、そのとき日本語を覚えました。ですから、今日私のお話しする日本語は子供言葉で洗練された日本語とはとても言えません。「子供っぽい日本語です」。しかし神戸の取材をするには、その「子供っぽい日本語」で十分役に立ちましたし、両親は、自分の息子が日本語を使って仕事ができたと事実を非常に嬉しく思っています。

またそれで、ロサンゼルス多くの日系アメリカ人の視聴者の方々の注目も集めることになり、おかげでその方々ともつながりができました。あんな大きなニュースの取材で、自分たちの仲間が日本語を話しているということが、日系アメリカ人視聴者にとっても日本人視聴者にとっても誇りに感じられたのだと思います。多くの方々は、私が「自分たちの仲間」だということを知らなかったからです。ですからこのおかげで、私はロサンゼルスの日本人社会や日系アメリカ人社会とつながることができたのです。



またそのおかげで、アメリカの言い方をすると、他の「非白人」とのつながりもできました。他のアジア諸国の祖先を持つアジア系アメリカ人、ラティーノ、アフリカ系アメリカ人など、多くの人々に、私はバックリーという名前ですが、民族的遺産としてさらに多くのものを受け継いでいること、それがおそらく、少なくとも私には、アメリカでマイノリティの一員として暮らすことについて洞察を与えているという事実がわかってもらえたのです。私は黒人のアメリカ人やラティーノ、あるいはベトナム系移民であることがどんな気持ちなのか分かんるとはいえませんが、人と違うことがどんな気持ちなのか分かります。そのためマイノリティの人たちに対して、また私たちが抱えているいくつかの問題について、もっと敏感に感じるができるのだと思います。

日系アメリカ人であることは、仕事を探す上でも役に立ちました。ラジオやテレビの業界でも、また活字メディアでも、アメリカの企業は人種的多様化への圧力を受けています。全員が白人とか、全員がひとつの人種というような企業は望ましくないのです。常にアメリカ社会の構成を反映する人々を雇おうとする試みがなされています。アフリカ系アメリカ人の視聴者が多ければ、テレビ局はアフリカ系アメリカ人のレポーターやアンカーを相応数だけそろえなければなりません。南カリフォルニアにはアジア系や日系のアメリカ人が非常に多いので、ロサンゼルスへのテレビ局への就職活動では、私が日系アメリカ人であることが役に立ったと思っています。採用された後は、上司が私を雇ったのが正しかったことを証明するのは私の責任でした。

しかし実際は、アメリカでテレビに出ているアジア系アメリカ人男性、特に日系アメリカ人男性の数は、あるべき数より少ないのです。2002年に南カリフォルニア大学アンネンバーグ・スクールが調査したところによると、国内最大の25のテレビ視聴地域で画面に出ているアジア系アメリカ人男性はわずか20人でした。それに比べて、これらの視聴地域で画面に出ているアジア系アメリカ人女性は85人でした。この20人の中には日系アメリカ人男性もいます。たとえばKABC-TVのアンカーのデビッド・オノ、同じテレビ局でスポーツニュースのアンカーをしているロブ・フクザキ。大学のクラスメートの一人、ゴードン・トクマツはKNBC-TVのレポーターです。

しかし放送ジャーナリズムという仕事は日系アメリカ人、さらに一般的に言うとアジア系アメリカ人を雇うという点では遅れています。ラジオ・テレビニュース・ディレクター協会(RTNDA)が最近行った調査によると、彼らの言うところの「アジア太平洋系アメリカ人」のジャーナリストの数が減っているということが分かりました。2000年にはアメリカのテレビニュースで働く人の3%がアジア系アメリカ人でした。2004年にはそれが2.2%に減少、2005年には1.9%になりました。さらに気がかりなのは、経営陣におけるアジア系アメリカ人の割合です。RTNDAの調査によると、アメリカのテレビニュースのディレクターの88%が白人で、アジア系アメリカ人は1.3%しかいません。ラジオでは驚くべき数字が出ています。ニュースディレクターのうちアジア系アメリカ人の割合はゼロなのです。

何が心配かという、若者はテレビやラジオで見聞きすることからいろいろなヒントを得ることが多いものです。我々が放送で活躍すれば、若いアジア系アメリカ人や日系アメリカ人に良い影響を与

えることができます。

また、ニュース編集室で働くことは、自分の民族グループの報道内容を正確に伝える、よりよいチャンスに恵まれることでもあります。オークランドの KTVU-TV のアシスタント・ニュースディレクターのジャニス・ジンが言うように「その報道内容を生かすも殺すもマネジメント次第」なのです。

ジャニスはさらにこうも語っています。「だからこそ、ただ情報ルートやジャーナリズム業界に人を入れるだけでなく、その人がそこにとどまり、権力と責任ある地位をめざすように、強く後押しすることが大切なのです。」そうすることでその民族のコミュニティにとって重要な報道を間違いなく行うことができるでしょう。それこそ日系であるアメリカ人としての義務のひとつだと思います。

私はロサンゼルス の KTLA-TV のニュースアンカーとしての立場、またこれまでの CNN の報道記者としての立場を利用して、ニュースにならなかったかもしれない日本人や日系アメリカ人の重要な報道を行うことができました。また日本人の公平で正しい姿を見せられるようにすることもできました。

私は情報の門番役ですから、自分の関わるすべての報道が正確で公平であるよう常に確認していますが、日系アメリカ人や日本人の報道には特に理解を持っているので、それらが正しく伝えられるよう最善を尽くしています。

それについては、昨年私のテレビ局 KTLA-TV で放送した報道の話をしたと思います。毎年 8 月になると、アメリカの多くのテレビ局は 20 秒ほどの広島 のビデオを放映します。広島と長崎の原爆という悲惨な出来事を追悼する人々を放映するのですが、そのあとすぐ別のニュースになってしまうため、実際にその報道を「心から感じる」人はほとんどいません。

昨年の夏、私は広島で原爆を経験したある日本人男性に紹介され、これは視聴者の心に訴える「人間的」な報道ができる大きなチャンスだと思いました。そこでこの男性とのインタビューを準備し、私はニュース放送のアンカーですので、その報道を確実にを行うよう手配することができました。

これは私が自分の仕事で行使できる影響力であり、権力でもあります。私はそれを大変真剣に受け止めています。それは責任を伴うものですが、適切に用いれば、人間らしい報道をするのに役立ち、視聴者が周りの世界や、自分たちとは外見も背景も違う人々への理解を深められるようになります。ここで皆さんのお許しをいただきまして、サラシナ・ジュンジさんについて私が報道した内容をご覧に入れたいと思います。

#### 【ビデオ開始】

### バックレー

広島と長崎の被爆者にとって、今日の追悼式はとりわけ胸を打つものでした。私たちは、ここ南カリフォルニアには被爆者が約300人もいることを知りました。私はその中の1人と座って話をしました。彼は毎年8月になると、心は広島へ戻っていくと言いました。

### サラシナ

「私が今も生きているのは奇跡です。」

### バックレー

なぜなら、サラシナ・ジュンジさんはこの体験を生きのびたからです（爆音）原子爆弾です。原爆投下のとき、サラシナさんは法的にはアメリカ人でした。日本人の両親のもとにハワイで生まれたサラシナさんは、戦争の始まる数年前に母親と兄弟といっしょに日本へ帰っていました。1945年8月6日、サラシナさんは16歳でした。原爆が投下されたとき、彼はグラウンド・ゼロからわずか1マイル余りのところにいたのです。

### サラシナ

「ものすごい爆風と閃光で自分が吹き飛ばされたのが分かりました。周りの建物は倒壊しました。」

### バックレー

体中はずり傷と打ち身だらけでしたがサラシナさんは生きていました。次に彼が言ったのはこんな言葉でした。

### サラシナ

「町全体が瓦礫と化してしまった。」

### バックレー

すべて破壊され灰塵しか見えませんでした。一発の爆弾で町全体が破壊されるとは信じがたいことでした。これで14万人が死亡しましたが、サラシナさんの家族は生きのびました。彼らは広島のごく郊外に住んでいました。しかし多くの友人や学校の友達はほとんど亡くなりました。全部で250人いた1年生のうち生き残ったのはわずか6名でした。サラシナ・ジュンジさんはその1人で、後にアメリカへ渡って米軍に勤務し、南カリフォルニアに住み、仕事と家族を持ちました。そして、広島後の1日1日を感謝しつつ暮らしています。

### サラシナ

「あんな体験をしたため、この地上で過ごす毎日の生活、一瞬一瞬を楽しまずにはいけないのです。」

### バックレー

サラシナさんは、それが寿命をまっとうできなかった人々に対する義務だと言います。76歳のサラシナさんはまた、広島記憶について話し続けること、核兵器の使用にあくまで反対し続けることが、死んだ人たちと未来の世代に対する責任だと感じています。

### サラシナ

「世界の人々にこの体験を語ることが私の義務なのです。こんな体験をした人はなかなかいません。地獄から這い出してきた、その体験を話せる人はそうそういるものではありません。」

### バックレー

サラシナさんは米国広島・長崎原爆被爆者協会の理事を務めています。こんにちアメリカには約800人の被爆者がいるということです。1年おきに、日本の医師がアメリカへ来て会員の健康診断をし、原爆の後遺症が出ていないか調べています。これまでのところサラシナさんには、何も問題がないということです。

### もう一人のアンカー

そのような体験について声を上げて語るというのはとても勇気のいることですね。

### バックレー

話すたびに辛い思いをするそうですが、話さなければならぬと感じておられるのです。

### もう一人のアンカー

本当にいいお話でした。

### 【ビデオ終了】

### バックレー

サラシナさんにインタビューしたロサンゼルステレビ局は私たちだけでした。この報道を見た視聴者の皆さんにとって、広島記憶がもっと意味のあるものになってほしいと思っています。ご覧下さいまして有難うございました。

国際交流基金日米センター、日本の外務省、全米日系人博物館、在ロサンゼルス総領事とそのスタッフ、そしてここ名古屋の皆さんにも、今日こんな素晴らしい対話の機会を与えていただいたことをお礼申し上げたいと思います。

どうも有難うございました。

## ヒラノ

本日5人目のスピーカーはカレン・スエモトさんです。カレンさんも今回が初めての来日です。マサチューセッツ大学ボストン校で心理学とアジア系アメリカ人研究の助教授を務めていらっしゃいます。それでは、カレンさん、お願いします。

## カレン・スエモト（マサチューセッツ大学ボストン校 助教授）

こんにちは。本日ここにいられることを嬉しく、また光栄に思っております。このような機会を与えてくださった国際交流基金日米センター、外務省、全米日系人博物館、そしてロサンゼルスとボストンの日本総領事館のご尽力に感謝いたします。また、私たちのスピーチに耳を傾け、日本人と日系アメリカ人の間の理解を深めるために力を貸そうとしてくださっているご来場の皆さんにも感謝いたします。

私はマサチューセッツ大学ボストン校で心理学とアジア系アメリカ人研究の教員を務めています。臨床心理学者としては、サイコセラピーを行ない、またメンタルヘルスと介入に関する研究を進めるように教育を受けてきました。また、私はアジア系アメリカ人研究をしている者でもあります。例えば日本人、中国人、韓国人は自国にいる限り、自分たちが同じ1つのグループに属していると思うことは少ないのかもしれませんが、米国においてはアジア人という民族にまとめて分類され、法律的、社会的に単一のグループとして扱われています。アジア系アメリカ人研究はしたがって、アジアの祖国を起源とする人々の特異性と多様性、そして共通の経験について、認識と理解を深めることを目的とする学際的分野です。アジア系アメリカ人研究はまた、アジア系アメリカ人学生の個人およびコミュニティ経験に関わる教育を行なうことで、彼らを支援することも目指しています。そして最後に、教育という手段により、アジア系アメリカ人や他のマイノリティ人種の社会正義に積極的に貢献することも目的としています。2つの分野に身を置くことは学术界では珍しいことですが、双方を統合しなければ私が学問の道を選んだ当初の目標が達成できないので、私の経験では正解だったと思っています。

そもそも私が心理学を志したのは、世の中に一石を投じたい、何かをして他の人の役に立ちたいという気持ちがあったからです。私は幼い頃から10代にかけて、心の病と闘う人たちやその家族の苦悩、孤独、無力感といったものを、自分の家族や友達の中に見てきました。そういう経験を他の人たちのために活かせるのではないかと、何らかの形で癒したり勇気付けたりすることができるのではないかと考えたのです。

最初、私はセラピストになってコミュニティでセラピーを行なうことで他の人の役に立てると思っていました。しかし、勉強を進めるうちに、人種や文化の面でマイノリティに属する人々が、異なる価値観や行動基準を持つ多文化と折り合いをつけていたり、人種差別と闘わなくてはいけなかったりという問題に直面しているのを目にするようになりました。これらの問題は心理学では十分に対処できませんでした。実際、人種や文化の違いに配慮が欠けている研究やセラピーは、どんなによくても期待した効果を上げることはなく、最悪な場合には人種や民族上でマイノリティに属する

人々に実害を与えることになっていました。私の中では、自分が選んだ分野は他の人を助けることを目指しているはずなのに、実際には彼らを傷つけているのかもしれないという気持ちが生まれてきました。そこで私は学問の道を志したのです。セラピーを行なうことが他の人を助ける方法の一つであることはわかっていましたが、心理学の分野そのものにある価値観や規範を変えるように努力することで、私はより大きな影響力を持つことができるようになると思ったのでした。

このような次第で、私の現在の仕事の中心は、米国におけるアジア系アメリカ人やその他のマイノリティ人種が直面する心理的な問題について教えることと研究することです。人種、文化、メンタルヘルスの授業を受け持ち、アジア系アメリカ人の心理に焦点を合わせた研究も行っています。ここからは、私の研究の中から、アジア系アメリカ人が直面する心理学的問題の一端を示す事例をご紹介します。

一般的に米国の日系アメリカ人およびアジア系アメリカ人は、仕事、家族の変化、ストレスなどについては、ヨーロッパ系白人アメリカ人と共通するメンタルヘルス上の問題をたくさん抱えています。しかし、アジア系アメリカ人はそれに加えて、文化的および人種的に隅に追いやられていることに関連したメンタルヘルスの問題を抱えています。

アジア系の文化において、健全で社会的にも適合的ないし受容される価値観、期待、行動基準は、ヨーロッパ系アメリカ人の文化とは異なります。重要なのは、どちらが優れているかということではなく、違いやそれが持ちうる意味が理解されているかということです。

例えば、ある大学のカウンセリングセンターと話し合う機会があったのですが、その時、カウンセラーの一人が「アジア系アメリカ人の学生やアジアからの留学生は学業の問題でカウンセリングセンターを訪れても、カウンセリングを1回か2回受けただけで来なくなってしまふことが多い」と言いました。そこで、何が起こったのかを詳しく話してもらったところ、カウンセラーは生物の成績が悪いことを相談に来たアンという若い女子学生の例を挙げました。アンは「本当は生物が好きではないけれど、両親に医者になってほしいと思われているから、真剣に成績を上げたいと思っている」と話したそうです。そこでカウンセラーが「好きな科目は何か」と聞くと、アンは「美術」と答えました。それから、カウンセラーは自分で選択して、自分の興味のあることを追求するように促す質問を続けました。アンは最初、そういった質問をされて滅入っているようでしたが、そのうち、カウンセラーの話におとなしくうなづくようになりました。カウンセラーには、アンは自分の選択をする勇気が出てきたように見えました。しかし、アンは次の約束の時間に現れなかったのです。私と話している間に、そのカウンセラーは「アンは家族に『縛られて』いる、つまり、自分の選択ができないから、家族に不健全に依存しているのだと思った」と言いました。

この話は個人主義と集団主義における文化の違いに関係があります。米国は非常に個人を重んじる国です。自立、個人の選択と自由、個人の成果に価値を置きます。対照的に、多くのアジア文化では、集団が重視され、相互依存、相互義務、人間関係の調和、グループ全体の成果が大切にされます。ど

これらの価値観にも良いところがあります。米国のヘーゼル・ローズ・マーカス、日本の北山忍といった心理学者はこれらの違いについて研究していますが、心理学の専門家でも多くは、そして心理学の専門家でなければほとんどが、文化的世界観の違いを十分に認識していません。他の人も自分と同じように考え、同じものを大切にしていると思ってしまうのです。この傾向はヨーロッパ系アメリカ人の間で特に顕著です。

このような思い込みは、メンタルヘルスの問題に関わる文化的差別だけでなく、アンの経験に見られるように、無意識の内に支援サービスにおいて差別をしてしまうことにもつながります。今日も、アジア系アメリカ人はリーダーシップを取る能力がないと思われていて、それが見えない障害になっているというお話が出ていましたが、それも一つの例です。このような考え方は、グループ内で合意を形成して全体を押し進めていくスタイルのリーダーシップではなく、個人の成果や個人の意思決定を重んじる米国の文化規範で定義されたリーダーシップを元にして生まれるのです。

人種差別は人生の機会やメンタルヘルスに関係するところでも、アジア系アメリカ人に問題を突きつけています。ジョン・ドビディオが行なった研究によると、ほとんどのヨーロッパ系アメリカ人は意識も意図もなくとも人種について偏見を持っているそうです。このような人種的偏見は、たとえ意識も意図もなくとも、アジア系アメリカ人は感じ取り、ストレスや社会的不安といった悪影響をもたらします。人種差別の中にはもっとあからさまで意図的なものもあり、アジア系アメリカ人はそういった差別にも立ち向かっていかなければなりません。

最近、私のクラスの一つで職場での経験を話し合ったことがあったのですが、その時、一人の学生が私と他の学生に向かって「職場の人たちに『犬を食べるから汚い』と言われた」という話をしました。彼は実際に犬を食べたことはないのですが、「このように差別されるのは英語がうまく話せないからだ」と思い、悪口を言われたいですむように、どうすれば早く英語が上達するかを知りたがっていました。彼はこのような人種差別を経験したことでストレスを感じ、母国語を話すのを恥ずかしいと思うようになってしまいました。しかし、彼はこの出来事が人種差別であることをわかっていませんでした。彼は自分が何か間違ったことをしたのだ、それは英語に訛りがあることだと思ったのです。そしてまた彼は、米国で生まれて英語を流暢に話しても、アジア人はそのように言われるのだということにも気がついていませんでした。この学生に対しては、人種差別という名前のものに気づかせ、アジア系アメリカ人に対する人種差別の歴史を理解するように手助けし、同時にこのような人種差別がメンタルヘルスに与える影響を説明しました。そうすることで、彼は自分を責めるのをやめ、自分の言語と文化についてのプライドを保つことができました。

私は教育と研究という仕事を通して、文化の違いと人種差別について、また自分と他人の精神的発達とメンタルヘルス、セラピーサービスについて、アジア系アメリカ人学生、非アジア系アメリカ人学生、そしてセラピストを教育しています。私は学生を指導するにあたっては、文化的な価値、人種についての認識、彼ら自身の経験と期待を形成している人種差別の経験に気がつくように仕向けています。私はまた、ヨーロッパ系と日系という複数の背景を持つアメリカ人や、人種の違う親の養子と

なった韓国系の人たちの人種・民族アイデンティティ、メンタルヘルスを探るプロジェクトなどで、知識の充実をはかっています。

アジア系アメリカ人の学生にこのような教育をするのは、自分たちの抱えている困難は個人の欠点や問題によるのではなく、社会的相互作用の問題なのだと、考え方を切り替えさせるのに役立ちます。また非アジア系アメリカ人の学生は、世間には自分とは異なった世界の見方があることや、他の人の考え方を尊重すれば、例えばビジネス組織でもより豊かな経験、スキル、力が引き出せることに気がつきます。非アジア系アメリカ人に人種差別について教えることも同じように大切です。なぜなら、人種差別が容認されている実情を変えるには、マイノリティ人種だけでなく、すべての人々のコミットメントと行動が必要だからです。そして心理学者になるため勉強している人にとって、人種および文化の違いを認識することは必須です。なぜなら、それがあればクライアントの経験を病的なものとして簡単に片付けるのを防ぐことができますし、各クライアントの人種のおよび民族的な状況と背景に重きを置いてセラピーを行うこともできるからです。

文化の違いと人種差別について学び、理解を深めることで、学生は文化および人種による差別をもたらす社会的相互作用に対して行動を起こす勇気を持ちます。これは私が自分の研究プロジェクトの1つで特に重視しているところです。私はそのプロジェクトで、アジア系アメリカ人が自分自身について、アジア系アメリカ人のコミュニティについて、そして人種差別をはじめとする差別全般に対して行動を起こすことについて抱く気持ちに、教育はどう影響を与えることができるかを探ろうとしています。

さらに、アジア系アメリカ人の経験する人種差別は、特定の民族ではなく、1つの人種として分類されている私たちのグループ全体に向けられていることがよくあります。アジア系アメリカ人という1つの人種カテゴリー全体が差別の対象にされていることがいかに多いかを理解すると、アジア系アメリカ人としてのアイデンティティを築き、協力して差別に立ち向かい、共通する経験に焦点を合わせ、社会的、政治的に団結して変革をもたらすにはどうすればいいかも分かってきます。このようにして、私のクラスからは、アジア系アメリカ人としての政治的アイデンティティを持つようになった学生がたくさん出ています。彼らは、例えば彼らが日系アメリカ人であれば日系アメリカ人としての自らの経験と、カンボジア系アメリカ人、韓国系アメリカ人、中国系アメリカ人、ベトナム系アメリカ人らの経験とを照らし合わせて、互いの結びつきを強めています。このような堅固な関係構築を裏付ける研究として、私は複数の人種を背景に持つ日系アメリカ人について、また彼らが日系アメリカ人コミュニティと他のアジア系アメリカ人コミュニティに所属した経験と排斥された経験について、調査したことがあります。この研究からは、人種についての考え方がコミュニティ内における私たち自身の姿勢に大きく影響することが明確になりました。多様なアジア人グループ間の結びつきについては、私の担当する大学院生の研究でもその一端が示されています。その研究は、カンボジア難民の経験したトラウマが米国で成長した子どもたちにどのような影響を及ぼしたかを取り上げたものでした。この研究は第二次世界大戦時の日系アメリカ人収容所が各世代に及ぼした影響を調べた過去の研究をヒントにしています。教育に関連して、アジア系アメリカ人が組織レベルで団結し、



リーダーシップを示した例としては、日系アメリカ人二世学生強制収容記念基金があります。この基金は、第二次世界大戦中に強制収容された日系アメリカ人の若者を救うため奨学金が与えられたのを記念するために始められたものです。1982年以来、ニューイングランドを中心とする米国の日系アメリカ人2世がボランティアで運営し、東南アジアから難民または移民として米国にやってきた学生が大学に通うのを支援しています。今年度はとりわけ、ハリケーン・カトリーナの被害を受けたベトナム、ラオス、カンボジア系の学生が勉学を続けられるように支援しています。

私が自分の研究で重点を置いているのは、米国においてアジア系アメリカ人が人種や文化が持つ複雑な意味とどのように折り合いをつけているのか、また彼らが自己とコミュニティをより前向きにとらえられるようにするには、どのように手を差し伸べることができるかということです。自分のクラスで見ていると、人種、文化、精神的発達について教えているうちに、学生が、人種や文化が自分自身や他人にどんな個人的・体系的影響を及ぼしているのか気づいていくのがわかります。そして、その認識を理解やスキルのレベルに発展させた学生は、人種差別に反対、さらにはそれを撲滅しようと立ち上がります。もちろん、その中には人種的、文化的に効力のあるサービスを提供することも含まれます。研究者として、私はこれからも、人種や文化が持つ影響についての理解を深めることに貢献し、将来を担う世代には、人種問題や人種差別に挑み、文化的な多様性が持つ豊かな可能性を大切にできるように教えていくことで、より良い世界を作るという子どもの頃からの目標が達成できると信じていくつもりです。有難うございました。

## 【質疑応答】

### ヒラノ

「日系アメリカ人社会への参加や活動が足りないということはありませんか。日系アメリカ人の若い5世や6世に、リーダーシップや活動を奨励するにはどうすればよいでしょうか。」というご質問でした。ではまずドナさん、続いてフランクさんにお答えいただきましょう。

### フジモト・コール

日系アメリカ人の若い世代の指導者を育てるにはどうすればよいでしょうか。日系市民協会（JAACL）などの団体はますます力を増しており、コロラド州デンバーのケリー・ハダさんのように、若い人たちに、組織に参加してそのリーダーシップを引き継ぐよう働きかけています。また、政治活動委員会に参加して活動を始める3世や4世の、日系アメリカ人を初めとするアジア系アメリカ人も多く見られるようになってきました。こうした政治活動委員会では、アジア人コミュニティの問題への関心を高め、政治家の候補者への活動資金を集めています。その他、行政官庁に入る資格のあるアジア人への援助資金を集めているアジア人組織もあります。そこで私たちは、アジア人、特に日系アメリカ人のための政治的影響力を示すパーティーやレセプションを開いています。

### バックレー

残念ながら、もっと多くの人を関与させる必要があるという、このご質問の根拠には同意しかねま

す。彼らが関与していないというご意見には賛成できないのです。現在、日系アメリカ人は、地方自治体、州政府、連邦政府の高官から、ワシントンの閣僚レベルにいたるまで、あらゆるレベルの政治に参加しています。その点をお分かりいただきたいと思います。さらに、裏方として関与している日系アメリカ人も数多く、公選職に立候補している政治家たちから、支援と資金の両面から強く求められています。このように、日系アメリカ人たちは、アメリカの政治的プロセスや社会のあらゆる面に非常に多く関与していると思われます。もちろん、さらに多くの関与も可能でしょうが、こうした優秀な日系アメリカ人たちの、アメリカ人社会への関与レベルには誇りを持ってよいでしょう。

## 武田

実は全部で19通の質問をいただきまして、とても全部は、紹介できないことを予めお断りいたします。また、なるべく似通ったものをまとめてお伺いしたいと思います。まず最初はフランクさんが、ビデオを見せてくださったので、それについての質問が来ています。「広島についてのレポートに感動いたしました。私は愛知万博に来たアメリカ南部のラジオキャスターと原爆について議論し、彼は長崎への原爆投下は必要なかったと言いました。私は広島も同様であると述べました。フランクさんのレポートへの反応とか共感などの反応はいかがでしたか」という質問と、別の方から、「あのビデオを見せて、日本側に有利な情報を流し過ぎているという批判を受けることはありませんか。」との質問がありました。

## バックレー

私の知る限り何の反応もありません。お母様が我々の番組の視聴者であるというクレイグさんとの話によれば、彼女は好意を持ってくれたようです。私の母も、おそらく同じでしょう。正直なところ、ほとんどのアメリカ人がこれは歴史上非常に難しいときであったと考えており、すべての人があの時に立ち返り、適切な判断であったかどうか、戦時下にあのような過激な行動をとるべきであったかどうかもう一度議論することができると思います。アメリカは侵略すべきだったのでしょうか。日本はもっと早く降伏すべきだったのでしょうか。これは終わりのない、どこまでも続く議論です。しかし、ほとんどのアメリカ人は、これを不幸なときとしてとらえている反面、彼らの立場から見れば必要なときであったとも考えているでしょう。彼らに尋ねれば、ほとんどの人があのような兵器が使われたことを恐ろしく感じていると答えるでしょう。ですからああいう報道をし、その瞬間をもう一度よみがえらせて、昔のことを思い出させても、人々がそれを親日的、あるいは反米的な報道だと考えるとは思いません。歴史の中のいつきを報道したものであり、それを視聴者が不快に感じることはないと思います。私は、反米的または親日的な報道をしようとしたわけではなく、あの瞬間の一枚のスナップとして、忘れてはならない、常に心に焼き付けておかねばならないものとして、紹介したかっただけであり、追悼記念日にもう一度思いだすことのできる瞬間だということです。これが私の答えです。

## 武田

有難うございます。次のいくつかの質問は、フィリップ・カン・ゴタンダさんに対してです。「ゴタンダさんの劇は日本においても上演されていますが、日本語で上演され、ほとんどが日本人の観客であるという状況は、アメリカ本国で上演された場合とどのような相違点があると感じられましたか。

また、演出方法において異なる点があると思われるでしょうか。」また、別の質問で、やはりゴタンダさんに、「先生の作品が先生のエスニシティ、あるいは日系アメリカ人であるということで、誤解されたとお感じになった経験や、あるいは思いもよらぬ効果を生じたというようなご経験はありますか」

## ゴタンダ

私が劇団民藝演出による吉原豊司氏翻訳の「マツモト・シスターズ」の日本語版の上演を見たときに、まず気付いたのは、聴衆が同一民族であるということでした。一人残らず日本人なのです。これは、私にとってまったく初めての体験でした。アメリカでは、おそらく聴衆の5%が日系アメリカ人、30%がアジア系アメリカ人、そして残りがアフリカ系アメリカ人、白人、あるいはヒスパニックでしょう。この劇は、遠回しなやり方、はっきり語られることと語られないこと、家族のしがらみ、強制収容所の残存効果など、その文化特有の考え方や交流の仕方を持つ日系アメリカ人家族の中で、日系アメリカ人であることとはどういうことかを描いたものなので、聴衆がこの世界をどれほど知っているかによって、この演劇の理解度や感じ方は違ってきます。これは、アメリカにおける日系アメリカ人を描いた劇を上演する上では当然のことです。劇場体験に対する理解度は様々です。その題材を、何の調整もせず、登場人物の視点から忠実に表現させる、というのが私の手法です。同じ体験をしたこともないような人たちがひとつの題材に取り組み、これと共に成長し、その世界に入っていく必要があります。これは傲慢なことではなく、私たちの物語についての知識を促進し、組み立てていくための戦略なのです。

しかし、日本ではまったく違う体験をしました。すべての聴衆が同時に、同じように劇を体験し、理解するなどということ、これまで味わったことはありませんでした。一人残らず、です。これは初めての体験でした。これまで私は、本当に「納得」し理解するのは聴衆のごく一部である、という環境で劇を上演してきましたが、ここではすべての聴衆が同時に身を乗り出し、声をそろえて笑い、一斉に強い感情を表すのです。私にとって日本での上演体験は、非常に特別かつ啓発的なものとなりました。

自分の演目を上演しようとしたとき何らかの問題に突き当たったことがあるかどうかという、2つめの質問ですが、これに関連したあまり目立たない落とし穴の例を挙げたいと思います。ロサンゼルスにある、国内でも最大級の非常に有名な劇場で仕事をしていたときです。そこで、日系アメリカ人家族を取り上げた「ザ・ウォッシュ」という劇を書きました。この劇場には重役会議のように輪になって座り、劇を批評するという、企業のような雰囲気がありました。そこで出された最大の批判の1つが、登場人物たちが1つの問題に直接向き合っていないというものでした。その部屋の全員がそう考えていたのです。まるで私が、嘘っぱちの、見せかけの家族の関係を書いたかのようでした。国内でも指折りの演劇人である30人ほどの人たちと同席し、彼らに口をそろえて「あなたの書いた登場人物たちはお互いに向き合って話をしていない」、「何が言いたいんだ、遠まわしな言い方をするな」と言われたら、簡単に打ちのめされて、自分に疑問を持ってしまうでしょう。でもそこで私は一歩下がって考え、やはり日系アメリカ人の家族の関係から劇を書くには、その手法で書かなければならないこ

とを悟ったのです。登場人物たちは互いに直接話しをしていませんでした。間接的に意思を伝え合っていたのです。私の作品をお読みになれば、きっと家族の関係が忠実に描かれていると感じて下さることでしょう。これが、自分のいる特別な世界についての知識がない劇場に演目を持ち込むと、自分の視点から相手に演目を習得させ理解させるために、いかに努力し、根本的なところから手助けをしなければならないかという、ひとつの例です。

## 武田

ゴタンダさんにもう一点質問です。「ハリウッド映画の中には日本文化と中国文化を混同してしまっているような映画も多々見られます。スティーブン・スピルバーグの最新作、『Memoirs of a Geisha』...日本語名だと『SAYURI』ですね...とかが見られます。あるいは、アラン・パーカー監督の『愛と哀しみの旅路』。英語だと『Come See the Paradise』ですけれども、これは強制収容所の日系アメリカ人家族の強いきずなや日系二、三世たちの苦悩を正確に描いていると思われませんか。」

## ゴタンダ

どちらのご質問にも手短にお答えしましょう。最初のご質問は、中国と日本を区別できずにひとくくりにしてしまっているハリウッドや一部の映画に関するものです。それがハリウッドなのです。これは、実際には日本と中国の間にたいして重要な違いはないという古い固定観念を引き継いでいるか、あるいは人種偏見のないリベラルな新しい社会では区別を気にする必要はないという、さらに新しい見方かもしれません。私はどちらもいんちきな主張だと思います。しかしまた、金儲けのためでもあると思います。『Memoirs of Geisha』のケースのように、「映画を売る」ためではないかと思っています。プロデューサーは「今まさに世間の注目を集めているこれら的大スターを起用すれば、国内市場でも数多くの国際市場でも、きわめて幅広い聴衆を魅了するだろう」と考えていたのです。2つめの映画は『Come and See the Paradise』です。皆さんがこの映画をご存知かどうかわかりませんが、監督は英国人で、日系アメリカ人強制収容所をストーリーの重要な背景に使っています。話の筋は、デニス・クエイド演じる白人男性がタムリン・トミタ演じる日系人女性と恋に落ちるというラブストーリーです。それが物語の中心になっています。もちろんほとんどの日系人社会はこの映画に憤慨しました。日系強制収容所がテーマであれば、当然日系人男性がいるべきところに、白人男性が登場してくるからです。実は私はそのことでアラン・パーカーと会いました。彼はこの問題について日系人社会から大変な批判が寄せられているため、私に会いたいと電話をしてきたのです。会ってみると、パーカーの話は要するに私に映画制作に参加してほしいということでした。もちろん批判をそらすためです。映画のクレジットと報酬も提示されました。私はこういう政治的な話は断りました。彼が言うには、白人スターを主役に使わなければ資金を出してもらえないというのです。おそらくそうかもしれませんが、最終的には、白人男性と日系人女性を出すことをアラン・パーカーが望んだのだと思います。この映画は成功しませんでした。ここで問題は、日系アメリカ人を描いた映画はごくわずかしかなく、ひとつが失敗すればその先10年はもうお目にかかることはないということです。そして残念なことに、この映画のおかげでそういう状況になってしまいました。

## 武田

フィリップさん、ありがとうございました。次の質問にいきたいと思います。これは、この地域で日本語ボランティアネットワークをされている方からですが、「いわゆる形容詞のついた系何々人と呼ばれる人たちは、マザーランゲージとして、生まれ育った国の言葉か、あるいはその国のその人たちの民族の出身の言葉 例えばこれ、コリアン・アメリカンですと、英語なのか、それとも韓国語なのかという、そういうことだと思のですが、これのどちらを身につけるべきなのか、またはバイリンガルになるのが最善なのかについて個人的な考えを聞かせてください」ということです。カレンさん、分野が多少近いと思うのですが、何かご存じのこと、ありますでしょうか。

## スエモト

質問は2つに分けることができます。1つめは「どちらの言語を選んでいるか」、2つめは「どちらの言語を選ぶべきか」です。まず「どちらの言語を選んでいるか」についてお話ししましょう。それは様々であると思いますし、その度合いはそれぞれの民族性、文化変容、人種差別などの何らかの差別の経験に関わってきます。世代にもよるでしょう。ですから、イントロダクションのお話の中にも出ていましたが、多くの日系アメリカ人、たとえば私たち代表団の大多数は日本語を話しませんし、私たちの間でもそのことについては議論をしました。大きな要因は2つあると思います。まずは、私たちの多くが3世あるいは4世であり、主に日本語を話す文化で育てられる世代からは数世代離れているということです。そして、強制収容所や人種差別の経験によりコミュニティから文化と言語が消えた、もしくは消すように努めたということもあります。こういったことは韓国、ベトナム、カンボジア、中国のコミュニティでも起きています。しかし、それらのコミュニティには多くの移民がいます。例えば、中国からの移民の数ほど日本からの移民がいるわけではありません。ですから、他のコミュニティでは常に一世レベルの言語が持ち込まれているので、言語についてどのような選択をするのかはますます困難になっています。多くの場合、子どもたちは母国語を話して育ちながらも、高校生になると、周囲の文化に適應する必要性を強く感じ、次第に話さなくなり、忘れはじめます。そして「どちらの言語を話すべきか」については、メンタルヘルスの観点からすれば、言葉を手放さないことは文化を手放さないことに関連し、特に1つの人種としてまとめて分類されたグループの中にいる場合は、メンタルヘルスを守ることとなります。ですから、この問題は自尊心の向上、社会不安の低下、その他、より複雑な数々の要素のバランスが絡んできます。しかし、アジアからの移民、移民の家族が言葉を手放さないためには、米国の教育機関と政府が努力をして、私たちがあまり得意でないバイリンガル能力を高めるために、私たちではできないことをやる必要があります。

## 武田

カレンさん、ありがとうございます。次の質問については、クレイグさんに始めていただき、他の方にも追加でお答えいただきましょう。今日のテーマは、職場でした。ということで、「パネリストの方、それぞれの職場、職域において、アジア系以外のマイノリティグループの人たちとの関係は良好であるとお考えですか。とりわけ、アフリカ系アメリカ人の人々との関係は良好でしょうか。改善すべき点があるとすれば、どのようなところだとお考えですか。」

## ウチダ

他の民族グループや人種グループとの関係は良好か、というご質問ですね。答えはイエスです。他の人種や民族グループの人たちとは非常に良好な仕事関係を保っています。特にワシントン DC で司法省の仕事をしていたとき、私はマイノリティの人たちを雇い、私のところで一緒に仕事をするよう勧めました。認めたくはないのですが、率直に言って、司法省ではマイノリティを雇うよう勧めることはほとんどありません。私が200人程度の大きな部署を任されていたとき、いつも必ず、白人だけではなくアフリカ系アメリカ人、ヒスパニック、アジア系アメリカ人などのマイノリティを雇うよう勧めていました。また私と他の人種の人たちとの関係は、全体的に見て大変良好なものでした。ひとつ言わせていただくと、私は今トリニダード・トバゴの警察と仕事をしていますが、トリニダードの人口は約52%がアフリカ系、48%がインド系やパキスタン系の人々です。ですから、他のグループとの関係はおおむね良好といえると思います。

## バックレー

アメリカではあらゆることが人種を背景にして起きるといえます。お聞きになったことがあるかもしれませんが、私たちはアメリカが「人種のるつぼ」であることを誇りにしています。おそらくこの言葉はお聞きになったことがあるでしょう。多くの人種や民族、さまざまな背景や母国を持った人たちを集め、るつぼの中に入れて理屈上融合させ、取り出すと素晴らしい結果が出来上がっています。しかし時々うまく混じらないことがあって、それらはちゃんと火を通し、時間をかけて煮なければならぬのです。それがアメリカというものだと思います。絶えず新しい移民がやってきますし、現在ではラティーノがアメリカへやってくるマイノリティの中で優勢を占めています。そしてアメリカへ来るどの移民も経験するように、差別があり、悪口を言う人がおり、新しい移民集団に罪をなすりつける人たちがいます。イタリア系も、アイルランド系も、日系も、中国系もそれを経験してきました。今ラティーノがそれを経験しています。アフリカ系アメリカ人の経験の仕方は違いますが、誰もが同じような差別を経験しています。

「仕事関係は良好か」という質問については、クレイグさんと同じように、他の人たちとうまくやっているといますし、特に言及のあったアフリカ系アメリカ人の人たちともうまくやっています。私にとってその理由のひとつは、私の出身地が、まさに人種のるつぼのように多様な友人たちのいるところだったからです。他の人たちはこんな多様性にさらされたことがないと思います。つまりそういうことを知らない場所の出身なわけですが、知らないことは誤解のもとです。職場では、今職場の話をしているので申し上げますが、アメリカのほとんどの企業は、そんな誤解がないように、また人々が誤った扱いを受けることがないようにするため積極的に働きかけています。誤った扱いを受けているかって？ええ、受けています。しかしそれは許されないことで、法律に違反しています。私たちはそんなことのないよう努力しています。ご満足のいく答ではないと思いますが、長くなりますので。

## ゴタンダ

手短にお答えしたいと思います。再度申し上げますが、私は劇団で仕事をしており、現在は日系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人の登場する劇を制作しています。互いの文化、民族、人種からみた

考え方を理解するのは非常に難しく、非常に複雑なことだと思います。劇の中で、アフリカ系アメリカ人や日系アメリカ人の登場人物が人種問題について語るシーンでは、何度もじっくり腹を割って話し合わなければなりません。これらは激しやすい問題ですし、部屋には緊張がみなぎりました。人種について率直に語り合うときはいつでもそうです。あるアフリカ系アメリカ人は有名な俳優で、劇をうまく進めたいと考えていましたが、人種に関する問題は、きわめて個人的で、本質的に不信と裏切りの過去を持つデリケートなものです。自分の考えを伝えることが非常に難しくなる時があるのです。同じひとつの状況について各人が違った解釈をして、コミュニケーションが全く取れなくなってしまうことがあって、そういうときは両方が同じものを見、同じものを指差し、同じひとつのことに話しているんだと認識することが、せめてもの相互理解ではなかったかと思います。言い換えると、互いに話し合うということすらまだできていなかったのです。人種・社会関係という基本的な問題について誤解している部分が多すぎました。せいぜい、どちらも同じものを見て、「これが私たちの間にある。それが何かわからないが、私たちはどちらも同時に同じものを見ている」ということくらいしか期待できませんでした。私はアメリカの人種関係について希望が持てないというのではなく、これは難しい問題であり、アメリカという国としてみた場合に、私たちはまだその答を持っていないのだと思っています。

## ヒラノ

先ほど日系人が政治に関わることについての質問がありましたので、シャロン・サントスさんに少しお時間をいただき、ワシントン州の公選議員としての視点からお答えいただこうと思います。シャロンさんは、若いアジア系アメリカ人に政治プロセスに関わりを持つよう奨励していらっしゃることもよく知られています。シャロンさん、ワシントン州議会の議員としてのご自身の経験と、どんなふうにも他のアジア系アメリカ人に政治を志すよう勧められるのか、お話ししてくださいませか。

## シャロン・トミコ・サントス(ワシントン州議会下院議員)

私はワシントン州だけでなく、米国本土で初めての日系アメリカ人女性議員として仕事をしていることを大変誇りに思っています。このような栄誉をいただきましたので、アジア太平洋系アメリカ人や、日系社会の他の人々が私を見て、公職という分野の職業に就くことを考えるような見本、ロール・モデルにならねばならないというプレッシャーを感じています。それが私の置かれた立場だと思っています。多くのパネリストの方々は、自分に与えられたチャンスについて話されました。アートやジャーナリズム、学問など分野は様々であっても、社会に変化をもたらせるようになるためには、ただ自分のスキルや専門知識を使うだけではなく、意思決定のできる立場にいないければ、人々の心や考えを効果的に変えられないというのも、また同様に真実なのです。ですから私はロール・モデルとなって、若い人々が私を見たとき「ああ、彼女は日系の女性で、人の考えや心を変えるため尽力しているんだ。それにすべての選挙区民を代表して公平な意思決定を下す人だ」と思ってもらえるようにしたいといつも自分を励ましています。第2のポイントは簡単に申し上げますと、選挙運動であろうと投票であろうと、あるいは人々をスタッフに雇う場合であろうと、若い人が政治プロセスに関わるよう奨励するには、コミュニティで自分自身が積極的な役割を担うことが必要だということです。私は自分のスタッフの回転率が際立って早いのですが、それは私が特に白人以外の大学を卒業したばかり

の若者を探して議会で働かせているからです。私は、政治プロセスでの不満を共有するという体験と同時に、政治組織のような機関でどうすれば変化を生み出す人になれるかを分からせてあげたいのです。そして、私は自分が雇った立法関係のアシスタントがコロンビア大学のロースクールへ行って学んだり、他の専門家となってグループのスタッフとして働いたりしていることを非常に誇りに思っています。それによって人的ネットワークが広げられ、もっと多くの人を権力ある地位に就かせることができるのです。

### ヒラノ

まだまだお話はつきませんが、このセッションはこれで終わりといいたします。今日ここにお出でくださった皆さんに、もう一度お礼申し上げたいと思います。レセプションで個人的にお会いするのを楽しみにしています。5人のパネリストの方々にもお礼申し上げます。皆さんのプレゼンテーションを聞いて実に誇らしく感じましたし、重要な地位にあり、自分自身が受け継いだものをしっかり心に留めて、後に続く人々に道を開くため素晴らしい仕事をなさっている、こんな代表団の皆さんをご紹介できたことを心から嬉しく思います。プログラムの最初にも申し上げましたが、私たちは重要な指導的立場にある日系人の方々に、日米関係を育てる上でどんな役割を果たせばよいかを理解していただきたいと思っています。今後、他の催しなどで皆さんにお会いできることを楽しみにしています。またもちろん、皆さんにも是非アメリカへお出でいただきたいと思っています。どうも有難うございました。

### 武田

私からは、まずもう一度、皆さんの質問、全部、取り上げられなかったことについておわび申し上げます。ぜひレセプションのほうで質問なさるか、あるいは幾つかの質問に関係するテーマが昨年の報告書に出ておりますので、そちらのほうもごらんください。それから、5人のパネリストの方には、おっしゃりたいことがたくさんあるのに、一人10分以内という時間にまとめてくださって、本当に感謝しております。これだけ様々な活躍をなさっているリーダーの人たちに短くまとめてもらうという事は、本当に大変なことだと思います。有難うございました。







## 付 録

コーディネーター／パネリスト略歴  
日系アメリカ人リーダー訪日招へいプログラム

## コーディネーター／パネリスト略歴

### コーディネーター

#### アイリーン・ヒラノ (IRENE Y. HIRANO) 全米日系人博物館 館長、最高経営責任者

1988年より現職。南カリフォルニア大学にて学士号及び修士号（いずれも公共政策学）を取得。以来、30年以上にわたり、米国全土の多文化コミュニティにおけるNPO運営、コミュニティにおける教育活動、広報活動に携わる。合衆国大統領の任命により、芸術・人間性振興のための大統領諮問委員会委員を務めたほか、ロス・アンジェルス観光局委員長、スミソニアン・アメリカ歴史博物館理事を歴任。現在は、クレスギ財団評議会委員長、フォード財団理事、米国博物館協会副理事長、スミソニアン研究所全米理事、米国トヨタ自動車・多様性アドバイザー委員会委員、株式会社ソデッソ経営評議員を務めている。

#### 武田 興欣 (たけだ おきよし) 青山学院大学国際政治経済学部助教授 (Ph.D.)

専門はアメリカ政治、アメリカ研究、とくにアジア系アメリカ研究。プリンストン大学から政治学博士号を取得。ペンシルベニア大学・ニューヨーク大学・コロンビア大学・日本女子大学で非常勤講師として「アジア系アメリカ人の政治」科目を教えた経験を持つ。現在、日系アメリカ人の研究者とアジア系アメリカ人政治の教科書を執筆中。

### パネリスト

#### フランク・バックレー (FRANK BUCKLEY)

KTLA テレビプライムニュース・アンカー／カリフォルニア州 ロサンゼルス

KTLA プライムニュースの週末アンカーを担当。以前はCNNで特派記者を務め、国内外の各地を回り、神戸や香港、トルコ、アイルランド、イランなどからのレポートを経験。「限りなき自由作戦 (Operation Enduring Freedom)」や、「イラク解放作戦 (Operation Iraqi Freedom)」の際には、実際に航空母艦に搭乗し、ペルシャ湾やアラビア海からレポートを行った。ホワイトハウスやペンタゴンからの報道経験もあり、2004年大統領選挙における民主党の選挙活動、ヒラリー・クリントン氏の連邦上院選、2000年の大統領選挙及びその後の顛末を取材した。母校であるUSC (南カリフォルニア大学) では、歴史学と放送ジャーナリズムを同時専攻。夫人との間に2人の息子を持つ。全米日系人博物館を含む、様々な地域団体においても積極的に活動している。

#### ドナ・フジモト・コール (DONNA FUJIMOTO COLE)

コール・ケミカル・ディストリビューティング社 CEO・社長／テキサス州 ヒューストン

27歳の時、4歳になる娘を連れて夫と離婚。当時手元にあった5千ドルを元にコール・ケミカル・ディストリビューティング社を設立。同社は、今では売上高が5,000万ドルを超えるまでに成長した。同社は、化学薬品や、燃料、合成潤滑油、樹脂製品を、多岐にわたる顧客及び産業に提供している。また、1992年に化学薬品流通企業として初の国際標準化機構 (ISO) の品質証明を取得し、CPI Purchasing Magazine 誌にて全米化学薬品流通企業のトップ100にランクされ、また、長年に亘りヒューストンでの女性経営企業のトップ10に入っている。アジア・太平洋系アメリカ人女性リーダー

シップ協会、ヒューストン日米協会、マイノリティービジネス協議会、女性企業連盟などの理事を務めているほか、アモス・タック・ビジネススクール・マイノリティービジネス経営修士課程修了者の同窓会の共同会長を務めている。1991年にはブッシュ政権の大統領輸出評議会の委員も務めた。マンパワー技術研究所及びアモス・タック・ビジネススクール卒業。

### フィリップ・カン・ゴタンダ (PHILIP KAN GOTANDA)

劇作家・映画監督 / カリフォルニア州 パークレー

アメリカ演劇界をリードする劇作家。彼の作品と主導によって、在米日本人にまつわる物語が米国の主要劇場やヨーロッパで上演されてきた。更には、日本で最も歴史のある現代劇団の一つである劇団民藝によって、同人が脚本を手掛けた「マツモト・シスターズ (Matsumoto Sisters)」が東京の紀伊国屋サザンシアターで上演された。また、「太公望のひとりごと (A Song for a Nisei Fisherman)」や「ウォッシュ (The Wash)」も日本で上演された。また、独立系映画制作者としても高く評価されており、「おいしい人生 (Life Tastes Good)」はサンダンス映画祭で上映されたほか、独立系映画専門チャンネルでも放映されている。ハスティングス・ロースクールを修了したほか、栃木県益子市で陶芸作家の故瀬戸浩氏に師事し陶芸を学んだ。これまでにグッゲンハイム研究奨学金を受けたほか、数々の脚本賞や栄誉を受賞している。

### クレイグ・ウチダ (CRAIG D. UCHIDA, PH.D.)

ジャスティス & セキュリティ・ストラテジー 社長 (刑事司法分野専門家) / ワシントン DC

刑事司法、国土安全保障、公共政策問題を専門とするコンサルティング会社であるジャスティス & セキュリティ・ストラテジー社の創設者にして社長。メリーランド大学教授、連邦司法省司法研究所所長、同省助成金管理局副局長など、25年に亘って刑事司法分野で活躍。ニューヨーク州立大学アルバニー校にて刑法学を終了。また、ニューヨーク州立大学アルバニー校 (刑法) 及び同大学ストニー・ブルック校 (米国史) 両校で、それぞれ修士を取得。なお、日系市民協会ワシントン DC 支部の会長を務めたほか、現在は全米日系記念財団理事会のメンバー及びメリーランド州モンゴメリー郡刑事司法連絡委員会の会員を務めている。

### カレン・スエモト (KAREN L. SUYEMOTO)

マサチューセッツ大学ボストン校助教授 / マサチューセッツ州 ボストン

人種、文化、性別、アイデンティティーの交錯と影響に関する学際的理解と、それらがメンタルヘルスと社会活動にどう関わるかに焦点をおいた授業を展開している。過去の著書やプレゼンテーションは、複数の人種の血をひく日系人や、心理学におけるフェミニズム理論の応用と多文化理解との関係に焦点を当てている。最近の研究課題は、地域社会や教育が、人種上のアイデンティティーやアジア系の若者の社会的地位向上にどう影響を与えるかをテーマとしている。また公認精神分析医であり、マサチューセッツ州大学アマースト校にて臨床心理学の博士号を取得後、カリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部でインターンシップ及びポスドクを修了。ニューイングランド包括的指導センター共同ディレクター、2004年アジア系アメリカ人研究学会プログラム委員長等、地域レベルから全米レベルまで様々な指導的役割を果たしてきた。現在は、アジア系アメリカ人心理学協会の副会長である。

## 日系アメリカ人リーダー訪日招へいプログラム

本シンポジウムは、「日系アメリカ人リーダー訪日招へいプログラム」により訪日した代表団メンバーをパネリストに迎えて開催したものです。

主催：外務省

国際交流基金日米センター

協力：全米日系人博物館

### 日系アメリカ人リーダー訪日招へいプログラムについて

日系人は歴史的に日本と深い関わりを有していますが、世代を経るにつれて日本との関係が希薄化しつつあります。しかし、日米両国間の相互理解を深め、将来にわたり日米関係を強化するためには、人と人の交流を通じたネットワーク構築が必要不可欠であり、ネットワーク構築において、日系アメリカ人の果たしうる役割は大きいと考えられます。また、日系アメリカ人は、アメリカの活力の源である多様性を象徴する一翼を担う存在として米国社会で重要な地位を占めており、日系アメリカ人を理解することはアメリカをより深く理解することにつながります。以上の認識のもと、外務省と国際交流基金日米センターは、全米日系人博物館の協力のもと、社会の第一線で活躍する若い世代の日系人リーダーと日本人との交流の機会を提供しました。

参加者はまず京都に入り、金剛能楽堂でレクチャーを受講した後、清水寺、三十三間堂などを訪れ日本の伝統文化に触れました。翌日、名古屋に移動して、名古屋市役所、米国領事館を表敬し、午後には、公開シンポジウム『日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム』に参加しました。名古屋を離れる前に、トヨタ自動車株式会社の堤工場及びトヨタ会館を見学しました。その後東京では、国会議員、日本経団連、メディアをはじめとする各界の指導者、有識者と率直な意見交換を行いました。これらを通して現代・伝統日本への理解を深めた代表団一行には、長期的な視野にたった日米関係強化のために、具体的な活動を推進していくことが期待されています。

なお、本事業は2000年に外務省によって開始されたもので、国際交流基金日米センターは2003年より共催しています。

### 参加者（パネリスト以外）

- ・シャロン・トミコ・サントス  
ワシントン州下院議員（第37区） 多数党院内幹事 シアトル/ワシントン州
- ・フロイド・シモムラ  
カリフォルニア州人事局事務局長 サクラメント/カリフォルニア州
- ・パトリス・タナカ（広告会社経営）  
CRT / タナカ社（広告会社） 経営者 ニューヨーク/ニューヨーク州

- ・ホセ・ケイイチ・フェンテス  
 マイアミ・デード郡水資源局長  
マイアミ / フロリダ州
  - ・ケリー・ハダ  
 ケリー・ハダ法律事務所 弁護士  
エングルウッド / コロラド州
  - ・アン・ハラカワ  
 ツー・トゥエルブ・アソシエイツ社（グラフィック・デザイン会社）社長  
ニューヨーク / ニューヨーク州
  - ・ロバート・イチカワ  
 コバヤシ、スギタ & ゴウダ法律事務所 弁護士  
ホノルル / ハワイ州
  - ・パトリシア・キナガ  
 ジョーンズ・デイ法律事務所 弁護士  
ロサンゼルス / カリフォルニア州
  - ・エリック・マーティンソン  
 MN キャピタル・パートナーズ社（不動産投資会社）経営  
ホノルル / ハワイ州
  - ・カルビン・マンショウ  
 マンショウ法律事務所 弁護士  
シカゴ / イリノイ州
- [ 引率・団長 ]
- ・アイリーン・ヒラノ  
 全米日系人博物館館長、CEO  
ロサンゼルス / カリフォルニア州



## スケジュール

- 3月11日 米国発 成田経由 京都着
- 3月12日 金剛能楽堂、清水寺、三十三間堂、祇園散策
- 3月13日 京都 名古屋  
名古屋市役所、米国領事館表敬、  
日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム 参加
- 3月14日 トヨタ自動車株式会社堤工場及びトヨタ会館見学 名古屋 東京  
在京米国大使館ズムワルト公使・カンバラ参事官主宰レセプション出席
- 3月15日 外務省、国際交流基金訪問、高円宮妃殿下下接見
- 3月16日 首相官邸視察、河野洋平衆議院議長表敬、  
フォーラム21とのパネルディスカッション参加、伊藤信太郎外務大臣政務官訪問
- 3月17日 グレン・フクシマ氏等在日日系人、在京米国大使館、日本経団連、国会議員訪問
- 3月18日 成田発 米国着

# CGP

The Japan Foundation  
Center for Global Partnership

---

## Public Symposium Report

Japanese American Leadership Delegation

“From Art to Business:

Japanese Americans in the Professional Arena”

## Preface

The Japan Foundation Center for Global Partnership, established in 1991, provides a hub for Japan and the United States to cooperatively contribute to the solution of global critical and urgent issues and to build firm Japan-US relationship through our deepened mutual understanding.

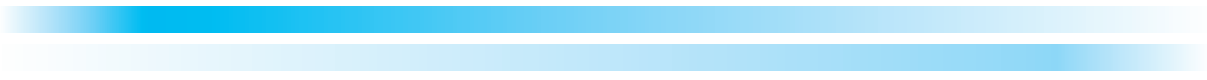
Japan and the U.S. have, indeed, developed good bilateral relations after a continued sector-to-sector exchange and communication process between both sides based on one and the same sense of values of market economy and democracy. Such a desirable relationship would, however, not maintain its stability and durability without steady and persistent efforts or collaborations of their respective citizens to foster mutual understanding. Due to the current tough environment of expanded globalization together with the post 9/11 global security enhancement, under which anti-American or against the US sentiments have received wide media coverage, we are not required emotionally but with our utmost composure to explore how the United States should stand to Japan and what Japan-US relations should appear and mean to the world. Furthermore in order to attain and maintain more intimate stable Japan-US relationship, we have to encourage the exchange of visits and communication between the two nations on various levels. We have thus been planning kinds of projects for the purpose. As part of them, the Japanese Americans-Japanese interaction program does attract the attention of the Center, because what we learn from the stories of “Nikkei” people and a series of discussion with them will help us further understand the United States.

The United States, comprising many different races in its population, owes most of its nation's power to the dynamism that comes from interaction among the respective ethnic groups. In the country, where everyday lives are governed by such mechanism, Japanese Americans have made significant contributions in various arenas by participating in construction of the American society and preparing the basis for their secure community. This may safely be said to be a success story of the whole Nikkei as one ethnic group. In the meantime, the Nikkei people, clearly as history shows, remained very closely related to Japan. They emigrated from Japan in accordance with the national policy to the United States, where they were involved in the war against Japan, their mother country and suffered hardships of being forced to live in internment camps under Executive Presidential Order 9066 (1942). After all the sufferings I might think they have attained their present standing.

Well, when against the backdrop of these historical facts, we, Japanese, are going to consider what Japan-US relationship means to us and what it will be, we will learn much about the history and experience of the Nikkei of the same ancestry as ours. The Nikkei people are in turn asked to know about Japanese history and society. Such intersection of consideration and knowledge is supposed to be an ideal method of Japan-US friendly exchange or a significant process of reflective mutual communication. We have thus planned and carried out a series of Japanese Americans-Japanese communication and exchange programs in the hope that the Nikkei community will play the role of a bridge between Japan and the U.S.

The Japan Foundation Center for Global Partnership invited fifteen Japanese American Leadership





Delegation members who were to stay here from March 11 to 18, 2006, from the areas throughout the U.S. in cooperation with the Ministry of Foreign Affairs. The invitation programs have been carried out by the Ministry since the year of 2000 and co-sponsored by the Center since 2003. The Center planned to organize an open symposium during their stay in collaboration with Japanese American National Museum. It was the fourth meeting titled “From Arts to Business: Japanese Americans in the Professional Arena” co-sponsored by Nagoya International Center which was held at its hall on the day of March 13th, 2006 .

As Nagoya City, where a great number of the Nikkei people from South America are living, has become socially and culturally diversified, Nagoya International Center has developed various projects to promote multicultural co-existence. Supposedly due to such circumstances, many people participated in the symposium which enjoyed a heated question-and-answer session following the presentation of reports by the Delegation members as panelists for the meeting. This booklet is the report documenting discussions during the meeting. I will be very glad if this report tells us the experience and contributions of the Nikkei so well and its text provides a cue for our deepened understanding of such a multi-stratified Japan-US relationship.

Lastly, I would like to express my cordial gratitude to all the attendants to the symposium for your participation and Associate Professor Okiyoshi Takeda of Aoyama Gakuin University for your kind cooperation to supervise and to write an introduction to this book.

**Hideya Taida**

Executive Director

The Japan Foundation Center for Global Partnership

## Preface

I would like to express thanks to all the attendants to Japanese American Leadership Symposium titled “From Arts to Business: Japanese Americans in the Professional Arena”. I am very glad that the symposium was held in Nagoya and attended by so many citizens.

This region centering around Nagoya City forms one of the three major metropolitan areas in rivalry with Tokyo metropolitan area and Osaka metropolitan area. It is developing as a hub area for industry and technology including automobile manufacturing. Recent economic globalization is followed by activated traffic of “man and culture”. We stand in the midst of so called “Era of Great Global Interchange”.

Last year “the 2005 World Exposition, Aichi, Japan”, a citizen participation project, was organized in Nagoya where a great number of visitors from all over the world enjoyed the Expo and got enthusiastic about citizen-to-citizen grassroots exchange activities in and out of the site. A desire to participate in and interest in an international exchange are growing greatly among the citizens in this area.

So, Nagoya International Center, established by the municipality of Nagoya in 1984, has carried out various projects to encourage international interchange on the citizen level. In the meanwhile, the foreigners living in this region have been increasing in number until from the year of 1989, when the revised Immigration Control and Refugee Recognition Act was enforced, the Nikkei people from South America began to settle down here. The Center is now actively being engaged in “the promotion of multicultural coexistence in the region” as one of the main projects.

At such time, we invited from the United States, a multi-racial nation, the delegation of Japanese American who dared to come up against the “glass ceiling”, invisible racial barriers in various arenas ranging from arts to business to secure the active parts to play there. It was very meaningful to hold so timely a symposium attended by such brave compatriots

The stories from delegation members who have heard and themselves seen the hardships experienced by their grandparents while growing up and their own history toward success driven by the sentiments of embitterment and chagrin at their social status of minorities in the respective arenas, together with the varied information regarding communication and friendship activities conducted with people having different cultural backgrounds proved to be very stimulating and interesting to us who are seeking some good policy to promote multicultural coexistence.

The municipality of Nagoya, furthermore, agreed to establish a sister city relationship with Los Angeles in 1959 and has annually since then carried out the programs of exchange of visits such as sending a citizen's goodwill delegation to Los Angeles and sending or hosting of senior high school student delegation to or from Los Angeles. I believe that the co-sponsorship of this symposium together with Japanese American National Museum (Los Angeles) means a new step to promotion of friendship and interchange between both cities.

Well, let me conclude by hoping for further deepened mutual understanding and promotion of exchange between Japan and the United States with organization of this symposium as well as by expressing my highest gratitude to all the concerned of Japan Foundation Center for Global Partnership and Japanese American National Museum for their cooperation and Associate Professor Okiyoshi Takeda of Aoyama Gakuin University for the kindness to serve as the coordinator for this symposium.

**Katsuhisa Suzuki**

Chairperson, Board of Directors  
Nagoya International Center

## Forward

The Japanese American National Museum was pleased to join the Japan Foundation Center for Global Partnership in co-sponsoring the 2006 Symposium. Five members of the 2006 Japanese American Leadership Delegation served as panelists for the Nagoya Symposium. The topic of the Symposium, "From Arts to Business: Japanese Americans in the Professional Arena" enabled the delegates to discuss their experiences within diverse professions in media, business, law, security, and academia.

The 2006 Japanese American Leadership Delegation marks the sixth group of Sansei and Yonsei leaders that has traveled to Japan at the invitation of the Ministry of Foreign Affairs and the Japan Foundation CGP. This year's Delegation numbered fifteen and they traveled to Japan from March 10-18, 2006, visiting Kyoto, Nagoya, and Tokyo.

For three of the panelists, Donna Fujimoto Cole, Karen Suyemoto, and Craig Uchida, it was their first trip to Japan. Most of the other delegates also had little recent experience in Japan. The Delegation came from throughout the United States including Los Angeles, San Francisco, Sacramento, Honolulu, Denver, Seattle, Chicago, Washington, D.C., New York, and for the first time from Miami and Boston.

The Japanese American Leadership Delegation provided an opportunity for Sansei and Yonsei to get to know Japan and to meet and exchange information with Japanese leaders in the government, business, political, non-profit, and cultural sectors. The trip also allowed Japanese leaders to gain a greater understanding about multicultural America through the experiences of diverse Japanese Americans.

The goals of the Delegation program are to improve understanding and strengthen long-term relations between Japanese Americans and Japan, and develop on-going strategies to enhance the role of Japanese Americans in advancing U.S.-Japan relations. Upon their return from Japan, the delegates work with other Japanese American and Japanese leaders to develop and implement specific projects that will ensure strong long-term relations between the U.S. and Japan. In addition to participating in the Symposium, the Delegation had an opportunity to visit with officials of the city of Nagoya, which is a sister city with the city of Los Angeles.

There were several outcomes from the Delegation's trip to Japan. It provided a mechanism for leaders of the Japanese American community in various leadership roles to meet and exchange information with Japan's government, political, educational and business sectors; it established important networks and strengthened communication between Japanese leaders and the Japanese American community; it allowed Japanese leaders an opportunity to begin to understand the changing diversity within the Japanese American community; and it enabled continued dialogue with Japanese leaders who have met with previous Delegations furthering the long-term relationships, which have been established. One of the most important outcomes is the development of a network among Japanese Americans who are living throughout the U.S. and fosters their involvement individually and collectively in strengthening U.S.-



Japan relations.

The Ministry of Foreign Affairs and the Japan Foundation CGP have committed to continue support of the Delegation program and other efforts to build stronger relationships between Japanese Americans and the people of Japan. In fostering these efforts, the Japanese American National Museum has served as the organizer and coordinator of this and other related programs.

The Japanese American National Museum was established in 1985 and opened its doors to the public in 1992. Initially housed in a historic site, the former Nishi Hongwanji Buddhist Temple in Los Angeles Little Tokyo, the National Museum expanded its facilities in 1999 with the opening of a new 85,000 square foot pavilion. In the fourteen years since its public opening, the National Museum has become a world-class institution, recognized among cultural and educational institutions throughout the nation and around the world as a leader in its field.

The National Museum serves more than 500,000 annual onsite visitors through exhibitions, educator workshops, school tours, public programs, and access to its rich collections and resources of the Hirasaki National Resource Center. In addition, approximately 450,000 yearly visits are made to the National Museum's website where visitors have online access to its digitized collections and educational materials. Its 60,000 members and supporters are represented in all 50 states and 16 countries. Its valuable collections contain over 50,000 objects, the largest of its kind in the world, documenting over one hundred years of Japanese American history and culture.

Since its opening, the Japanese American National Museum has been committed to establishing greater linkages between Japanese Americans and the people of Japan. In recent years, the National Museum has taken a leadership role in collaboration with other organizations to encourage younger Nikkei, especially Sansei and Yonsei, to become more knowledgeable about Japan and likewise for Japanese people to become more interested and knowledgeable about the experiences of Nikkei in America.

Recently, the National Museum launched a new global website DISCOVER NIKKEI. This global website, <[www.discovernikkei.org](http://www.discovernikkei.org)> is accessible in four languages: Japanese, English, Spanish, and Portuguese. The main purpose of the Website is to preserve, document, interpret and share the legacy of Nikkei who have migrated and settled throughout the world. The Website serves as a vehicle for promoting cross-cultural exchange and sharing the diverse experiences of Nikkei worldwide. The Community Forum, Bulletin Board, and Community Calendar, instantly connect visitors to Nikkei around the world. The tools and resources on the site encourage visitor participation, interaction, and exploration of historical and contemporary issues and topics that impact our everyday lives.

The Japanese American National Museum appreciates the support of the Ministry of Foreign Affairs in

programs such as the Leadership Delegation. The Japan Foundation Center for Global Partnership has been an important partner in these programs and we are grateful for their continued support in these symposiums and in fostering greater understanding through educational and cultural programs.

My thanks to the staff of the Japanese American National Museum, especially Carol Komatsuka, Vice-President of External Relations, Nancy Araki, Director of Community Relations, and Mitsue Watanabe, Manager of Japanese Public Relations and Marketing, for their hard work in organizing the Delegation Program. A special thank you to Consul Yuko Kaifu, with the office of the Consul General of Japan at Los Angeles, who also traveled with the Delegation and supported every aspect of this important project.

Appreciation and thanks are extended to the staff of the Japan Foundation CGP, including Keiko Morito, Jun Chano and Hideya Taida, for their many contributions to the Symposium and to the Delegation program. It was an honor to serve as co-moderator with Professor Okiyoshi Takeda, a distinguished scholar, who is very knowledgeable about Japanese Americans. His leadership and hard work was critical to the success of the Symposium.

The Japanese American National Museum looks forward to co-sponsoring future programs, which will promote the greater involvement of Japanese Americans in U.S.-Japan relations, and will share important information with people in Japan and in the United States.

**Irene Y. Hirano, President and Chief Executive Officer**  
The Japanese American National Museum



# Contents

## Public Symposium

### Japanese American Leadership Delegation From Art to Business: Japanese Americans in the Professional Arena

1 . Preface..... 57

Hideya Taida, Executive Director  
The Japan Foundation Center for Global Partnership

2 . Preface..... 59

Katsuhisa Suzuki, Chairperson,  
Board of Directors Nagoya International Center

3 . Forward ..... 60

Irene Y.Hirano, President and CEO  
The Japanese American National Museum

4 . Introduction..... 64

Okiyoshi Takeda, Associate Professor, Aoyama Gakuin University  
School of International Politics, Economics, and Communication

5 . Coordinators/Panelists ..... 71

6 . Discussion..... 72

---

Biographical Information of Coordinators/Panelists  
..... 104

Japanese American Leadership Delegation to  
Japan Program ..... 107

## Introduction

This year, 2006, marked the fourth meeting of the Japanese American Leadership Symposium. As one of its coordinators, I was very pleased that it was held for the first time in Nagoya. I was certainly encouraged by the great turnout of people that day, despite its being a weekday afternoon. Some had even traveled from as far away as Tokyo and the Kansai region to be in Nagoya just for this symposium. Moreover, we received more questions from the audience than we could address during the question-and-answer session, which reflected a high level of interest by the listeners toward this meeting.

There are actually many ties connecting Nagoya with Japanese Americans. The Japanese American National Museum, co-sponsor of this symposium, is headquartered in downtown Los Angeles, a sister city of Nagoya. The Japanese American National Museum also held a Meeting of its Board of Trustees and Governors for the first time in Tokyo last May to strengthen its relationship with Japan, and held a symposium called “Japanese Americans and the Future of U.S.–Japan Relations.” (Details of the symposium are available in Japanese on the web page of the Japan Foundation Center for Global Partnership at [http://www.jpf.go.jp/j/cgp\\_j/global/event/050725.html](http://www.jpf.go.jp/j/cgp_j/global/event/050725.html).) After the symposium, a group of Japanese Americans, including U.S. Senator Daniel Inouye, visited the Aichi World Exposition being held in the hills near Nagoya.

Looking back on the history of Japanese Americans, Aichi Prefecture was no stranger to Japanese immigrants. Wakayama, Hiroshima, Yamaguchi, Fukuoka, and Kumamoto prefectures have always been known for their large numbers of emigrants who traveled to America. However, a recent study has shown that many Aichi prefectural residents also immigrated to North America. Tadashi Tsutsui, a high-school teacher in Aichi Prefecture, has been conducting research at the graduate school of Nagoya University and has presented his findings in *The Dream of Making a Fortune at a Stroke: The Immigrants' Footsteps in North America* (Mie University Press, 2003). Tsutsui's detailed analysis of historical records shows that between 1868 and 1925, approximately 3,300 residents emigrated from Aichi Prefecture to America. In particular, many from the Ama/Tsushima regions, dreaming of achieving success in America, immigrated to Sacramento, the state capital in northern California, and its environs, especially to Walnut Grove, to work in agricultural jobs. Japanese Americans are known for forming prefectural associations where they settle. Immigrants from Aichi Prefecture were no exception, and they founded the *Aichi Club* in 1897 (renamed the *Hokubei Aichi Kenjin Kai* in 1912). Moreover, when we think of “immigrants,” we tend to think that they never return to Japan once they leave. But, on the contrary, many immigrants had gone back and forth between Japan and the U.S., while some even ultimately returned to Japan for good. In Tsutsui's book, we also discover that returnees from America started to grow asparagus in Saori Town and Hachikai Village (currently Aisai City) based on what they had learned in America, and also that asparagus canneries were being operated in Saori Town before the war.

## Professional Diversity of Japanese Americans

In this introduction, I would like to explain why the Japanese American Leadership Program chose as its theme, “From Arts to Business: Japanese Americans in the Professional Arena.” The first and foremost point to be made by this theme is the diversity of professions held by Japanese Americans. As I stated at the beginning of the symposium, when we hear the term “Japanese Americans,” we may vaguely conjure a certain image about them. However, how many of us picture Japanese Americans in specific professions?

The Japanese American leaders who took part in the past three symposiums all hailed from various professions. They ran the entire gamut of professions from lawyers, judges, public servants, and scholars, to the staff of a member of the U.S. Congress, state legislators, CEOs of telecommunication companies, reporters, anchorpersons of TV stations, and social workers of NPOs (non-profit organizations). We also welcomed panelists from fields that we usually do not associate with Japanese Americans, including the field of law enforcement. We often watch news about the New York Police Department (NYPD) and the Los Angeles Police Department (LAPD) on television, but most of us never realize that there are Japanese Americans such as Mr. Terry Hara, who was a panelist at the 2005 symposium, among the higher ranks of the LAPD. Mr. Hara was Captain at the time of the visit, but later became the first Japanese American to be promoted to Commander, a post responsible for the training of the entire police department. This year’s panelists included Dr. Craig Uchida, a practicing criminal justice consultant. Since the activities of criminal justice consultants are not widely known in Japan or in America, please refer to the explanation given by Dr. Uchida at the beginning of his speech.

In addition to Dr. Uchida, this year’s panelists included the CEO of a chemical products distributor, a playwright, an anchorperson of a television station in Los Angeles, and a psychologist in Asian American studies, thus offering an even greater reflection of professional diversity. These five panelists were chosen from among the representatives who visited Japan as part of the “Japanese American Leadership Delegation to Japan Program,” on the basis of maintaining a balance among the various professions. Although the ten minutes allotted to each panelist were not nearly enough to do justice to their manifold lives and backgrounds, one of the specific goals of the symposium was to understand the wide array of occupations held by Japanese Americans by having them speak about their own professional experiences.

## The Contributions of Japanese Americans to American Society

The second point to be made by this year’s symposium theme is to understand that Japanese Americans are contributing to American society through the professions they chose. In fact, the Japanese subtitle of the symposium was, “The Contributions of Japanese Americans through Various Professions.” In Japan, people often view Japanese Americans as extensions of Japanese people living in Japan. However, most Japanese Americans are grounded in the U.S., and endeavor to build their careers and make contributions in America. Take, for example, Ms. Sharon Tomiko Santos, who was introduced at the conclusion of the



symposium. Rep. Santos is a member of the Washington State House of Representatives and is working selflessly for her own district in Seattle as well as for the state of Washington.

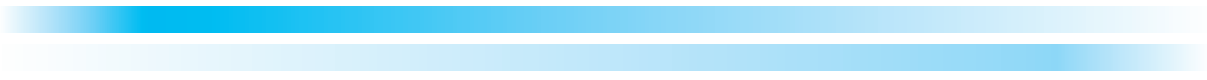
It also goes without saying that with today's globalization of politics, economics, and culture, the activities of Japanese Americans are also moving beyond U.S. borders. As mentioned in his speech, Dr. Uchida works as a criminal justice consultant in Trinidad and Tobago, a country in the Caribbean Sea. Mr. Philip Kan Gotanda's plays are performed not only in Japan and in the U.S., but also in Europe. Moreover, there are many motivated people who work to strengthen U.S.–Japan relations, such as Ms. Irene Hirano, who leads the Japanese American delegation and served as coordinator for the symposium again this year. Seeing Japanese Americans play active roles in the international arena, those who live in Japan tend to overlook the most fundamental nature of the activities of Japanese Americans? their contribution to American society. Thus, this symposium also seeks to examine how Japanese Americans, as essential members of American society, face social issues and try to resolve them.

From this perspective, Mr. Frank Buckley's coverage of atomic-bomb survivors living in the U.S. is particularly noteworthy. As Mr. Buckley mentioned at the symposium, there are many important topics about Japanese Americans and Japan that are not known to the American public due to lack of coverage by the media. As one question from the audience directed to Mr. Gotanda during the symposium pointed out, American mainstream media, including Hollywood movies and TV dramas, continue to depict the Japanese, Japanese Americans, and Asian Americans in general through conventional images and stereotypical values. Mr. Buckley said in his remark that he tried to prevent Japanese Americans and Japan from being ignored on TV, and to guard against the broadcast of distorted images of Japanese Americans and Japan. Therefore, by utilizing his position as a news anchorperson for a TV station, Mr. Buckley's vigilance may be appreciated as his contribution in making American society a better place to live for multiracial and multiethnic groups. Similarly, through her research Dr. Karen Suyemoto aims to understand the psychology of Asian American youths in an analytic framework based not just on Caucasians alone, but in the context of racial discrimination in society. Her efforts may also be considered an effort to improve American society by broadening the understanding of Asian Americans.

### Racial Discriminations and Prejudice against Japanese Americans

The third purpose of this symposium relates to the multiracial and multiethnic side of American society: to examine what it is really like to be a Japanese American living in America today. To understand American society, the issues of race and ethnicity cannot be overlooked. In the comments made by the panelists, we find remarks referring to tangible and intangible forms of discrimination and prejudice, and the problems caused by a lack of understanding toward Japanese Americans.

First of all, there remains the stereotype through which Japanese Americans are identified with



Japanese people living in Japan. This could, at times, bring positive outcomes as illustrated by the experiences of Ms. Donna Fujimoto Cole. For the most part, however, it has a negative impact by failing to acknowledge Japanese Americans as members of American society who are fully capable of speaking English. The experience of Dr. Craig Uchida's being commended for his good English when he was a student as well as when he was teaching indicates the problem facing Japanese Americans: always being treated as foreigners despite having lived in the U.S. for generations.

Secondly, among the Caucasian-dominated mainstream society there is insufficient understanding of the fact that Japanese Americans, and Asian Americans in general, possess distinct cultural backgrounds. An example of this problem can be seen in Mr. Gotanda's experience of being criticized, when he wrote a play on a Japanese American family, for not making his characters in his play talk more directly to one another. Another example can be found in a case mentioned by Dr. Suyemoto. The "fact" that an Asian student stopped visiting a college counseling service after the first or second time can be interpreted in many ways, depending on whether one tries to understand the student's Asian background.

Thirdly, Asian Americans, including Japanese Americans, are still being underrepresented in certain professions. If discrimination did not exist, the percentage of Japanese Americans as well as other Asian Americans in every profession should correspond to their respective percentages of the population. However, as we have learned from statistics presented by the panelists, we are actually far from such equal representation. In certain professions, where there were very few minorities to begin with, this problem of underrepresentation has seen improvement as a result of efforts by minority groups. However, in many professions, Asian Americans are still underrepresented. In fact, as Mr. Buckley has stated, the number of Asian American journalists working in the television industry continues to dwindle. This suggests a serious problem, because it shows that Asian Americans are leaving this profession for some reason or another, and vacancies are not filled by other Asian Americans.

In contemplating this problem, the term "glass ceiling" becomes significant. This term refers to "unseen discrimination" standing in the way of promotions and fair work evaluations, and more specifically to the phenomenon in which women and minorities are not rewarded with higher positions no matter how hard they work. Many Caucasian men in positions of authority prefer to promote people "like themselves" to similar positions, and let this preference subtly influence their standards for promotion or change the standards for promotion from those specified beforehand. Unlike blatant discrimination, the "glass ceiling" is not easily verified. However, many researchers point toward the "glass ceiling" as one of the reasons why there are very few Asian Americans serving as the CEOs and in other managerial positions of large companies.

## Significance of Japanese Americans Speaking about “Leadership”

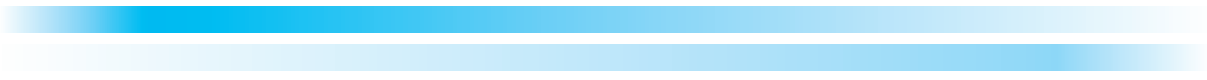
The five panelists of this symposium represent Japanese Americans who have endeavored to succeed in a society wrought with such problems and have become leaders in their respective professions. When they first began their careers, there were far fewer Japanese Americans in their respective fields than there are now. Japanese people in Japan, who enjoy a predominantly mainstream position in society, may not easily fathom the hardships encountered by these Japanese Americans as they built up their careers.

Although our five panelists have achieved successful careers, it does not mean that their successes were laid out in front of them from the beginning. As in the case of Ms. Donna Fujimoto Cole, in which a divorce served as a catalyst for starting up a new business, they were never the fortunate ones who were promised success. It is more than possible that they would not have been as successful, had they taken a slightly different path in their life. Moreover, their successful careers are by no means guaranteed to continue indefinitely. Their leading positions are maintained solely by their painstaking daily efforts.

The fact that there is not really a Japanese equivalent term to the English word “leadership” suggests that exercising leadership may not always be appreciated in Japanese society. Therefore, for those who live in Japan, the format of the symposium, whereby Japanese American “leaders” share their experiences, might seem a little discomfoting. However, we must understand that, unlike in Japan, American society regards leadership positively and considers the exercise of leadership beneficial to both the individual and the group as a whole.

Yet, the significance of Japanese Americans in leadership positions speaking about their experiences is not limited to the fact that leadership is respected in the U.S. It also plays a significant role in resolving the issue of underrepresentation of Japanese Americans mentioned earlier. We often observe that young people with minority backgrounds abandon or become passive about their careers in fields where they feel that not many people of similar backgrounds have succeeded (the same may be said of women in fields dominated by men). That is why minority trailblazers are needed in such fields to widely inform society of their achievements. These trailblazers are entrusted with the roles of inspiring the next generation to go out into society, and are called “role models.” Among the minority groups in America, the need for role models is acutely recognized. Since having just one or two role models is not enough, minority individuals tend to encourage others to increase the number of role models, often by becoming one themselves. This is the context in which Rep. Sharon Tomiko Santos spoke at the conclusion of the question-and-answer session, when she expressed her keen awareness of being a role model as a Japanese American legislator.

Moreover, the concept of “giving back to the community” is widely held in American society, and this is not limited to minorities. Community in this context does not necessarily refer exclusively to geographically defined communities, but also includes the racial or ethnic group to which one belongs.



Therefore, for Japanese Americans, the Japanese American society spread over the wide expanse of the U.S. also constitutes a community. There are various ways for Japanese Americans to give back to this community, and attending meetings and symposiums to share their experience with the audience is one way of giving back. This is because such actions might inspire people in the audience to take action or change their view for the sake of Japanese Americans and other minorities. For the Japanese American panelists, therefore, attending this Leadership Symposium is a way of meeting the expectations of being a role model. Although the audience of the symposium mainly consisted of those living in Japan, many of the panelists have given speeches to students and young audiences in the U.S. before.

### A Story Written Anew

Due to the limited duration of the symposium (half day), many issues were left unanswered, even after the conclusion of the question-and-answer session. One of those issues was the relationship between Japanese Americans and other minorities. The audience asked, for example, whether a collaboration of Japanese Americans with other Asian Americans was possible, and whether labeling different ethnicities under the general term of Asian Americans was a true reflection of actual circumstances. These are just some examples of the questions from the audience that could not be discussed due to time limitations. Coincidentally, they were some of the themes taken up in the past Japanese American Leadership Symposiums. An important topic in this area is the relationship of Japanese Americans with African Americans and Latinos (Hispanics). The last question asked during the question-and-answer session addressed this topic. As the coordinator, I was struck to see the three panelists, in response to the question, differ in their interpretations of whether such relationships are made on good terms or not. We cannot say who gave a correct answer, however, since each opinion addressed different aspects of American society from an individual viewpoint.

In this connection, it should be noted that Japanese American society is becoming increasingly multiracial and multiethnic. As mentioned at the beginning of my remarks, with more mixed marriages taking place between Japanese Americans and other racial and ethnic groups, there are growing numbers of those who are Japanese Americans, as well as being white or African American, for example. It is therefore no coincidence that among our five panelists, two (Frank Buckley and Karen Suyemoto) are Japanese Americans with multiracial backgrounds. And a member of the delegation, Mr. José Keichi Fuentes is a Japanese American as well as a Cuban American. Under these circumstances, Japanese Americans are engaged in active discussions as to what kind of ethnic identity they can share as the Japanese Americans as a whole.

Moreover, although not discussed at the current symposium, differences in the experiences of male and female Japanese Americans are also significant in relation to our current theme of professions and society. This year's Japanese American delegation is comprised of nine men and six women; every year the ratio

---

of men to women in the number of delegates and panelists is balanced, if not perfectly. In Japan, it is not unusual for speakers at symposiums to be predominantly male. However, in meetings held in the U.S., it is common practice to make sure that both genders are equally represented. This year, as was the case in previous years, women made up nearly half of the delegates. This was not only a reflection of the large number of Japanese American women taking active roles in society, but due also to the efforts of the program sponsors to invite more of these active women. On the other hand, had the symposium focused on female perspectives of the women delegates, we might have heard different stories.

In this symposium, we saw a glimpse of the multiplicities and challenges facing Japanese American society today. We hope to focus our subsequent attention on what roles Japanese Americans will play in their careers and local communities, as well as in the U.S. and around the world. The symposium was a fascinating one to the audience; I am sure that it provided a transformative experience for our panelists and the delegates as well. As Mr. Gotanda said in closing his speech, let us invent our new stories. A story is not only told, but also written anew.

Last but not least, I would like to thank: Ms. Irene Hirano for her effective “leadership” on every aspect of the symposium; the five panelists, who, despite their busy schedules, prepared their speeches for the symposium, and Mr. Glen S. Fukushima, Dr. Mariko Takagi-Kitayama, Dr. Yasuko Takezawa, Mr. Tadashi Tsutsui, and Ms. Jane Yamashiro, for their valuable advice on planning the symposium and editing this report.

Okiyoshi Takeda, Associate Professor

Aoyama Gakuin University

School of International Politics, Economics, and Communication



Public Symposium  
Japanese American Leadership Delegation  
“ From Arts to Business:  
Japanese Americans in the Professional Arena ”



**Coordinators:**

**IRENE Y. HIRANO :**

President and CEO, Japanese American National Museum, Los Angeles

**OKIYOSHI TAKEDA :**

Associate professor at School of International Politics,  
Economics and Communication at Aoyama Gakuin University, Tokyo

**Panelists:**

**DONNA FUJIMOTO COLE :**

President, Chief Executive Officer, Cole Chemical

**PHILIP KAN GOTANDA :** Playwright, Filmmaker, Professor

**CRAIG D. UCHIDA, PH.D. :**

President, Justice & Security Strategies, Inc.

**FRANK BUCKLEY :** Co-Ancor, KTLA Prime News

**KAREN L. SUYEMOTO :**

Assistant Professor, Psychology and Asian American Studies,  
University of Massachusetts, Boston



**Date:** March 13, 2006 14:00 ~ 17:30

**Venue:** Nagoya International Center  
Annex Hall

## Discussion

**IRENE Y. HIRANO** ( President and CEO, Japanese American National Museum, Los Angeles )

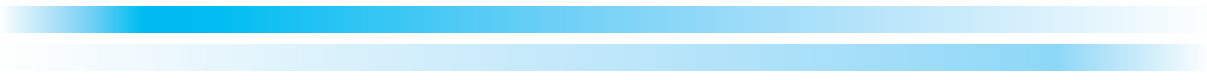
We are pleased to be here and thank you for joining us this afternoon. This is the sixth Leadership Delegation that has traveled to Japan with the support of the Ministry of Foreign Affairs and the Japan Foundation Center for Global Education Partnership. The Japanese National Museum serves as the coordinator of this program, and I have had the pleasure and the honor of accompanying each of the delegations since the program started in the year 2000. The purpose of this program is to bring outstanding Nikkei leaders from throughout the United States and introduce them to Japan and to your leaders in order to create stronger relationships between Japanese Americans and the people of Japan.

This year, the Delegation is comprised of fifteen diverse leaders from ten regions of the United States. For three members, this is their first trip to Japan. The other twelve members have varying degrees of experience in Japan, but all started their trip with limited knowledge about Japan. This is true for most Sansei and Yonsei in the United States today. For many historic reasons, today's younger Nikkei feel little connection to the land of their ancestry.

However, we believe that Japanese Americans can and should play an important bridge in maintaining the strong relationship between the US and Japan. In the United States today, many Japanese Americans hold very significant positions and can share expertise and knowledge with counterparts in Japan. We certainly look forward to this program, creating and maintaining peer relationships, in which we can call upon one another in good times and in challenging times.

We are especially pleased to be here this year in Nagoya. We thank our Nagoya co-sponsors for hosting us. Earlier this morning, the Delegation was warmly welcomed by the Deputy Mayor of Nagoya and other city officials. As you may know, Nagoya is the Sister City to the city of Los Angeles, which is headquarters of the Japanese American National Museum. Each year we have the pleasure of greeting a delegation of leaders from Nagoya who travel to Los Angeles to participate in the Little Tokyo Nisei Week Festival. We extend congratulations to Nagoya and to the Aichi prefecture – on your very successful Aichi World Exposition last year. The Japanese American National Museum brought a delegation of board members totaling nearly 90 people to visit the Expo. It was a wonderful trip and a very, very memorable exposition.

We know that the most important way to gain an appreciation of different cultures is to travel to that country. Certainly programs like the Japanese American Leadership Delegation, which brings people to Japan, needs to be expanded so that more Nikkei can experience the rich history and culture of Japan. Likewise, we hope that more people in Japan will learn about the experiences and the contributions of Japanese Americans within their Nikkei communities and we invite each of you to come to the United States and to visit our respective communities.



On behalf of the Japanese American National Museum, I have had the opportunity to work with many distinguished individuals here in Japan. Our mission is to preserve and share the Japanese American experience, with Americans of all backgrounds and increasingly with a worldwide audience, including South America and Latin America.

For the past six years, the National Museum has implemented an International Nikkei Research Project. Through this project, the National Museum has developed two publications in English and in Japanese. One is an encyclopedia with information on Nikkei in North America and South America. The other is an anthology that compiles the research of many distinguished scholars who have researched the experiences of Nikkei in North America and South America. This publication is called *New Worlds and New Lives*. Both of these include a number of distinguished scholars in Japan as well. Last year, the National Museum launched a new global website called, Discover Nikkei. It provides a wealth of information on the Nikkei experience in North America and South America. There are seventeen institutional and organizational affiliates, which along with the Japanese American National Museum provide access via the internet to information on the Nikkei experience. The website is in four languages, Japanese, English, Portuguese and Spanish. There are brochures in the lobby, and I do hope that you will pick one up following this program.

Shortly, I will introduce the five outstanding members of our panel. Each of the panelists will share with you their personal and their professional experiences as Americans of Japanese ancestry. I wish time would have permitted us to feature the other ten members of our Delegation. You will see from their brief biographies in your program that they have all achieved excellence in their careers and are important leaders in the United States. Following our break, I will ask them to briefly stand.

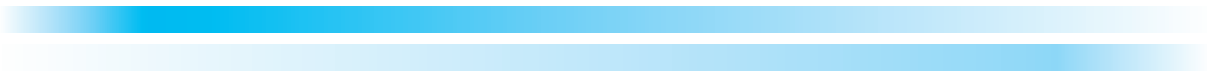
The program this afternoon is an important opportunity for us to learn from each other. The Japanese American National Museum is very pleased to be cosponsors of this symposium along with the Japan Foundation Center for Global Partnership. We look forward to this symposium being the beginning of important collaborations here in Nagoya as well. As we redefine the US-Japan relationship in the future, we know that we will be faced with many conflicts and many challenges. We look to the future in terms of what we as individuals, as leaders and as citizens of the world can contribute to make this a peaceful world that will be much better for future generations.

I am very pleased to turn over the program at this time to our co-moderator, a very distinguished scholar and a good friend, Professor Okiyoshi Takeda.

**[OKIYOSHI TAKEDA](#)** ( Associate professor at School of International Politics, Economics and Communication at Aoyama Gakuin University, Tokyo )

Thank you Irene. I am Oki Takeda and I am teaching at Aoyama Gakuin University.





Let me explain quickly the objectives of the theme of today's symposium as well as the position occupied by Japanese Americans in American society.

When you hear the term, Japanese Americans, what kinds of occupations come immediately to your mind?

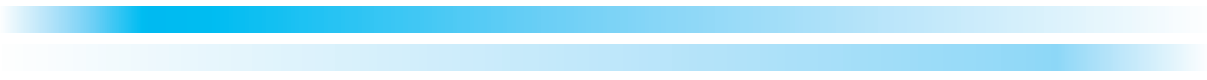
Kristi Yamaguchi, the figure skater, Daniel Inouye of the United States Senate and George Takei, the actor in *Star Trek* are examples of famous personalities in Japan. However, Japanese Americans are in fact active in professions beyond our imagination.

Reports of the last three Japanese American Leadership Symposiums are available and last year's report is kept at the entrance. When I read through them, one of the things that struck my heart was the diversity of professions in which Japanese Americans were active. For example, you may all be aware that there are many prominent Japanese Americans serving in the legal profession as lawyers and judges. However, involved in the same legal profession was actually one of the panelists last year who was a Japanese American serving as a senior officer of LAPD (Los Angeles Police Department). Also, consider Dr. Craig Uchida who will speak to us today. He has developed a career in criminal justice. How many of us were aware of them? We can probably imagine that Japanese Americans work in many different types of companies. However, how many of us were aware of the likes of our first speaker Ms. Donna Fujimoto Cole, a Japanese American woman, who founded and heads a chemical company?

The theme of today's symposium is "From art to Business: Japanese Americans in the Professional Arena". The first objective of the symposium is to confirm the fact that Japanese Americans are contributing to American society by participating in diverse occupations. While this might sound obvious immediately, I think this cannot be forgotten when considering the breadth of today's Japanese American society.

However, participation in diverse professions does not imply that there are no problems. I will present data about the Japanese American population a little later, and as it will show, many of today's panelists feel that Japanese Americans or Asian Americans are underrepresented in their chosen areas or occupations. For some of them, it is not simply a case of underrepresentation; I think there are persons who are practically the first Japanese Americans who had to carve their ways in their chosen fields.

It is sometimes said that American society today has greatly improved on the racial problems of the past. However, the fact is that there still remain many misunderstandings or prejudices about Asian Americans including Japanese Americans. Even though most Japanese Americans were born in America, they are mistaken for Japanese natives and told, "Your English is good." Also, it is often pointed out that in organizations, such as companies, work evaluation standards reflect white male values and activity



patterns. So, minorities including Asian Americans and women are disadvantaged when it comes to promotions. Although the barrier is not set in remarkable form, it is hard to be removed no matter how hard one works; hence the term “glass ceiling” was coined to represent the invisible discrimination.

I think many of the panelists today have faced various problems at their workplaces. However, when I talked to them earlier, I learned that for some of them, being a Japanese American turned out to be an advantage to carry out their jobs. In all cases, the panelists today are proud to be Japanese Americans and have found something worth living for in their chosen professions. The second objective of today's symposium is to hear about the experiences of the panelists in their workplaces so that we can understand what it means to live as a Japanese American in contemporary America.

Before we listen to the panelists, let me present some data about Japanese American population. In Japan, a national census was held in October last year. In the United States, the census is held every 10 years. The 2000 census data is currently available in comprehensive form. In the census, Japanese Americans are categorized into part of Asian Americans, which is a racial category that includes a variety of people from Chinese and Koreans to the Filipinos, Vietnamese and Indians. In 2000, Asian Americans exceeded 10 million and, while there is discrepancy depending on calculation method, they represent about 4% of the total American population.

However, it is rather difficult to give a simple calculation of how many of these are Japanese Americans. This is because, from the 2000 census, people have the option of indicating multiple racial categories as they feel appropriate depending on the origins of their parents and ancestors. They were no longer required to select a single race. As a result, the size of the Japanese American population differs by counting those who selected the Japanese category only, or by including those who selected it along with other races. The number of people who selected the Japanese category alone was about 800,000, which was slightly less than 0.3% of the total American population. The number of people who selected additional racial or ethnic categories was much greater, about 1.15 million, which was exactly 0.4% of the total American population.

As a result of such intermarriage between Japanese Americans and people of other races and ethnicities, the proportion of multiracial and multiethnic Japanese Americans is relatively higher among Asian Americans. They represent 350,000 out of 1.15 million, about 30% of the broadly defined Japanese American group that includes those who selected additional racial or ethnic categories. One of our panelists today, Ms. Karen Suyemoto, conducts research on the psychology of Japanese Americans with multiracial backgrounds.

Amongst the panelists today, we have some Japanese Americans who have multiracial backgrounds. Mr. Frank Buckley is one of them. I think we will hear him speak about that later. Also, this is not a case for

Frank, but sometimes we can't tell if someone is a Japanese American or not by the surname when it is changed due to marriage. Thus, in today's America, there is no correspondence between being a Japanese American and having a Japanese surname. However, that fact by itself shows that Japanese Americans have penetrated American society and produce diversity in population statistics.

The diversity of Japanese Americans can be seen in other aspects, too. As Irene referred to briefly, Japanese Americans, with Sansei and Yonsei at their core, do not always have strong psychological bonds with Japan. There are many Japanese Americans who do not speak any Japanese. In this year's delegation we have some first-time visitors to Japan, despite being in leadership positions with relatively greater opportunities for business travel. On the other hand, we also have people like Mr. Philip Kan Gotanda, who came as an exchange student in the early 1970s and spent a relatively long time living in Japan.

Due to paucity of time, we will not cover this issue directly in today's symposium, but I think that there are some gender differences in experiences of Japanese Americans. To select five panelists from different parts of America and from different professions, while maintaining the gender balance is in fact an extremely difficult task. I would like to thank Ms. Irene Hirano who performed this onerous task.

Well, I would now like the panelists to take turns and speak to us for 10 minutes each. Before each panelist speaks, I would like Irene to give a brief introduction. So, Irene, may I ask you to introduce Ms. Donna Fujimoto Cole?

### **Hirano**

As Professor Takeda said, our first speaker this afternoon will be Donna Fujimoto Cole. This is her first trip to Japan. She is from Houston, Texas and owns one of the largest woman-owned Asian American businesses, and is the President and Chief Executive Officer of Cole Chemical. So I turn it over to Donna.

### **DONNA FUJIMOTO COLE ( President, Chief Executive Officer, Cole Chemical )**

Thank you Irene. I am very pleased and honored to speak to you today, as this is my first trip to Japan and I am blessed to be here to visit your beautiful country and your people. I plan to come back in October to boost your economy with my daughter, so we can find our roots. Many thanks to the Japanese Foreign Ministry, the Japan Foundation Center for Global Partnership and the Japanese American National Museum, as well as the Los Angeles and the Houston Consulate and their personnel.

I am going to give you my personal challenges as a Japanese American woman and my perspective on business in the United States and demographics.

There are only a handful of women that own their own chemical company in the United States. I am not aware of any other Japanese American woman owned chemical distributor in the United States. My



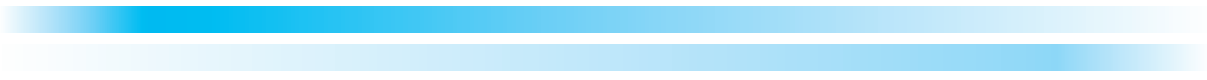
company ranks 44th among the top 100 chemical distributors in the country by CPI Purchasing Magazine.

I began my company with \$5,000, I was 27 years old, I was divorced, with a four year old daughter and with no college degree. Since then, I have started many and acquired other businesses over the last 26 years. I have a map of the United States to give you some perspective of where I live in Houston, Texas. Texas is in the lower mid section of the United States. Texas is the second largest state by land mass behind Alaska. Texas has three of the top 10 largest cities in the United States, with Houston being the largest and the other two cities are Dallas and San Antonio, Texas. The Houston metropolitan area's population is approximately 4 million people. As you can see, Asians are 7%, 31% Anglos, 25% African Americans, and the largest group is the Hispanics with 37%. The port of Houston is the 3rd largest port in the United States. Our trade with Asia in 2004 was a total of 7.1 billion dollars. Houston's trade total imports and exports were \$760 million dollars. Houston is best known for the Chemical and Energy capital as well as space technology as NASA's command center, and we are major players in Bio-Medical Research and Carbon Nano Technology.

There are 6.5 million women-owned businesses in the United States, and their average sales are 1 million. Of that, there are 419,000 Asian American women owned firms in the United States, employing 544,000 people with \$69.7 billion in sales. So, that means more than 1 in 12 Asian and Asian Pacific Islander women in the United States is a business owner. Asian and Asian Pacific women in business are strongly in the service section with 56%, and they have seen a 66% growth over the last 5 years. 18% percent, are in retail. The largest growth by industry over the last 5 years that has been predominately male-owned businesses is in Agriculture, at 13% and it has grown by 80%. Also, transportation, communication and public utility have seen a 75% growth to take up 13% of the total pie. Texas is ranked number 3 in the top 10 states with the most Asian and Pacific Islander women in business, behind California and New York.

In the beginning, I had the unique opportunity to learn about business from my employment at Gold King Chemicals. I learned how to buy and sell chemicals, I did the invoicing, collections, managed our tank car fleet, and handled payables, as well as reconciled the bank statements and handled all of the shipment logistics. So, in 1980, I was asked by my customers such as Exxon, Shell, Monsanto and Dupont if I would start my own business. And for me to do that, their requirement of me was to put assets in the ground, to have a commitment to grow my business, to give back to community, and to hire and do business with other ethnic minority owned businesses.

At times it has been difficult being a Japanese American as well as a woman, trying to succeed in a male dominated industry. This has been a double-edged sword. Sometimes it's good to be Japanese American, sometimes it's not, sometimes it's good to be a woman. I was able to get appointments when I was younger because the buyers wanted to see what I looked like, because there weren't many women in



the chemical industry. Later with the “Quality Movement” and being associated with Japanese quality minded companies the Buyers thought that if I was Japanese American and owned my own business, it must be a quality company, so they should do business with me. But in 1980 when I started my business, I chose not to name my company Fujimoto Chemical. Because there was a lot of Japan-bashing going on at the time, and being divorced I did not want to change my name back to Fujimoto while my four-year old daughter, would have a different last name than mine, bad enough that I got a divorced. In 1979, there was a time when we were planning a joint venture with a Japanese company. I had 24% ownership in a company, and were planning a joint venture and they actually left my name off of the stock distribution list, and I asked why, and they said, “Well, you re a woman and even worse, you are a Japanese American woman. We cannot let you own stock.” So, that was in 1979 and I am sure today it would be different. But, not having a degree in chemistry or being a chemical engineer was also an issue with some of the buyers and engineers that I did business with. I used the chemical dictionary, all kinds of resources, petroleum flow charts, producers directory. I asked people for their expertise and they gave it to me to increase my knowledge which allowed me to buy and sell chemical products to various industries.

Some of the difficulties we had in the beginning were access to capital. As a new company, we didn t have a line of credit at the bank, and I used up our credit with my good name after 2 months, so we were squeezed for cash flow, and I had to take on some partners, so they gave me a working partner because they didn t trust me and 4 months later I had a \$125,000 dollar line of credit from them. I eventually bought them out the first year, and have been on my own since then. Overcoming financial challenges in the beginning and obtaining a bank line of credit to grow the business took 10 years. We also had some non profit organizations in the United States who would help loan money to us based on contract financing with a company like Toyota. We have also financed our receivables to provide acquisition funding. I also remember borrowing money from my mother and my father. Early on, my mother would send me \$20 in the mail, and sometime I would ask for more money to pay my rent while the employees were paid first.

Anyway, we constantly strive to find the right customer and industry mix, so that we are not too dependent on any one customer or one industry. As you know, the downside to having one large customer or one large industry is that at some point things change, and you are going to have to right size to ensure survival. And it is always painful to sell a business, to layoff people, and to slash budgets wherever you can.

We have been helped by the United States government. They are one of the largest buyers of goods and services. The government requires large companies who have a contract over \$500,000 to have a small minority business subcontracting plan. The plan ensures the inclusion of small business, ethnic minorities, women, handicapped and veterans into the quote process and competitively awarding business to meet goals. These goals are usually 5 to 10% of the contract. Many municipalities also have small business and

subcontracting programs to assist small business in the economic cycle and to raise the quality of life.

The consumer marketing companies such as Procter & Gamble, Coca-Cola and Toyota purchase from ethnic minorities and women because they understand the value of diversity and that their supply base should reflect their customer base. So if you want to succeed in the global market place, you need to make sure that you are doing business with a diverse group of suppliers. Many ethnic minorities are found to be very loyal customers.

What has actually helped us be successful over the last 26 years is our 24-hour customer service. We don't have a receptionist that answers the telephone. Our customer service department answers the telephone, so if you want to place an order, you can place an order without having to get switched to a different department or struggle through voice mail options.

New challenges facing us are global buying, extended payment terms, increased pressures to reduce costs, and people moving from one job to another and reverse auctions. Reverse auctions do not allow us to show our value added services.

The products we sell are chemicals, synthetic lubricants, resins, fuel and specialty chemicals. We sell them to 20 industries. The largest is the automotive industry, chemicals, defense, drilling, electric utilities, personal care and refineries. Our sales last year was \$56 million. We did that with 10 employees, and we are very proud of trying to shrink our employee base and getting more out of them and growing our sales through technical efficiencies.

Our business from companies from Japan have included Cargill in Tokyo, as well as CCI Chemicals here in Nagoya and Toyota. With CCI, we actually buy anti-freeze engine coolant from them. Toyota is one of our top 10 customers, and we supply 4 of their plants in the United States. We also have customers like Exxon Mobil, Procter & Gamble and Lockheed.

We also look forward to challenges of the global economy. As we see our services being needed more in the future to provide products with solutions for logistics, financing, IT services for our customers who are going global, always the challenge is employee training, retention and hiring. The longer we are in business, the more opportunities have come our way to add more products and services, but we have to consider the risk management which plays an important part in our minds today.

So, I just want to say thank you very much for your time and I look forward to your questions.

## **Hirano**

Our next speaker will be Philip Kan Gotanda. He is a playwright, a filmmaker, a professor. He is from

---

northern California, Berkeley, and most recently, his play, “Sisters Matsumoto” was presented in Tokyo. I would like to turn the mike over to Philip Kan Gotanda.

### **PHILIP KAN GOTANDA** ( Playwright, Filmmaker, Professor )

Before I begin, I would like to thank the Japan Foundation’s Center for Global Partnership, Japan’s Ministry of Foreign Affairs, the Japanese American National Museum, the Nagoya International Center, and the Consulate General’s Office of Japan in Los Angeles, the Consulate General’s Office in San Francisco, all for supporting this opportunity for my colleagues and me to share our stories with you.

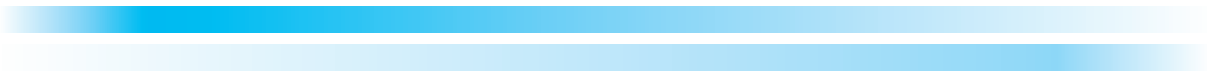
I am a Sansei, born and raised in California. My grandparents came from Hiroshima. My maternal grandfather – so the story goes – drew straws with the rest of the young men in his village, and as he drew the short one, he did not have to go and fight in the Russo-Japanese War. He decided to try his luck in America. He worked in the railroads in the Midwest of the country, which he would only describe as “very, very, very cold”, and ended up settling in the Central Valley of California in a town of Stockton.

My paternal grandfather settled in the Hawaiian Islands on the island of Kauai, out in the *inaka*. And if you can imagine Kauai in the early 1900s, then you just know how *inaka* that was. My father was one of thirteen brothers and sisters, and grew up net fishing, hunting mountain goat, wild boar. With the support of siblings, he studied on the mainland to become a medical doctor.

My father, upon graduation from med school came to the west coast and chose Stockton, California, to practice as there were many Japanese and few Japanese doctors. He met my mother, the daughter of a now well-to-do Issei businessman, and they married. However, as they were beginning their lives together, the War broke out and they, along with the entire Japanese American community of Stockton were shipped to Rohwer, Arkansas and interned there. There they lived for the next 3 years, my father serving as a camp doctor.

Upon their release at the end of the war, my parents returned to the west coast, and it was here, after the war, after the Camps, in Stockton, California that I was born and raised along with my two brothers. I grew up in the 50s and 60s in a predominately white neighborhood and went to predominantly white schools.

To give you a sense of the political and social times, the word, Asian American had yet to be invented. The internment camps were not talked about in the Japanese American households. In history books, the internment camps were either one line or not mentioned at all, and to write a story from the Japanese American perspective at that time wasn’t thinkable. As a Sansei writer, writing about the families, the normal course would be to write a story with white characters.



The late 1960s were a time of upheaval in America. There was civil unrest in the country and on college campuses, anti-war demonstrations, the Civil Rights Movement. It was at this time that young Asian Americans on college campuses, taking the lead from Black Americans began to claim their true histories and define their identities in America. The term, Asian American, was coined by a young Japanese American professor, Yuji Ichioka. Young Japanese Americans began to ask about the internment camps, question laws and institutions that discriminated against them. These were tumultuous times and it was into this that I entered college.

At first, I wasn't sure about this Asian American ideology. It seemed extremely radical – all this talk about yellow power and racism. And it was making it impossible for me to attend classes as everyone was on strike. So when the opportunity arose for me to go on an exchange program to Japan, I said “yes”.

In 1970, I made my very first trip to Japan. Perhaps returning to the “homeland” would give me answers to these confusing times in America. Was I Japanese? Was I Japanese American? And what the hell was this new thing called “Asian American”? This was going to be my “Roots” trip.

Soon after I arrived in Tokyo to go to Kokusai Kiristo-Kyo Daigaku, it took only a short time of numerous cultural faux pas to realize that I was anything but Japanese and that I was never going to fit in. However as time passed, I became interested in Japanese culture, particularly pottery. I left to go live and work in the village of Mashiko, a pottery village north of Tokyo in Tochigi-ken. I lived right next door to the national living treasure, Mr. Shoji Hamada. His house was a magnificent restored traditional farmhouse. Mine was a little shack with torn shoji that I covered with paper bags and scotch tape.

During the early part of my stay, my teacher, Mr. Hiroshi Seto, approached me one day laughing. I should point out at this time Japanese Americans were still rather uncommon in Japan. My teacher said that he'd been to the village and people had asked about me. They said that I looked Japanese, but my gestures were awkward and that when I spoke, my Nihongo was very strange. They thought I was retarded.

After about a year living in Mashiko, I'd begun to feel comfortable. My Japanese was good enough to get by without being noticed. My gestures were contained and appropriate, and even my dreams now were in Japanese. I began to feel like I belonged. It was at this time that I would have an experience that would change the course of my life.

I had to go to Tokyo on business. I took the train in and as I was coming out of the station, I was confronted by a sea of faces, and they all looked like me. It was overwhelming and disorienting. I looked off to the left and saw a row of Sony televisions with a baseball game on, and all the baseball players looked like me. I looked up and saw a huge billboard with a movie star smoking a cigarette who looked





like me. The traffic cop, the street worker, the sales clerk, everyone was like me.

And as I was engulfed in this sea of Japanese people, I began to feel light. I could feel a huge weight lifting off my shoulders. I began to move effortlessly with the crowd. I was being buoyed along by this world where everyone and everything reflected who I was, said “yes” to me, confirmed who I was.

I wasn't having this internal dialogue continually denigrating myself, “How come I didn't have blond hair, or blue eyes like everyone? Why couldn't I be white like everybody else in the “normal” world?”

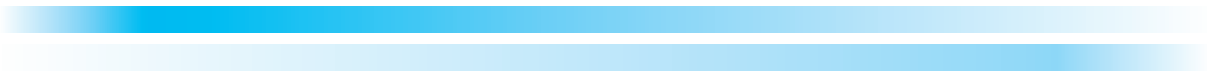
Here, for the first time, I was experiencing the wonderful freedom of living in a world where everything you are is reinforced by the world around you. The color of your hair, the shape of your eyes, heroes, movie stars – I was normal, not the foreign other. I was authentic, a member of the larger group. It was blissful, effortless, anonymity of the most wondrous kind, I belonged.

I realized what this heaviness was that had lifted off of me. It was the psychological burden of living everyday of my life with racism: where every encounter, exchange, longing, desire, was affected by the aspect of race. And now, here in Japan, I had been afforded a glimpse of what it was to be one of the majority, the dominant culture, to live in the center rather than the margins.

Of course, soon after, I realized that I wasn't truly Japanese, and though I could live here comfortably as an expatriate, that for me my destiny lay back in America. I would return to my life there and investigate what the Japanese American story really was. I soon became active in the Asian American and Japanese American Movements. And I began my career as an interpreter of Japanese American stories in theater and later, film.

I worked initially with fledgling Asian American theatres that welcomed my Japanese American stories. Soon this would expand to mainstream theaters around the country, as well as to London, Tokyo, and Canada. I as a Japanese American could write from my own personal history. I could write about and through Japanese Americans, and more broadly and inclusively all Asian American themes, where Chinese, Filipino, Korean, South East Asian, South Asian, multi-racial and multi-cultural Asian Americans could all participate in the American story with equal voice and authenticity.

About 5 years ago, I took my first trip back to Japan in over 30 years. This time it wasn't about discovering who I was, that I already knew. I didn't want any answers from Japan, those questions had been answered. Rather, it was about going to a country where, though I was still a foreigner, I felt a special connection. This is where my grandparents and all my ancestors came from. This is where my mother would always point with extraordinary pride. This is where so much of who I am, at my deepest core, has come from and is part of.



Now, as an established Japanese American artist, I want to learn more about my relationship to Japan. Now I want to share what I have learned as a Sansei living in a highly racialized, heterogeneous society with my Japanese friends. I want Japanese to share with me their stories of social and cultural change. And most importantly, I want to invent new stories that are about us, together. How we can join and work as two peoples who share a special kinship. Let us together, invent these new stories.

Thank you for listening.

## **Hirano**

Our next speaker is from Washington, DC. This is his first trip to Japan. Dr. Craig Uchida is a specialist in Criminal Justice and Homeland Security. He is the president of his own company and will share with us this afternoon his experiences. Craig?

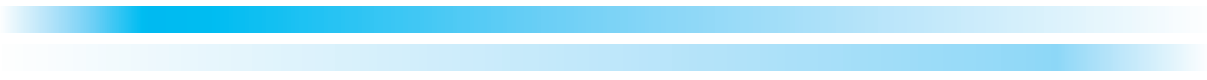
## **CRAIG D. UCHIDA ( President, Justice & Security Strategies, Inc. )**

Thank you Irene. Thank you also Professor Takeda. It's a real pleasure to be here today, and I really thank you all for being here and for listening to what we have to say today. I also would like to thank the Japan Foundations Center for Global Partnership, also the Ministry of Foreign Affairs, the Japanese American National Museum, and also the Consul General's Office in Los Angeles for hosting all of us here today, and I thank my colleagues over here too for paying attention to all we have to say.

Today I have been asked to talk about my professional career, the challenges that I faced in developing and building that career, and my perspectives on race and ethnicity in both law enforcement and in homeland security, so I will try to cover all of those in about eight minutes. First of all, let me explain that I am the President and founder of Justice & Security Strategies, a consulting firm that works with law enforcement, criminal justice agencies, homeland security agencies and public policy makers. I'm a criminologist by training and education, but the big question is: "What does all of that actually mean? What does it mean to be a criminologist? What does it mean to work with criminal justice agencies?" And by the way, where are you from?

In America, we are often defined by what we do and what we look like, because a lot of Caucasian Americans want to know all those things, and there is a lot of stereotyping that goes along with all of those questions. So, part of what I will try to answer are those stereotypes and also give you answers about what I do, and who I am.

The first question about, "What does criminal justice consultant do"? – cannot be answered simply. I was talking with a translator earlier today, and she said, "criminal justice", what does that mean in America? And she said to me that it looks like criminal justice has a broader meaning in America than in Japan, and I agree with that. Apparently criminal justice here simply relates to the law and to the police

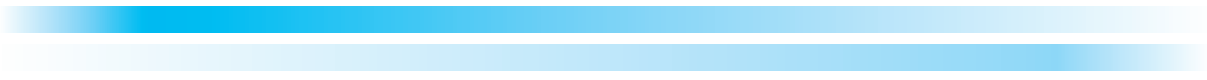


and the courts. In America, criminal justice is much broader in that it includes the police, it includes the prosecutors, it includes the courts, but it also includes prisons, jails, people who are incarcerated, victims of crime, and in my profession, it also extends to why crimes are being committed, and who is committing them. So, when I talk about criminal justice and criminology, it is a much broader understanding than what appears here in Japan.

But, what do I do? I still haven't answered that question. What do I do? I specifically work with police agencies in the United States and abroad. Right now for example, I am working with the Republic of Trinidad & Tobago, which is a small island nation in the Caribbean, and in that country, I have revised the police department's training curriculum, and right now I am working on improving the way in which they investigate homicides. They have a very large homicide rate and have a very low rate of actually making arrests for those homicides. I also work in a number of agencies in the United States, in fact I've worked with about 35 police agencies over the last 8 years, helping them manage better, giving them answers about what works, and what doesn't work.

The second question which I asked earlier that people always ask me, "Where are you from"? And I think that is a common question to ask of Japanese and Asian Americans because the underlying assumption is that we're from a foreign country. I think all of us have experienced that question of "Where are you from"? I usually answer that I am from Washington, DC or that I'm from Southern California, where I was born and raised. And then people look at me kind of funny and say, "Well that's not what I meant". And of course, I knew that but I just wanted to "pull their chain" a little bit. And they obviously expect to hear that I am from an Asian nation. And what they really want to know is, where are we from, what are you? And I end up telling them that I am a third generation Japanese American.

Japanese Americans overall are rarely found in the field of criminal justice or criminology. Last week I – I am a member of the American Society of Criminology, which is the largest membership organization in the country that keeps track of all criminal justice types and professionals and so forth. This society has about 3,800 members across the country, and of those 1,400 are students. So, I was going through the directory to see how many Japanese American surnames there were. As Professor Takeda mentioned earlier too, you can't always identify Japanese Americans just by their surnames, though, even this is kind of a small window to look at. Nonetheless, I scrolled down through every single name in the directory, and I counted up a small handful of us literally. There are 7 Japanese Americans with Doctorates in criminal justice and criminology, and there are 29 graduate students, with Japanese surnames. Thirteen of those are actually from Japan, so there are even less Japanese Americans studying criminology. So, I can honestly say that I am the only Japanese American who has studied policing in large and small agencies across the United States. I am the only one, and that really startled me that I am such a minority among minorities. But being a minority has not really hindered me much in my career. I have worked in a number of different agencies and organizations. I was professor of criminology at the University of Maryland; I



was a Project Director at a Research “think-tank” in Washington D.C., and I was the Director of Research and a senior executive in two separate agencies in the United States Department of Justice as well. Right now in addition to my private business, I currently teach policing courses at the George Mason University, which is in Virginia, and I also teach homeland security at the US Naval Post Graduate School in Monterey, California. Over the last 25 years in my career, I’ve been able to get grants and contracts. I have written numerous articles in journals, I have edited two books, and in general, run a small company.

Have there been obstacles in all of this? I suppose there have, but frankly you can’t really tell whether those obstacles, at least for me, were race or ethnicity-based. If they were, I think that I can say that I’ve worked through those obstacles, using what I can consider using traditional Japanese values of hard work and perseverance, and in fact I really believe that the qualities that my parents gave me with respect to perseverance go a long way in the kind of work that I do. There are a couple of examples that I wanted to mention about stereotypes and what I perceive to be forms of racism. They are subtle and they are not always noticed, but they are there and as Philip mentioned, they are there. You feel them all the time. One example was when I was in graduate school, and I was in a seminar in New York on Long Island. I was studying American History, and one of my degrees is in American History, and one of my professors surprised me and he was surprised that I spoke English very well. He also commented that I dress like such a “Westerner”, and I actually couldn’t figure out what he was talking about, but it dawned on me that I was wearing jeans and a plaid shirt and then I smoked cigarettes. This also happened when I was teaching at the University of Maryland, where students were very grateful that I spoke English as well as I did.

Another more blatant example of what I call racial “discomfort” was when I walked into a restaurant in Alabama. Alabama is in the deep south. It has been known for its segregation policies towards African Americans. So, I was in a restaurant with two friends of mine, both of whom were Caucasian police officers. When we walk into the restaurant, I could immediately see a hundred pair of eyes just looking right at me. Clearly, I was the only non-white person in the room, no question about it. And I remember feeling very uncomfortable with this, because you are walking towards your booth, which happened to be at the rear of the restaurant I might add. At the same time, I’m with my friends, and you don’t want to make a scene. So, I didn’t ask them, I didn’t ask what they were looking at, and they certainly didn’t ask me who I was, and what I was doing there. And I stayed and we ate lunch, and it was fine. I also think that it was fortuitous that I was with two police officers who were wearing uniforms.

Let me turn quickly to racism and ethnicity as in issue of law enforcement and in homeland security. In law enforcement, police are often accused of engaging in racist or discriminatory policies. In Los Angeles, New York or other police agencies, officers are accused of making arrests and stopping people and doing things based on race. Sometimes that does happen. In the research that I’ve done and that my colleagues have done, however, you can’t really determine whether they make decisions based on race or

not. It is very, very difficult to find, and it's very subtle, and you never find it going on when you do research studies. You do find it though and we have found it in terms of racial profiling. I am not sure if you are familiar with that term, it is also referring to "driving while black", "driving while brown", I'm not sure if it's "driving while Asian" necessarily, but police in New Jersey and other jurisdictions have been shown to discriminate based on race; that is, they have stopped people because they are black, because they are Hispanic, because they are Asian. These practices for the most part have been remedied; that is the US Department of Justice has levied these orders upon them to change their practices and police departments have done so. The LAPD is under what is called as a "consent decree" because of their practices, so the Federal government has applied certain standards that these agencies must follow.

Lastly, in the area of homeland security, one of the concerns that a number of us had in the Japanese American community after the 9/11 attacks, was that Arab Americans, Muslims and Sikhs would be targeted as terrorists. Many of us were concerned about that because of the internment and because of the practices and problems that we had come across in the 1940s. So, I was happy to say that many of us stood with Arab Americans, Muslims and Sikhs in fighting against the notion of discrimination against those groups. I think it also helped that people like Norman Mineta, who is the Secretary of Transportation, stood up and also said, "No, this can't happen. It didn't happen to the degree the internment did for Japanese Americans, but there is still some racial discrimination against those groups. One of the things that I just want to say is that race and ethnicity certainly play roles in defining who we are, but it has not stopped us from leading successful and happy lives. Racism is unsettling and uncomfortable at times, but I think that we have overcome a lot of those problems and have moved ahead and ignored those petty injustices that have gone on in American Society.

I thank you for listening, and I look forward to your questions later today.

## **Hirano**

Our next speaker will be Frank Buckley, he is a familiar face in Los Angeles as the co-anchor for one of our local television stations. He was formally with CNN, so is also known to a national audience. At this time, I would like to call upon Frank Buckley.

## **FRANK BUCKLEY ( Co-Anchor, KTLA Prime News )**

Thanks Irene. As you heard of my name is Frank Buckley, you may not know this, but this is not exactly a traditional Japanese name. I don't exactly look like a Japanese person, but I am proudly half-Japanese.

My *oka-san* has frequently reminded me of this by saying: *Anata no karada ni wa Nihonjin no chi ga nagare-teru no yo. Wasure nai de ne!* (There is Japanese blood running in your body, don't forget about that!) Still, most people haven't met my mother, and of many people I work with or who see me on TV are

quite surprised when they learn that I am half-Japanese.

In fact, I was surprised that I was only half-Japanese when I was two or three years old. We were living in Japan at the time, and I don't know if children still do this or not, but when I was a little boy, when children saw Americans or Westerners, they would point and say "*Gaijin-da*"! "*Gaijin-da*"! (Foreigner! Foreigner!) So, when I saw a foreigner, I said "*Gaijin-da*"! "*Gaijin-da*"! And that's when my parents told me, "You are *gaijin*"! so I have always had this part of me that is very Japanese, and this other part of me that is very American.

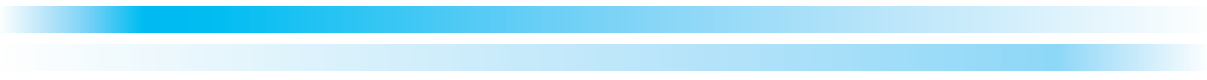
As Irene has said, I am currently a TV news anchor and a reporter for KTLA-TV, which is Channel 5 in Los Angeles. Until June of last year, I was a CNN correspondent. Before that I worked as a TV reporter at another station in Los Angeles. I've also worked in North Carolina and in Palm Springs.

Many TV viewers in Los Angeles had not idea that I was half Japanese until I went to Kobe to cover the earthquake and I began speaking in Japanese. I learned Japanese when I was two years old, when we lived in Yokohama, so the little Japanese that I do speak today is that of a little boy, not sophisticated at all. "*Kodomoppoi Nihongo desu*". But, that "*kodomoppoi* (childish) *Nihongo* (Japanese language)" was enough to get the job done in Kobe, and that was something that my mother and father were very both proud of, proud of the fact that their son was able to use Japanese in his profession.

It was also something that caught the attention of many Japanese American viewers in Los Angeles and it helped me to make a connection with them. I think that it was a point of pride for Japanese American viewers and for Japanese viewers that one of their own was speaking Japanese in our coverage of that big story. Many of them didn't know that I was "one of THEM". So, it also helped me to make a connection with the Japanese and Japanese American community in Los Angeles.

It also helped me to make a connection with other "people of color", as some people put it in America. I think that Asian Americans who originally from other Asian countries, Latinos, African Americans, all appreciate the fact that while my name is BUCKLEY, there is more to my ethnic heritage that perhaps at least gives me some insight into what it feels like to be part of a minority population in America. I can't say that I know what it feels like to be a black American or what it feels like to be a Latino, or to be a Vietnamese immigrant, but I do know what it feels like to be different, and I think that makes me more sensitive to minority populations and some of the issues that we face.

Being a Japanese American has also helped me to find work. In the radio and television industries, and in print journalism, companies in America are in the pressure to diversify. They don't want companies to be all white, or all anything. There is a constant attempt to hire people that reflect the make-up of our communities. If you have many African American viewers, you should have a proportionate number of



African American reporters and anchors on your television station. In Southern California we have many Asian Americans and Japanese Americans, and I believe it was helpful when I tried to get hired at a television station in Los Angeles that I was Japanese American. Once I was hired, it was my responsibility to prove that the boss made the right choice.

But, the truth is that the number of Asian American males and specifically Japanese American males on TV in America is lower than it should be. A 2002 study by the Annenberg School at USC found only 20 Asian American males on the air in the nation's 25 largest television markets. By comparison, 85 Asian American females were on the air on those markets. Japanese American men are among those 20 males. They include David Ono, an anchor at KABC-TV. Rob Fukuzaki is a sports anchor at that TV station. One of my college classmates, Gordon Tokumatsu is a reporter at KNBC-TV.


Still, the profession of broadcast journalism is behind in terms of hiring Japanese Americans, and more generally, Asian Americans. A recent survey by the Radio and Television News Directors Association revealed a decline of Asian Pacific American journalists as they described them. In 2000, 3% of the TV news workforce in America was Asian American. In 2004, that number dropped to 2.2%. In 2005, the number was down to 1.9%. Even more disturbing is the percentage of Asian Americans in management. According to that RTNDA survey, 88% of TV news directors in America are Caucasian. Only 1.3% are Asian American. In radio, the percentage is alarming. 0% of the news directors are Asian American.

Why is this disturbing? Well, young people often get their cues from what they see on TV or what they hear on the radio. If we have strong role models on the air, it can have a positive effect on younger Asian Americans and Japanese Americans.

Also, being represented in the newsroom gives you a better chance of having the story of your particular ethnic group told correctly. As Janice Gin, the assistant news director at KTVU-TV in Oakland put it, "People in management can make a story live or die."

She goes on to say, "That's why it is important that we really push, not just to get people in the pipeline or people in our business, but we get them to stay and to aspire to positions of power and responsibility." That way, we can help to insure that the community's stories are told. And that is one of the obligations I feel as an American of Japanese descent.

I have been able to use my position as a news anchor at KTLA-TV in Los Angeles, and earlier as a news correspondent at CNN to tell important stories about Japanese and Japanese Americans that might not otherwise make the news. Also, I've been able to make sure Japanese people are presented in a fair and accurate light.



I am a gatekeeper of information, and I make sure that all the stories on my watch are accurate and fair, but I have a special insight into the Japanese American story and into the Japanese story, and I do my best to make sure that they are presented properly.

And on that note, I would like to share with you one story I did last summer on my television station, KTLA-TV. In August, most television stations in America run 20 seconds or so of video of Hiroshima. We show people remembering the horrible events of the bombing of Hiroshima and Nagasaki. Then, it s on to the next story. Few people actually “feel” the story.

Last summer I was introduced to a Japanese man who survived Hiroshima and I realized it was a great opportunity to tell a “human” story that people could relate to. I arranged to interview this man and because I am the anchor of the newscast, I was able to make sure the story aired.

This is the influence I can wield in my profession and it is a power that I take very seriously. One has to be responsible with it, but when used properly, it can help to humanize stories, so that our viewers have a better understanding of the world around them, and of people who may not look like them or have the same background. So if you ll indulge me, here is my story on Junji Sarashina.

【video begins】

Buckley

For those people who lived through the bombing of Hiroshima and Nagasaki, remembrances today were particularly poignant. We learned that some 300 A-Bomb survivors live right here in Southern California. I sat down and talked with one of them, who told me that every August, his mind drifts back to Hiroshima.

Sarashina

“It s a miracle that I m still alive”.

Buckley

Because Junji Sarashina survived this. (the sound of bombing) The detonation of an atomic bomb. Sarashina was technically an American when it happened. Born in Hawaii to Japanese parents, he had moved back to Japan with his mother and siblings a few years before the war began. On August 6th, 1945, Sarashina was 16 years old. He was just over a mile away from ground zero when the bomb was dropped.

Sarashina

“It was a tremendous blast, light and I knew that I was flat on the ground. A building had collapsed around him”.



### Buckley

He was scratched and bruised, but alive. What he says next, was this.

### Sarashina

“An entire city reduced to rubble.”

### Buckley

It was just a flat, ashes, that is all there was to be seen. It's hard to believe that one bomb flattened the whole city. 140,000 people were killed. Sarashina's family survived. They were living just outside of the city. But many of his friends, most of his buddies from high school were gone. The freshmen classes, they had 250 students, only 6 survived. Among them, Junji Sarashina, who would eventually move to America and serve in the US military, who would settle in Southern California, have a career and a family, who would appreciate every single day he lived, after Hiroshima.

### Sarashina

“It forces you to enjoy every life, every moment you have on this earth.”

### Buckley

Sarashina says that he owes that to those who didn't have the chance to live their lives”. This 76-year old also feels a responsibility to them, and to future generations to continue talking about what he remembers, to continue speaking out against any future use of nuclear weapons.”

### Sarashina

“It's my obligation to tell the experience to the people in the world. Not too many people went through something like this. Not too many people crawl out of the hell and talk about it today.

### Buckley

Sarashina is the Director of the American Society of Hiroshima and Nagasaki A-Bomb survivors. He says that there are about 800 survivors in America today. Every other year, Japanese doctors come to the US to give the members check ups to see if they are suffering from any effects of the A-Bombs. Sarashina says so far he has not any problems.

### co-anchor

And how brave of him to be able to speak out about it too.

### Buckley

It's difficult each time he talks about it, but he feels compelled to do it.

co-anchor

Yeah, nice story.

【video ends】

### **Buckley**

We were the only TV station in Los Angeles to interview Mr. Sarashina. My hope is the Hiroshima remembrance was more meaningful to our viewers after seeing my story, and I thank you for watching it.

I also want to thank the Japan foundation Center for Global Partnership, Japan's Ministry of Foreign Affairs, The Japanese American National Museum, the Consul General and his staff in Los Angeles, and all of you here in Nagoya for this wonderful opportunity to have a dialogue with you today.

Domo Arigato.

### **Hirano**

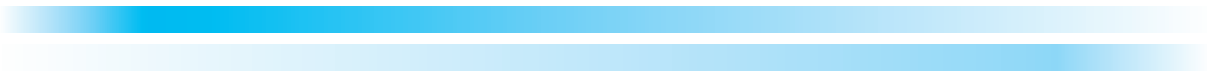
Our fifth speaker this afternoon will be Dr. Karen Suyemoto. This also is her first trip to Japan, and she is an Assistant Professor in the area of psychology and Asian American Studies in the University of Massachusetts in Boston. So I will turn the podium over to Karen.

### **KAREN L. SUYEMOTO**

**( Assistant Professor, Psychology and Asian American Studies, University of Massachusetts, Boston )**

Good afternoon. It is a pleasure and an honor to be here today. I would like to thank the Japan Foundation's Center for Global Partnership, the Ministry of Foreign Affairs, the Japanese American National Museum and the International Center, as well as the Consul General's Office of Japan in Los Angeles and Boston for making this possible. I also thank all of you who have come to hear our remarks and contribute to increasing the understandings between the Japanese people and Japanese Americans.

I am a faculty member at the University of Massachusetts, Boston in the departments of psychology and Asian American Studies. As a clinical psychologist, I have been trained to provide psychotherapy as well as conduct research related to mental health and interventions. I am also an Asian Americanist. Although people from Japan, China and Korea, for example, may not consider themselves as one group when in their home countries, within the United States they are racialized into one group, Asians, and we have been treated as a single group legally and socially. Asian American Studies is a multidisciplinary field that therefore aims to increase awareness and understanding of the shared experiences as well as the uniqueness and diversity among people with heritages in Asian home countries. Asian American Studies also aims to support Asian American students by providing education that is related to their individual and



community experiences. Finally, Asian American Studies actively aims to use education to contribute to social justice for Asian Americans and other racial minorities. Although being in two disciplines is unusual for academia, my experience has been very positive, with the integration of the disciplines supporting the reasons why I have chosen academia.

My desire to be a psychologist originally stemmed from my desire to make a difference in the world, to contribute something that would help others. As a child and a teenager, within my own family and with friends, I had seen the pain, isolation and feelings of helplessness experienced by individuals and families coping with mental illness. I thought that perhaps I could make this experience better for others and that I could contribute in some ways to healing and empowerment.

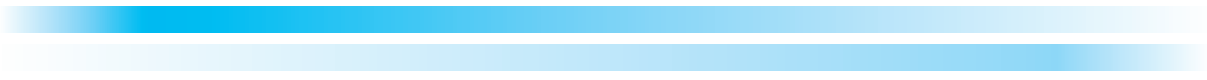
I had initially thought that I would help others by being a therapist, providing services within the community. However, as I progressed through my education, I saw the challenges faced by racial and cultural minorities, such as negotiating multiple cultures with different values and behaviors and dealing with racism. These issues were not well addressed within psychology. In fact, the lack of attention to racial and cultural differences has led to research and therapy that was, at best, less helpful than it could be and at worst, actively harmful to racial and ethnic minorities. The recognition that my own field, which aimed at helping people, might actually be harming them contributed to my choice to become an academic. Although I knew that providing therapy was one way to help others, I felt that I would have a larger impact if I could contribute to changing the values and norms within the discipline itself.

Thus, my work is focused on teaching and research related to psychological issues facing Asian Americans and other racial minorities in the United States. I teach courses related to race, culture, and mental health. I also conduct research focusing on Asian American psychology. In the remainder of my remarks, I'd like to share a couple of stories from my work experiences that illustrate some of the psychological issues facing Asian Americans.

Japanese Americans and Asian Americans generally in the United States have many of the same mental health challenges as White European Americans related to work, family changes, stress, and those types of things. In addition, however, Asian Americans also face mental health challenges related to being culturally and racially marginalized.

Compared to European American culture, Asian based cultures have different values, expectations and behaviors that are considered healthy and socially adaptive or acceptable. The issue is not whether one set of values is better than the other, but whether there is an understanding of the differences and their possible meanings.

For example, in a consultation that I did with a university counseling center, one of the counselors



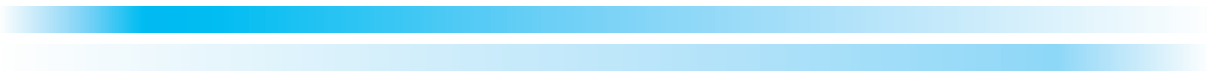
described how several of the Asian American and Asian international students who came to the counseling center about academic difficulties would drop out after one or two sessions. When I asked to hear more about what happened, she described an example of a young woman, Ann, who came in to speak about her poor grades in biology. Ann talked with the counselor about how she didn't really like biology but she really wanted to do well because her parents wanted her to be a doctor. The counselor asked what subjects Ann did like and she responded that art was her favorite subject. The counselor continued to ask questions that encouraged Ann to make her own choices and to pursue her own interests. Ann initially seemed distressed by these questions but then she nodded politely as the counselor spoke. The counselor felt that Ann was feeling empowered to make her own choice. However, Ann did not return for her next appointment. In speaking with me, the counselor said that she thought that Ann was "enmeshed" with her family, which means that she was unhealthily dependent on them because she was not able to make her own choices.

This story is related to cultural differences of individualism and collectivism. The United States is a very individualistic country. We value independence, personal choice and freedom, and individual achievement. Many Asian cultures, in contrast, are more collectivistic, valuing interdependence, reciprocal obligations, harmony within relationships, and the achievement of the group. There are benefits to both of these kinds of values. Although psychologists such as Hazel Rose Markus, An American psychologist, and Shinobu Kitayama, a Japanese psychologist, have researched these differences, many within psychology – and most who are not in psychology-aren't fully aware of different cultural worldviews, particularly if they are European Americans. They frequently assume that other people think as they do and value what they value.

This kind of assumption leads to unintentional discrimination in services, such as Ann's experience, as well as cultural discrimination related to mental health challenges. An example that has been spoken about already today that is faced by Asian Americans, is the glass ceiling, where Asian Americans are not seen as having leadership ability. But this view is based in culture because "leadership" is defined within the U.S. cultural norms related to individual achievement and independent decision-making, rather than furthering the group as a whole through consensus building as a style of leadership.

Racial discrimination also affects Asian Americans in our life opportunities and in relation to our mental health. Psychological research such as that done by John Dovidio indicates that most European Americans are unconsciously and unintentionally racially biased. This racial bias, even if unconscious and unintentional, is felt by Asian Americans and has negative effects such as stress and social anxiety. Some racial discrimination is more explicit and intentional, and Asian Americans must deal with this as well.

Recently in one of my classes when we were talking about workplace experiences, a student said to me and to the other students that coworkers called him dirty because he ate dogs (which he didn't actually).



He felt that this discrimination was because he didn't speak English well, and he wanted to know how he could more quickly improve his English so his coworkers would stop calling him names. The racism that this student had been experiencing was creating stress for him and was making him feel ashamed about speaking his native language. However, he didn't understand this as racism. He thought that it was because of something he was doing – that he was speaking English with an accent. And he didn't realize that people of Asian descent born in the United States who speak fluent English are also told these things. Helping this student identify and label racism, helping him understand the history of racism against Asian Americans, and describing the mental health effects of this kind of racism, helped him stop blaming himself and preserve his pride in his language and in his culture.

In my work, through teaching and research, I educate Asian American and non-Asian American students and therapists about cultural differences and racial discrimination and their own and others psychological development, mental health and therapy services. I teach students to become aware of cultural values, racial perceptions, and experiences with racism that have shaped their own experiences and expectations. I also conduct research that adds to this body of knowledge, such as projects exploring racial and ethnic identities and mental health in multiracial Japanese European Americans and in Korean trans-racial adoptees.

For Asian American students, this kind of education can help them consider difficulties that they are having as social interaction challenges rather than personal deficits or personal problems. Students who are not Asian American become aware that there are different ways to view the world, and that valuing other approaches can contribute to a richer experience and more skills and strengths to draw from, in business organizations for example. Educating students who are not Asian American about racism is equally important, because changing the social acceptability of racial discrimination takes commitment and action from all people, not just from racial minorities. For psychologists in training, the awareness of racial and cultural differences is absolutely necessary in order to avoid pathologizing clients' experiences and to provide therapy that values the cultural and racial contexts and backgrounds of each client.

By learning about cultural differences and racism, students develop understandings that empower them to take action to change the social interactions related to cultural and racial discriminations. This is the particular focus of one of my current research projects, exploring how education can effect Asian American's feelings about themselves, about Asian American communities, and about taking action against racism and discrimination.

Furthermore, the racism that Asian Americans experience is frequently directed against us as a racialized group, regardless of our particular ethnicities. By understanding how being racialized as Asian American brings us together as targets of discrimination, we can also understand how we can create an Asian American identity that brings us together to resist discrimination, to focus on our shared

experiences, and to create social and political coalitions to create change. Thus, students in my classes frequently develop a political identity as Asian American and see greater connections between their own experiences as Japanese American, for example, and the experiences of Cambodian Americans, Korean Americans, Chinese Americans and Vietnamese Americans. Particular examples of how my own work supports this kind of coalition building includes my research on multiracial Japanese Americans and their experiences of belonging and exclusion within Japanese American and other Asian American communities. This highlights how racial ideas affect our own attitudes within the community. An example of connections between diverse Asian groups is a research project that one of my graduate students conducted examining how the traumas experienced by Cambodian refugees have affected their children raised in the United States. This research was informed by past research examining the intergenerational effects of the World War II Japanese American camps. An example of Asian American unity and leadership at the organizational level related to education is the Japanese American Nisei Student Relocation Commemorative Fund. This fund was established to commemorate the scholarships that were provided to Japanese American youth interned during World War II. Through voluntary commitments by Japanese American Nisei in New England and around the United States, this fund has provided scholarships to support and enable students from Southeast Asian refugee/immigrant backgrounds to attend college since 1982. This year the fund is particularly supporting Vietnamese, Lao and Cambodian students who were affected by Hurricane Katrina to enable them to continue their studies.

In my research, I focus on how Asian Americans negotiate complex meanings of race and culture within the United States, as well as how we may intervene to create a more positive sense of self and community. Within my classes, through teaching about race, culture and psychological development, I have seen students becoming aware of the individual and systematic impacts of race and culture for themselves and others. And I have seen students' awareness grow into understandings and skills that lead to commitments to resist or undo racism. This includes, of course, providing services that are racially and culturally competent. As an academic I continue to feel that I have the possibility of meeting my early goal of making the world a better place by contributing to understandings of the impact that race and culture have and by teaching future generations to change the negative impacts of race and racism and to embrace and appreciate the positive possibilities of cultural diversity. Thank you.

## 【質疑応答 Q and A session】

### Hirano

The question was, "Isn't there a lack of participation or action within the Japanese American community? What can be done to promote leadership and action among younger fifth and sixth generation Japanese Americans?" Why don't we start with Donna, and then maybe Frank can add on.

---

## **Fujimoto Cole**

What can we do to help foster the leadership of Japanese American Youth? With associations like the Japanese American Civil Liberties Group (JACL), they are getting stronger and they are asking for younger people to come in and take over the leadership of the organizations such as in Denver Colorado with Kerry Hada. We are also seeing more Asian Americans including Japanese Americans, third and fourth generations joining and starting political action committees. So these PACs raise awareness of issue in the Asian Community as well as campaign dollars for political candidates. Other Asian organizations are also raising money to help fund qualified Asians into political office. So we hold parties and receptions to show our political clout for Asians, and especially for Japanese Americans.

## **Buckley**

I would respectfully disagree with the premise of the question, that we need to get them more involved. The suggestion is that they are not involved and I respectfully disagree. We have Japanese Americans involved in all levels of government now, local government, state government, federal government in high positions of authority, right up to the cabinet level in Washington. That is one thing that I would say. Also, Japanese Americans are very involved in behind the scenes work, and they are courted heavily by politicians who are running for elective office, both for their support and for their money. So, I think that Japanese Americans are very involved in the political process and in all aspects of society in America. Can we always be more involved? Yes, but you would be proud by the level of involvement of Americans of Japanese descent in the American process.

## **Takeda**

Actually, we have received a total of 19 questions. I must apologize in advance that we will not be able to address all of them. Also, I would like to ask questions that are similar in nature at once. First, there is a question regarding the video that Frank showed us. "I was moved by the report on Hiroshima. I had a discussion about the atomic bomb with a radio broadcaster from the South in the United States, who was visiting the 2005 Aichi World Exposition. He said that it was not necessary to drop the bomb in Nagasaki. I told him that the same held for Hiroshima. What were the reactions or empathy responses to Frank's report?" There is another question. "By showing this video don't you get criticized for displaying information that is excessively in favor of the Japanese?"

## **Buckley**

The reaction is that there is no reaction that I know of. I was talking to Craig that his mom watches our channel, and he thinks that she probably liked it. I know that my *okasan* probably liked it. To be truthful, I think that most Americans do see that it was a very difficult moment in history, and I think that we can all go back and relive the debate over whether or not it was appropriate, and at time of war should you take a drastic action like that? Should the US have invaded? Should Japan have surrendered earlier? It is a debate that is endless and could go on and on. But I think that most Americans see that as an unfortunate

moment, but they also see it as, in their view, a necessary moment. I think that if you ask most Americans, they feel horrible that that type of weapon was used. So this idea that's a story like that and reliving this moment and taking us back, I don't think people see that as a pro-Japan story, or as an anti-America story. It is a story of a moment in our history, and I don't think that people resent it. I didn't try to present it as an anti-America story or a pro-Japan story, I just tried to present it as a snapshot of that moment in time, something that we shouldn't forget, and that we should always keep in mind, and that is a moment that we can relive it on the Day of Remembrance. I think that is my answer.

### **Takeda**

Thank you. Next, there are several questions for Phillip Kan Gotanda. "Mr. Gotanda, your play was performed in Japan, in Japanese language to an almost entirely Japanese audience. How is the situation different from its performance in its home country, USA? Also, do you think that there are differences in performance methods?" There is another question for Mr. Gotanda. "Do you think that your ethnicity or the fact that you are Japanese American has ever led to misunderstanding of your productions or some other unexpected effect?"

### **Gotanda**

When I saw the Japanese language production of "Sisters Matsumoto", produced by the \*Mingei Gekidan\* – it was translated by Mr. Yoshi Yoshihara - the first thing that I noticed was that the audience was homogeneous. Entirely Japanese. This was quite different for me. In America the audience might be 5% Japanese American, 30% Asian American, another percentage African American or White or Hispanic. And since this play deals with being Japanese American in a Japanese American family with its culturally specific ways of thinking and interacting – indirection, what's spoken and unspoken, familial obligations, residual effects of the Internment Camps – the levels of understanding and experiencing the material will vary according to the audience's familiarity with the world. That is simply the nature of presenting a play that is specific to being Japanese American in America. There are degrees of understanding to the theatrical experience. My approach is to make the material truthfully portrayed from the point of view of the characters without accommodation. Those who may not have had the same experiences must come to the material and grow with it and into its world. This is not arrogance, this is a strategy for furthering the knowledge of and institutionalization of our stories.

Now, in Japan, the experience was totally different. I have never had the experience where the entire audience experiences and understands the play at the same time, in the same way. Everyone. This was a revelation. I am used to presenting plays where a small segment of the audience truly "gets" it, understands it, as opposed to an audience where everyone leans forward at the same time, laughs in unison, feels a strong emotion in concert. So for me, my theater the experience in Japan was very special, and very illuminating.



In terms of the second part, as to whether I have encountered certain difficulties when trying to present my material, here is an example of a related and less obvious pitfall. I was working in Los Angeles with one of the largest and most well-known theatres in the country. I had written a play called, "The Wash", about a Japanese American family. In this particular theatre, it was a corporate environment in that we would sit around in a circle, like a board meeting, and critique the play. One of the big criticisms that came up was that the characters didn't deal with an issue directly. Everyone talked around the issue. This was the general consensus of the room. It was as if I had written about an incorrect, false, family dynamic. And I must tell you, when you sit in a room with some 30 people and they are supposed to be top theatre practitioners in the country and they are all telling you, "Your characters are not talking to each other", "Get to the point, don't beat around the bush", it's easy to be thrown and question yourself. But I stepped back a bit, and I began to realize that, no, to write a play from a Japanese American family dynamic, I had to write it that way. They didn't talk directly to each other, they communicated indirectly. And if you read my works, I do hope you'll feel the truthfulness of the family dynamic portrayed. That is an example of how, when you bring your material to a theatre unaware of your particular world, you have to fight and basically help them learn and understand material from your perspective.

### **Takeda**

There is another question for Mr. Gotanda. "Hollywood movies often show confusion between Japanese and Chinese cultures. This is seen in movies such as Steven Spielberg's latest film "Memoirs of a Geisha", which is titled "Sayuri" in Japanese. Another example is that of Alan Parker's "Ai to Kanashimi no Tabiji" which is titled "Come See the Paradise" in English. Do you think it deals correctly with the strong bonds of a Japanese American family in an internment camp or the hardships faced by Nisei and Sansei Japanese Americans? "

### **Gotanda**

I'll respond to both very quickly. In terms of the first question about Hollywood and some of the films not being able to draw distinction between Chinese and Japanese and kind of lumping it all together. That is Hollywood. It can be a carry over of old stereotyping that there is no real important distinction, or, a more contemporary perspective that we shouldn't have to worry about distinction in this new color blind, liberal, society. Both I feel are bogus arguments. But additionally, I do think it can also be a matter of economics. As in the case of "Memoirs of a Geisha", I do wonder if it was also about "selling the film". The producers were thinking "we are going to use these particular big stars who are in the public eye right now and it will draw the widest range of audiences considering both domestic and a range of international markets. The second film concerns "Come and See the Paradise": I am not sure if all of you know the film, it was by a British director and used the Japanese American Internment Camps as an important backdrop. The storyline was about a white male played by Dennis Quaid having a romance with a Japanese American woman, actress Tamlyn Tomita - it was a love story. This was the center of the story. Of course, most of the Japanese American community was very upset that this film with a Japanese American

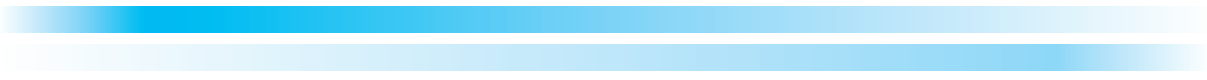
Internment Camp theme was going to have a white male inserted into a world where the norm and most likely scenario was that it would be a Japanese American male. In fact, I did have a meeting with Alan Parker. He called me up and wanted to meet with me because there was a great deal of criticism coming from the Japanese American community about this very issue. We met and Parker basically asked me to come on board and support the film which, of course, would help deflect the criticism. With an offer of a film credit and money. A political move which I turned it down. His argument was that if he did not use a white movie star in the lead role, he would not be able to get financing. Perhaps, but I ultimately felt it was just what he, Alan Parker, wanted: A white male opposite the Japanese American woman. The film didn't do well. And the problem with that is, there are so few films done on Japanese Americans if one fails, you won't see another for ten years. And, unfortunately, that is what the film did.

### **Takeda**

Thank you Philip. I now want to move on to the next question. It is from someone who is part of a Japanese language volunteer network in this area. "What is the best choice of mother tongue for people with various origins? Is it the language of the country they were born and brought up in, or is it the language of the ethnic group to which they belong in that country? For example, in the case of Korean Americans, is it English or is it Korean? Which is it that they ought to adopt? Or is it best that they become bilinguals? What are your personal opinions on this?" Karen, I think this is somewhat closer to your area of expertise. Do you have any opinions on this?

### **Suyemoto**

The question had two parts to it. One part was about which language they choose, and the second part was about which language they should choose. I am going to speak first to, "which language do they choose?". I think that it varies a lot and the variability relates to the particular ethnicity, it relates to acculturation, it relates to experiences of racism and discrimination. It relates to generation. So in the opening remarks, it was noted that many Japanese Americans, for instance the majority of our delegation don't speak Japanese, and among ourselves, we have had discussions of that. And I think that it is related to two major things; one is that most of us are third or fourth generation, which means that we are several generations removed from having been brought up in a culture that speaks Japanese primarily. And the camps and the ways in which the experience of racism really stamped out or worked to stamp out the culture and the language within our communities. Those types of things happened as well in Korean or Vietnamese or Cambodian and Chinese communities. However, in those communities there are a large number of immigrants. There are not really large numbers of Japanese immigrants the way that there are large numbers of Chinese immigrants, for instance. So, the language gets re-infused at the first generation level into other communities, so it becomes a more complicated thing of what choice people make about their language. Many times, children will grow up speaking an Asian home country language and then go to high school and start to lose it because they feel a much greater sense of the need to acculturate. Which language should they choose? From a mental health point of view, holding onto your language is related



to holding onto your culture, and – particularly for a person in a racialized group – has protected factors for mental health. So, it is associated with higher self-esteem and lower social anxiety as well as number of other kinds of more complicated relationships. However, for Asian immigrants or Asian immigrant families to hold on to their language, the United States as an educational system and as a government has to do more than what we do to support bilingual abilities, which is not something that we do particularly well.

### **Takeda**

Thank you, Karen. For our next question, I would like Craig to answer first and then others can give their additional responses. Our theme today was the workplace. So, the question is, “Do the panelists feel that in their respective workplaces and professions relations are good with minority groups other than the Asians? In particular, are relations good with African Americans? If there are some areas that could be improved, what are these?”

### **Uchida**

Am I on good terms with other ethnic groups or racial groups? My answer is yes, I think that I have worked very well with other races and ethnic groups. In particular in Washington DC when I worked with the Justice Department, I recruited and encouraged minorities to work for me and work with me, which is, and I hate to admit this, a rare case within the Justice Department frankly. When I was in charge of a large office of about 200 people, I always, always encouraged hiring minorities – African Americans, Hispanics, Asian Americans, as well as Caucasians, and my relationships overall have been very positive with other races. One thing that I will mention is that I do work with the police service in Trinidad and Tobago. In Trinidad, it is an island of about 52% African and 48% East Indian and Pakistanis, so I generally would say yes.

### **Buckley**

I would say that everything in America takes place against a backdrop of race. You may have heard that in the United States, we pride ourselves on being a “melting pot”, maybe you have heard that phrase before. We take people of many races, ethnicities, backgrounds, countries. We come together in a pot and we melt together in theory, and come out the other side and everything is wonderful, but sometimes things don't mix well in the pot, until they have cooked properly, until they have had time to simmer. I think that is the story of America. We are constantly seeing new immigrants, right now, Latinos are the predominant minority population that is coming into America, and there are, as every immigrant population has faced in America, there is discrimination, there are people who point fingers, who scapegoat new immigrant populations. The Italians have faced it, the Irish have faced it, the Japanese have faced it, the Chinese have faced it. Latinos are facing it, African Americans face it in a different way, but everyone has faced some sort of discrimination.

To the question about, “Do we work well together”, again like Craig, I feel like I work well together with other people and someone specifically mentioned, African Americans, I feel I do. Part of it for me is that I came from a place where my friends as I was growing up were part of that melting pot. I think others don't have this exposure, so they come from a place of ignorance, and where you have ignorance, you have misunderstanding. In the workplace, since we are talking about the workplace, most companies in America actively work to try to make sure that there aren't those misunderstandings, and people are not mistreated. Are they mistreated? Yes, but they are not supposed to do that, and it is against the law to do that. We are working on it, I know that is not a satisfactory answer, but it's a long one.

### **Gotanda**

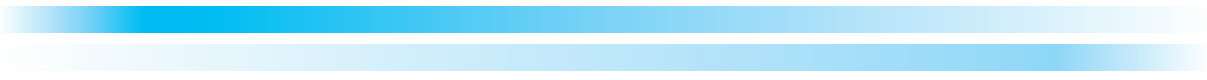
I would like to respond quickly. Again, I work in theatre, and I am presently working on a play that has to do with Japanese Americans and African Americans. I think that the issue of understanding each others cultural, ethnic and racial points of view is very, very difficult, and very, very complex. When we rehearsed a scene where there were African American and Japanese American characters dealing with racial issues, it required a lot of sitting down and talking in an honest manner. These are volatile issues and there was a lot of tension in the room. The frank discussion of race always does this. The African American fellow is a well-known actor, he wanted the play to work, but it is just so difficult at times - to be able to communicate issues of race when it is so personal, sensitive with an inherent history of distrust and betrayal. And I think sometimes the communication got so blocked by each having a different interpretation of the same situation, that we found if we could just both look at the same thing, point to it and know we were BOTH talking about that SAME thing, that that was about as close as we could get to a mutual understanding of a situation. Another words, the idea of even just talking TO each other was something we weren't capable of doing yet. There were too many areas of misunderstanding about basic issues of the racial and social relationship. The most we could hope for was that we could both look at the same thing and say, “that is what stands between us – we don't know what it is, but we are both looking at the same thing at the same time”. Not that I am not hopeful for race relations in America, but it's a very difficult road, and at this point of time, I don't think we as a country, America, have the answers.

### **Hirano**

Earlier we had a question about the political involvement of Japanese Americans, and I am going to ask Sharon Santos to take a few moments to respond from her perspective as someone who is an elected official in the State of Washington. She is very well known for encouraging younger Asian Americans to become involved in the political process as well. Sharon, will you talk about your own experiences in being a member of the Washington State Legislature and then how you encourage other Asian Americans to consider going into politics?

### **SHARON TOMIKO SANTOS ( Washington State Representative )**

I am very proud to serve as the first Japanese American woman Legislator, not only in the State of



Washington, but in fact on the entire United States Mainland. That distinction does play some pressure on me to ensure that I serve as one role model for other Asian Pacific Americans and other Japanese American members of my community to consider a profession in the field of public service, which is what I see this as. You have heard many of our panelists speak about the opportunities we've been given, to be able to make a difference, not only by using our skills, and our expertise, whether it be in the arts or in business or in journalism or in academia, but it's also very equally true that unless you have a position in being able to make decisions, then you are not able to effectively change people's hearts and people's minds. And so, being a role model and having younger people see, "Aha! There is a Nikkei woman who is helping to change people's minds and hearts and make decisions that are fair on the half of all other constituencies," is an important part of inspiration. The second point that I would simply make is that it also does require that one takes an active role in putting oneself in the community encouraging young people to become involved in the political process, whether that be through campaigns and elections or hiring people on staff. I have the distinction of having a quick turnover on my staff because I specifically go out looking for young, new graduates of color to come into the legislature and have that kind of experience both in terms of the political process, sharing the frustrations, but also then being able to understand how you become a change agent within an institution like a political organization. And I am very, very proud that the legislative assistants that I have hired have gone onto places like Columbia Law, and have gone onto working for Caucus staff in other professional careers, and it is about widening the pipeline, so that we can get more people into positions of power.

### **Hirano**

We have come to the close of our session and we certainly could have gone on for a much longer time. Again, I would like to thank each of you for joining us this afternoon. We look forward to personally meeting you in the reception. I would like to thank the five panelists, we are very proud of their presentations, certainly proud that we have individuals such as these Delegates, that are in prominent positions, that are mindful of their own backgrounds and do a great deal to open the doors for other persons that will follow them. As I said in the beginning of this program we want to have Japanese Americans who are in important leadership positions also understand the particular role that they can play in fostering the US-Japan relationship. We look forward to seeing you in the future at other events. And of course we invite you to come and visit us in the United States. Thank you.

### **Takeda**

I must again apologize for not taking all the questions you presented us. Please do feel free to ask questions at the reception. Some of the questions raised pertained to themes are covered in last year's report. So, you can refer to that as well. Also, I really appreciate that each of the five panelists contained themselves to the allocated ten minutes even though they probably had much more to say. I think it is tremendous that these leaders from diverse spheres could summarize everything in such limited allocated time. Thank you.



Biographical Information of Coordinators / Panelists

About the Japanese American Leadership Delegation to Japan Program

## Biographical Information of Coordinators/Panelists

### COORDINATORS

**IRENE Y. HIRANO** President and CEO, Japanese American National Museum, Los Angeles

Ms. Hirano is President and Chief Executive Officer of the Japanese American National Museum in Los Angeles, a position that she has held since 1988. A recipient of bachelor's and master's degrees in Public Administration from the University of Southern California, Ms. Hirano has more than 30 years of experience in nonprofit administration, community education and public affairs with culturally diverse communities nationwide. Ms. Hirano's professional and community activities include currently serving as Chair of the Kresge Foundation, Board member of the Ford Foundation, Vice-Chair, American Association of Museums, National Board member of the Smithsonian Institution, member of Toyota Corporation's Diversity Advisory Board, and Business Advisory Board of Sodexo Corporation. She previously served as a member of the President's Committee on the Arts and Humanities by Presidential appointment, Chair of the Los Angeles Visitors and Convention Bureau, and Board member of the Smithsonian Institution's National Museum of American History.

**OKIYOSHI TAKEDA**

Associate professor at School of International Politics, Economics and Communication at Aoyama Gakuin University, Tokyo

Having received a Ph.D. from Princeton University in 2000, he has broad research and teaching interests in Asian American studies, US politics, and American studies. He has taught a course specialized in Asian American politics at the University of Pennsylvania, New York University, Columbia University and Japan Women's University. He is currently writing a textbook on Asian American politics with Andy Aoki of Augsburg College.

### PANELISTS

**FRANK BUCKLEY** Co-Anchor, KTLA Prime News [ Los Angeles, California ]

Frank Buckley is co-anchor of the weekend editions of "KTLA Prime News" in Los Angeles. Previously, he was a CNN national correspondent. His international assignments have taken him around the world and across the U.S. and have included stories from Kobe, Hong Kong, Turkey, Ireland and Iran, as well as the Persian Gulf and Arabian Sea (aboard aircraft carriers during Operation Enduring Freedom and Operation Iraqi Freedom). He has reported from the White House and the Pentagon. He covered the Kerry-Edwards campaign, the Hillary Clinton Senate run and the 2000 presidential race and its aftermath. He is a graduate of USC with a double major in history and broadcast journalism. He is married and the father of two boys. He frequently gives his time and lends his name to various community organizations including the Japanese American National Museum.

**DONNA FUJIMOTO COLE** President, Chief Executive Officer, Cole Chemical [ Houston, Texas ]

Donna Fujimoto Cole founded Cole Chemical over 26 years ago at the age of 27, divorced with a four-year-old daughter with \$5,000 from savings. Today, the company's sales are in excess of \$50 million providing; chemicals, fuel, synthetic lubricants, and resins to a wide range of customers and industries. The first chemical distributor to obtain ISO quality certification in 1992, Cole chemical is ranked in the top 100 chemical distributors in the United States by CPI Purchasing Magazine and has been one of Houston's top 10 woman-owned businesses for many years. She serves on several boards including the Asian Pacific American Women's Leadership Institute, Japan America Society-Houston, Houston Minority Business Council and Women's Business Enterprise Alliance, and is co-chair of the Amos Tuck School of Business Minority Business Executive Program Alumni. She also served on President George Bush President's Export Council in 1991. Ms. Cole is a graduate of the Manpower Institute of Technology and Amos Tuck School of Business Minority Business Executive Program.

**PHILIP KAN GOTANDA** Playwright, Filmmaker, Professor [ Berkeley, California ]

Philip Kan Gotanda is a leading American playwright. Through his art and advocacy he has been instrumental in bringing stories of Japanese in the United States to mainstream American theater as well as to Europe. In addition, the Mingei Geikidan, one of the oldest theater companies of contemporary plays in Japan, produced his play Sisters Matsumoto at the Kinokuniya Theater South in Tokyo. A Song for a Nisei Fisherman and The Wash have also been produced in Japan. Mr. Gotanda is also a respected independent filmmaker. His film Life Tastes Good screened at the Sundance Film Festival and can be seen on the Independent Film Channel. Mr. Gotanda holds a law degree from Hastings College of Law in San Francisco and studied pottery in Mashiko, Japan with the late Hiroshi Seto. He is the recipient of the Guggenheim Fellowship as well as other writing awards and honors.

**CRAIG D. UCHIDA, PH.D.** President, Justice & Security Strategies, Inc. [ Silver Spring, Maryland ]

Dr. Craig Uchida is the founder and President of Justice & Security Strategies, Inc., a consulting firm that specializes in criminal justice, homeland security, and public policy issues. During Dr. Uchida's 25-year career in criminal justice he has served as a professor at the University of Maryland, the Director of Research for the National Institute of Justice (U.S. Dept. of Justice), and as the Assistant Director for Grants Administration at USDOJ. He received his doctorate in criminal justice from the University at Albany (NY) and holds a masters degree in American History and one in Criminal Justice from the State University of New York at Stony Brook and Albany, respectively. He is the former president of the Japanese American Citizens League Washington D.C. Chapter, serves on the Board of Directors of the National Japanese American Memorial Foundation, and is a commissioner for the Montgomery County (MD) Criminal Justice Coordinating Commission.



## KAREN L. SUYEMOTO

Assistant Professor, Psychology and Asian American Studies, University of Massachusetts, Boston [ Boston, Massachusetts ]

Dr. Karen Suyemoto's teaching focuses on multidisciplinary understandings of intersections and effects of race, culture, gender, and identities, and how they relate to mental health and social activism. Past publications and presentations have focused upon multiracial Japanese Americans, and on feminist applications and connections with multicultural understandings in psychology. Her current research projects explore how community and education interventions may affect racial and ethnic identities and empowerment in Asian American youth and college students. Dr. Suyemoto is a licensed psychologist. She received her Ph.D. in clinical psychology from the University of Massachusetts, Amherst and completed her internship and postdoctoral fellowship at the University of California, San Francisco, School of Medicine. She has served in leadership capacities in local, regional, and national organizations, including as the co-director of the New England Center for Inclusive Teaching, 2004 conference program chair for the Association for Asian American Studies, and the current Vice President of the Asian American Psychological Association.



## Japanese American Leadership Delegation to Japan Program

This symposium was held with the panel consisting of delegation members visiting Japan for the “Japanese American Leadership Delegation to Japan Program.”

Sponsors: Ministry of Foreign Affairs  
Japan Foundation Center for Global Partnership


With the cooperation of: Japanese American National Museum

### The Japanese American Leadership Delegation to Japan Program

Although the Nikkei people have profound relations with Japan in terms of their background, their connection with Japan has been increasingly weakening as generations shift. Seeing that, however, it is both necessary and essential to build up a network based on person-to-person communication in order to deepen mutual understanding between Japan and the U.S. and strengthen Japan-U.S. relations now and in future years, the role that Japanese Americans could play in building up such a network is presumably significant. As Japanese Americans occupy an important place in American society as a group that symbolizes the diversity from which the vitality of the U.S. derives, understanding the Japanese Americans will lead to deeper understanding of the U.S. as well. It is based on such a conviction that the Ministry of Foreign Affairs and the Japan Foundation Center for Global Partnership, with assistance from the Japanese American National Museum, set up opportunities for communication between young-generation Japanese American community leaders and the people of Japan, who are each taking an active role in the front lines of society.

The delegation members first stopped over in Kyoto and got in touch with the traditional Japanese culture through the experience of attending a Noh play class at the Kongo Noh Theater and visiting the historical sites including the Kiyomizu Temple and the Sanjusangendo Temple. The next day, they moved on to Nagoya to pay courtesy visits to the City Office of Nagoya and Consulate of the United States Nagoya and in the afternoon to participate in a public symposium titled “From Arts to Business: Japanese Americans in the Professional Arena”. Before leaving Nagoya, the members made a tour of Tsutsumi Factory, Toyota Motor Corporation and visited Toyota Kaikan. During their stay in Tokyo, they had frank exchanges of opinions with leading figures and experts from a cross-section of society, including Diet members, Keidanren members and journalists. Each member of the delegation, who gained a deeper understanding of modern and traditional Japan through all these activities, is expected to take specific actions intended to strengthen Japan-U.S. relations from a long-term perspective.

This program was started by the Ministry of Foreign Affairs in 2000, and has been co-sponsored by the Japan Foundation Center for Global Partnership since 2003.



**Participants** ( other than panelists )

SHARON TOMIKO SANTOS  
Washington State Representative, 37th District, Majority Whip  
Seattle, Washington

FLOYD D. SHIMOMURA  
Executive Officer, California State Personnel Board  
Sacramento, California

PATRICE TANAKA  
Co-Chair, Chief Creative Officer, Director-Consumer Practice, CRT/tanaka  
New York, NY

JOSE KEICHI FUENTES  
Director, Miami-Dade Regional Service Center, South Florida Water Management District  
Miami, Florida

KERRY S. HADA  
Law Offices of Kerry S. Hada  
Englewood, Colorado

ANN HARAKAWA  
Principal, Two Twelve Associates, Inc  
New York, NY

ROBERT K. ICHIKAWA  
Partner, Kobayashi, Sugita & Goda  
Honolulu, Hawaii

PATRICIA A. KINAGA  
Partner, Jones Day  
Los Angeles, California

ERIC K. MARTINSON  
Managing Director, MN Capital Partners, LLC  
Honolulu, Hawaii

CALVIN MANSHIO  
Attorney and Principal, Manshio Law Firm, P.C.  
Chicago, Illinois

[ Delegation leader ]

IRENE HIRANO  
President and Chief Executive Officer, Japanese American National Museum  
Los Angeles, California

## Schedule

- March 11 (Saturday) Depart US via Narita Arrive in Kyoto
- March 12 (Sunday) Kongo Noh Theater, Kiyomizu Temple, Sanjusangen-do, Walk in Gion
- March 13 (Monday) Depart Kyoto Arrive in Nagoya  
Visit to Nagoya City Hall, American Consulate Nagoya  
Attend the Japanese American Leadership Delegation symposium
- March 14 (Tuesday) Visit to Toyota Tsutsumi Plant and Toyota Kaikan  
Depart Nagoya Arrive in Tokyo  
Reception hosted by Minister Zumwalt and Ms. Kambara, Counselor for Labor Affairs of the US Embassy
- March 15 (Wednesday) Visit to Ministry of Foreign Affairs, the Japan Foundation  
Call on Her Imperial Highness Princess Takamado
- March 16 (Thursday) Visit to the Prime Minister's Office, Meeting with Mr. Yohei Kono, Lower House Speaker, Discussion with Forum 21, Meeting with Mr. Shintaro Ito Vice-Minister for Foreign Affairs
- March 17 (Friday) Visits and meetings with Mr. Glen Fukushima and other Japanese Americans in Japan, the Embassy of the US in Tokyo, Nippon Keidanren, the Diet Members
- March 18 (Saturday) Depart Narita Arrive in US



# CGP

---

発行日 / 2006年10月  
監修 / 青山学院大学 国際政治経済学部 助教授 武田興欣  
発行 / 国際交流基金日米センター  
東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル20階 〒107-6021  
Tel. 03-5562-3542 Fax. 03-5562-3504  
[http://www.jpf.go.jp/j/cgp\\_j](http://www.jpf.go.jp/j/cgp_j)

Edited by / Okiyoshi Takeda, Associate Professor, Aoyama Gakuin University School of International Politics,  
Economics, and Communication

Published by / The Japan Foundation Center for Global Partnership, Tokyo  
Ark Mori Building, 20th Floor  
1-12-32 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-6021  
Tel.( 03 )562-3542 Fax.( 03 )562-3504  
[http://www.jpf.go.jp/j/cgp\\_j](http://www.jpf.go.jp/j/cgp_j)

The Japan Foundation Center for Global Partnership, New York  
152 West 57th Street, 17th Floor  
New York, NY 10019  
Tel.( 212 )489-1255 Fax.( 212 )489-1344  
<http://www.cgp.org>

©The Japan Foundation Center for Global Partnership, 2006  
本書に掲載されている発言はパネリストの個人的な見解です。  
The views expressed in the symposium are those of individual panelists  
and do not necessarily represent any consensus of beliefs.

---

